



追手門学院大学

成熟社会研究所 紀要

Center for Mature Society Research

第7号

2023.3



追手門学院大学 成熟社会研究所 紀要

第7号 2023年3月発行

目 次

論文

考える視線
—ポール・ヴァレリーにおける思索と言語— 齊藤 一誠 1

研究ノート

株式会社 VSN との産学連携による
論理的思考メソッド作成プロジェクトの記録 神吉 直人 29

プロジェクトレポート

学生チームによる小豆島プロジェクトの活動報告 2022
—7年目、新たな交流企画の提案と取り組み— 中川 啓子 47

活動報告

2022年度の活動記録 55

論文

考える視線

——ポール・ヴァレリーにおける思索と言語——

齊 藤 一 誠

目 次

考える視線

註

参考文献

内容細目：仏文抄訳

従って、ここではヴァレリーの何たるかを問わず、ただその在りかを問う。ヴァレリーは何処にいるか、とりわけ我々の裡の何処にいるか、その領域を能う限り明確に画定し、指し示そうと思う。すなわちこれは、「何か」と問うことで見失ってしまったヴァレリーを、再び我々の裡に恢復する試みである。

I

先ずは、ヴァレリーとそれに非ざるものとの境界を、いささか無造作な手で擦ってみることからはじめよう。

いわゆる“実証主義”的学問が残した歴大な成果のうちの或るものは、いまや学説というよりもあやや俗説と見まがうばかり、すなわちその説としての格を上げてきているが、そういう巷説のさなかに置いてみる時、ヴァレリーの意見は実に奇妙な響きをたてる。^{★2}ほとんど“曲説”。しかし、その意見ほど切なるものもまた少ない。ほとんど“告白”。けれどヴァレリーは、およそ自分にとって何の役にもたためことは何ひとつとしてこれをいわなかった。それあたかも、自分たちには何の用もないことを、ただ人にだけ説いてきかせようとする手合いを頭から軽蔑——していたかどうかは定かでないが、少なくともみずからの疑惑・必要からのみ出発する立論を少しも手前勝手とは考えなかった風情。その意味でヴァレリーの意見は、ことごとく、おのれと対象とが真剣で切り結んだところに散った鮮やかな火花に似た。すなわちヴァレリーの“曲説”は、ヴァレリーとそれに非ざるものがつくりなす臨界面に分布していたのである。

そしてここに、ヴァレリーによる評言、その片言隻句を集めることによりひとまずヴァレリーの輪郭を思い起こそうという企てが生ずる。もとより“曲説”が全てヴァレリーに非ざるものについて語られたものである以上、そこにヴァレリーその人が実名で登場する

「何故」という不用意な問いが、かたく結ばれた默契の、その息の根を止めてしまうように、「それは何か」と問うことが、事柄の最も大切なたたずまいをかき乱す。真理を眼の前で手にとることはできない。それを人は、かろうじてうしろ手に捉えることができるのみ。それはまた、事柄の何たるかを問わず、ただその在りかを問うことでもある。^{★1}「何故」という問いがそうであるように、あるがままの姿にとって「それは何か」という問いが放つ光は、往々にして強すぎる。されば人は、時にその問いをひかえねばなるまい。

ヴァレリーに対し「それは何か」と問うた者は多い。そして、そこに然るべき解答が出され、そのいくつかは確かにヴァレリーの面立ちをよく伝えた。実に生き生きと伝えさえた。しかし、それを境に、ヴァレリーは黙して再び語ることはなかった。彫像となりおおせた時、すでにヴァレリーはこときれていたのである。

ここではヴァレリーの何たるかを問わない。すなわち、ここにいうヴァレリーとは、かつてどこかで活動した一箇の“精神”でもなければ、かつてどこかに生きられたひとつの“生”でもない。ヴァレリーとは、他ならぬ我々の“問題”である。ヴァレリーはひとつの課題として、我々の裡にこそいる。我々がそれに気づかないのは、内なる問題群の錯綜混迷をきわめるそのありようの中に、ヴァレリーという秀れて原理的な問題領域その輪郭を、見失っているからにすぎぬ。

ことはあり得ない。しかし“曲解”したのは他ならぬヴァレリーであり、その“曲解”こそヴァレリーというものであった。そこで、ここでは“曲説”という点をにらみつつそれをつなぐ線を仮想しようとする。というのも、その線が描く閉じた図形の中に、ひとまずヴァレリーがいると考えられるからである。

ルネ・デカルト (cogito ergo sum)

「cogito ergo sum (我考フ、故ニ、我在リ)は意味を持たぬ」¹⁾とヴァレリーはいう。この句は、ことばとしての「意味」を持っていない。それは「人間の或る反射運動であり(中略)ひとつの力わざの発現そのものである。」²⁾従って、人々がしばしばそうするように、cogito ergo sum という文句の「意味」を、その文字づらから、「我考フ、故ニ、我在リ」と額面通り受けとって、そこから、これはデカルトにとっての「要請」であるとか、あるいは「推論の結果」であるとか、これを様々に解釈してみてもはじまらぬ、³⁾ということにもなるだろう。「コギト」とは「力のひと突き」⁴⁾であり「知性の反射運動」⁵⁾である。「cogito」という主題は、デカルトの確信の基本的表現として、すなわち彼に何ものをも教えずまた教え得ないが、彼に呼びかけて、その都度みずからの裡にその大きな計画にとりかかる気力を呼びさます、そういうことばとして、何度も出てくるのだ⁶⁾とヴァレリーは考え、それを次のように約言する。

「cogito は、デカルトがその自己意識の諸力に集合を命ずるラッパの響きのように、私には感ぜられる。デカルトはこれを『自我』が奏する主題として、精神の自負と勇気とに対しめざめよと呼びかける起床ラッパの響きとして、繰り返しており、作品の多くの箇所でも幾度もとりあげている。この句の魅力、いや魔力はまさにこの点にあり、この句には実に色々な注釈が施されたが、つまるところその壮快さを感じるだけで十分なのだ、と私は考える。」⁷⁾

レオナルド・ダ・ヴィンチ

ヴァレリーがその若き日「初めての『註文』」⁸⁾に依じてものしたという試論で考察したレオナルド・ダ・ヴィンチは、すでに画家でも建築家でも、あるいは自然科学者でも発明家でもなく、また他の一切でもなく、要するに「史上のレオナルド」⁹⁾、「その名を世界に輝かせたあの人」¹⁰⁾ではなかった。すなわちヴァレリーはいう。

「私のつもりでは、この人間の業績の基底にひとつ

の思考を想定することになれば、もうこれ以上広範な思考はあるまいと思えるほどに多方面にわたる仕事をしてみせた人間を想い描いてみようと思うのである。しかもこの人間は事柄の差異に関して限りなく敏感な感覚を持ち、その感覚はまたその冒険がそっくりそのまま分析と名づけ得るほどのものであること、これが私の註文である。私はおよそ森羅万象がこの人間の測量標となっている様を思い浮かべる。この人が常にその思いを馳せるのは、万有であり、また厳密ということである。それは存在するものの混乱、そのさなかにある何ひとつをも、たとえそれが一木一草であろうと決して忘れることのない人間である。この人は万人のものたるものの深みへと降りてゆき、物事との間に間合いを測り、以てみずからを眺める。この人は自然の習性、自然の構造に手を触れ、それをあちこちからつついているうちに、ふとひとりになって、組みあわせてみたり、ならべてみたり、あるいはかきまぜたり、という具合である。この人間はいくつもの教会堂を建て、城塞を築き、また優雅にして雄大なあまたの飾りつけや幾多の機械・兵器、それに探求に探求を重ねた夥しい数の精密な画をものする。そしてまた、得体の知れぬ偉大なる遊戯の残骸を放り出したまま顧ない。こういうすさびごとの中にこの人の学があるわけだが、それはまた道楽と分ち難く、この人にはいつも別事を考えているような魅力がある……私は、こういう人間が世界のなまなましい全体とその密度の中をいったいどう動いてゆくのかその足どりをたどり、そこで彼が自然に触れるためそれを模倣するほどにも自然をみずからに親しいものとなしつつ、ついにはその中になくともまでを考え出してみようという難事に立ち向かう様を見たいと思う。

思考によって創り出されたこういう人間には、通常では、その果てを見通すことさえそのあまりの遠さにままたならず、その巨体を入れようにも名前がない。今私には『レオナルド・ダ・ヴィンチ』の名にまさるふさわしい名は見あたらぬように思われる。」¹¹⁾

まさにヴァレリーは、みずからもいう通り、「実のところ当時の私に精神の力として見えていたものを『人間』とか『レオナルド』とか名づけたわけであった。」¹²⁾

エドガー・ドガ

人々のよく知るドガもまた、ヴァレリーにいわせれば、単なるひとりの“天才画家”ではなかった。ドガとは「洗練された芸術家」¹³⁾、「長時間にわたる準備

と精密な淘汰とを好む意識家」¹⁴⁾であり、そのドガを最もよく要約するのが「或る姿勢を決定する唯一の線への情熱」¹⁵⁾であるとヴァレリーはいう。^{*}かくして、「きわめて瞬間的なこととアトリエにおける際限のない労働とを結合させることにより、瞬間的な印象を精密な計算の裡に、直覚することをものを追及する意志の持続の裡に、封じこめるという冒険を、彼は敢えて試みた」¹⁶⁾のであり、すなわち「彼にとっての一枚の絵とは、逐次行った計算の結果であった。」¹⁷⁾ヴァレリーの芸術観がのぞく。

ステファヌ・マラルメ

「今私の語っている人、おのれの技法の一切の安易さとそれがもたらす結構な成果を斥け、従って一種の禁欲主義を実行することによって絶対的な愉悦へと赴いたこの人」¹⁸⁾——ヴァレリーのこう語るその人はマラルメである。ヴァレリーは若き日を回想して「私はしばしば彼のことを思いつづけた」という。しかし、ヴァレリーにとってのマラルメとは、生身の人間であるよりはむしろ詩の在りかであったようだ。

「私はしばしば彼のことを思い続けた。しかし生ある人間としてでは決してなかった。彼はそのひととなりや優美なたたずまいからして最も愛されるにふさわしいひとりの人間であったが、その面影の奥底に、詩に関する信仰の醇乎として醇なるものを典型として示していると、私には思えた。」¹⁹⁾

そしてそのマラルメとは「芸術における意志の問題を普遍の最高度にまで高めて、詩篇（ポエム）の一契機たる靈感を待ち望むところから、詩（ポエジー）そのものの天啓を希うところまでのほりつめた」²⁰⁾人であり、「『ことば』を『大初』^{はじめ}ではなく一切の究極に置き」²¹⁾、「詩の外には偶然をしか認めなかった」²²⁾人物である。また、ヴァレリーはその人の手になるひとつの詩篇、すなわち「骰子一擲」に向けて次のような讃辞をおくる。

「私は思った。——彼は試みたのだ、ひとつの紙面を星空の次元にまで高めることを。」²³⁾至言である。

ルネ・デカルト（『方法序説』）

『方法序説』についての見解もまた、思うに創見というべきであろう。

「私は『方法序説』の最も大切な点をたやすく見出す。すなわち『方法序説』とは、自我から、それがみずから欲したわけでもなく、またみずからの裡に見出したわけでもないのに、故なく背負わされているあら

ゆる問題と、固定観念といういわば自我に寄生する思想とを振るい落としてしまうことになった一事件、或る種のクウ・デタ、その一部始終の描写に他ならない。」²⁴⁾

そして以下はその「一事件」,「知的クウ・デタ」²⁵⁾において「1619年、23歳のデカルトが冬の独居において採用し布告した一連の非常手段」²⁶⁾に関するヴァレリーの報告。

「自己自身を知的の領域での全ての価値の源泉とし、判者たらしめようとする決意、(中略)権威にもとづくあらゆる特権の急激な廃止、あらゆる伝統的教育が無効であることの宣言。明証と疑いと『良識』と事実の観察と推論の厳しい構成にもとづく新たな内的権力の創設、精神の実験台の容赦ない清掃」²⁷⁾

デカルトに関するこの報告は、いつしかヴァレリーその人に重なってゆく。

そしてデカルト。「cogito ergo sum に意味はない」と断じたヴァレリーは、デカルトをもまた努めてその哲学から引き離して論じようとする。

「私は哲学者ではない。人々が実にいろいろ研究したデカルトについて私は未熟な第一印象を記し得るのみである。けれども、まさにそれ故、私は、デカルトの形而上学を吟味した議論することによって見出し得るよりもはるかに大きな今日的価値、永遠の今日的価値を、あれほど貴重にして劇的な瞬間 [すなわち例の「一事件」,「知的クウ・デタ」。注記齊藤。]に思いをめぐらせることの中で発見することができる。」²⁸⁾

別席においてはまた「いったい私は、どうも哲学には気がりがしない。(中略)哲学においては、私はアテナイの町に来た野蛮人さながらである」²⁹⁾ともいていたヴァレリーであるが、ここにみる限り、あえて言挙げする以上そこにいささかの自負はあったと見受けられる。さればヴァレリーの発見したものは何であったか。他ではない、「自我」の観念であった。

「彼において私を魅し、私にとって彼を生けるものたらしめるのは、彼の自意識であり、その注意の中にあまねく結集している存在の意識である。みずからの思惟のはたらきに関する透徹した意識。みずからの『自我』を道具として用い、しかもこの道具の間違いない効果をそれに対する意識の透徹度にも依存させるほどにも意識的かつ明確な意識である。」³⁰⁾

「おそらくデカルトの哲学よりも、彼の示すあの素晴らしくも忘れ難い『自我』の観念ほうが、我々にとって価値の多いものであらうと思う。」

従って『方法序説』の評価も、この「自我」の一点にかかってくることになる。

「『方法序説』の中に私の読みとるものは何か。諸原理そのものは我々を長く引きとめ得ない。(中略)私の目を惹く点は、このひとつの哲学の序曲において、彼自身がいつもそこに姿を見せていることである。それは、この種の著作には通常みられない『私』という語の使用であり肉声の響きである、といえる。この点が、おそらくスコラ哲学の建物に対するいちばんはっきりした反対であろう。そして、こういう『私』が、やがて完全な一般性を持つ考え方へと我々を導いてゆくことになるのだが、その『私』こそ私のデカルトなのだ。」³¹⁾

かく語ったのがヴァレリーである。そして、すでにこういった片言のあちこちにヴァレリーその人の面影がちらついている——といえば、必ずやまた、その面影なるものは実にレオナルドやデカルト、あるいはマラルメといった人々がヴァレリーに与えた「影響」のかけにすぎず、ヴァレリーその人のものとはとうてい言えない、という向きがあらわれるに違いない。しかし、そもそも影響とは、みずからに無いものを他から受けとることではなかった。みずからの裡にあまりに深くもぐっていたものが他との出会いを契機として意識の海面へ浮上してくること、これが影響という事件である。³²⁾ されば「影響」の一語を以て事を軽々に断じ去ることはできぬはずである。このことを思い返して、我々は先へ進もう。

以上とりあえず、「曲説」というヴァレリーとそれに非ざるものとの接点をたどることにより、ごく大雑把にヴァレリーの輪郭を擦ってみたわけだが、こういった粗雑な線にさえ、すでにヴァレリーのあたまのはたらきの、その方向ははっきりとあらわれてくる。そしてその向きは、ヴァレリーにおける批評の「方法」、とまではいえぬにしても、その流儀くらいには関わってくるけしき。すなわち、体をつくろっていえば、ヴァレリーは常に対象そのものを十全に語り尽くすことよりも、対象の問題としたところ、あるいは対象の孕む問題を、あえてあらためて、そして何よりもみずから、考え直そうとしていた。その結果は——確かにいささか鬼面人を驚かすの感、また無きにしもあらず。しかしその実、やはり見事に正鵠を射ているということは、先にあげた諸例がおのずとこれを語っている。「私は世間の誰もがしている事柄において誰も見なかったことを私が見ていると信ずるの

を好む」³²⁾ とはいかにもヴァレリーらしい述懐であるが、ここではむしろ「私には、あらゆる題目について初めから(すなわち私にとっての初めから)始めようとする奇妙な、そして危険な、偏癖がある」³³⁾ という発言のほうに注目したい。あらゆる題目をみずからの初めから始めること——しかし、それがまたみずからを超え、対象そのものをも超えて、まさに対象の問題としたところを問題にするという極めて普遍的なところにつながってゆくということ。そこにヴァレリーという問題の一角があらわれている。さればその間の道程を、我々の裡において、もう一度辿り直すこと、これがヴァレリーを恢復する最初の試みである。

II

あらゆる題目につき、あえてあらためて、みずからの初めから考察を始めるということは、きわめて個人的な行為である。しかし、その考察がやがて我を超え、考察の対象そのものをも超えて、まさに対象の問題としたところを問うに至れば、これは俄然普遍的営為の様相を帯びてくる。そして、ヴァレリーという問題のひとつのあらわれは、きわめて個人的な行為がまさに普遍的な営為へ至るといふ、その道すじにこそあるといえよう。そこにヴァレリーがいるともいえるし、より具体的には、そこにヴァレリーの手になるひとつの工夫発明があった。その工夫発明に光をあてながらかの道すじを辿り直してみることに、それがここでの試みである。

ただその前に、我々はひとまず当の工夫発明を遠望できるくらいの高みには登っていなければなるまい。登山のかたちは様々あり得ようが、今仮に次のようなことばから入る。『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法への序説』、その欄外自注にみえることばである。

「一篇の伝記を草する者は——その人物を生きることを試みることもできるし、また組み立てることを試みることもできる。」³⁴⁾

これに続けてヴァレリーは、或る人物を「生きる」ことによって成った伝記が往々にして一篇ごとく世事、逸話、瑣説の集成といった体のものへとはまりこんでゆくのに対し、「組み立てる」ことによってつくりあげられた伝記には「可能なものをも秘めた生存の発生演繹的な条件」が含まれ得るとして、二つの試みの違いを特徴づけている。

もっとも、そういわれただけではいささか判然としないところもあるが、その違いは必ずやこの先におい

て明らかになってくるであろう。今はただ「生きる」ほうが専ら“かくありし”実在の人物に関わるのに対し、「組み立てる」ほうはむしろ“かくあり得た”可能性としての人物を問題にするという傾向に違いを確認しておくにとどめる。すると、今我らにとって唯一はっきりしていることは、この流儀でいえばヴァレリーがものした当の試論が紛れもなくレオナルドという人物を「組み立てる」試みに他ならなかったということ。これは『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法への序説』という論作を読む者にとって、一読のもと、おのずと明らかでなければならぬ事柄に属する。

ただし、すでに成った文を読む読者にとって明白きわまりないこのことも、今まさに筆を起さんとする作者ヴァレリーにとっては先ずもって択びとらねばならぬ事柄であったということ——このあたりにはいささかの注意を払わねばなるまい。というのも、あえて「生きる」ことを捨て「組み立てる」ことを採ったというところに、いわばヴァレリーの態度があらわれているからであり、またその態度がかの工夫発明にかかわってくるからである。

『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法への序説』においてレオナルドその人をあえて「生き」ようとせず、ことさらに「組み立てる」ことを択んだ所以を、後年、ヴァレリーは『追記と余談』の欄外自注でこう述べる。

「個人の最も真実なるもの、最もその人そのものなるものは、その人の可能性としてあるものである——これをその人の歴史から描き出さんとしてもそれは不確かなだけだ。(中略)だから私の試みも、史上のレオナルドというよりはむしろ、レオナルドの可能性としてあるものを私流に考えかつ描くということだった。」³⁵⁾

あえて「生きる」ことを捨て「組み立てる」ことを採ったということは、ここにみられる如く、「史上のレオナルド」を退け「レオナルドの可能性としてあるもの」に着目するというところに重なり合ってゆくわけだが、それもこれも、つまるところ「個人の最も真実なるもの」、「最もその人そのものなるもの」を捉えんがためのことであったというヴァレリーの事情もまた、ここにその姿をのぞかせている。そして、「最もその人そのものなるもの」が「その人の可能性としてあるもの」に他ならぬという確信——ここに我々はヴァレリーの態度を定めることができよう。史実、逸話の類を先ず排し、すなわち“かくありし生”を「生きる」ということをやめて、むしろ“かくあり得た

生”を「組み立て」ようとするヴァレリーの身構えを支えるものが、かかる確信を措いては他に見あたらずからである。さればその態度はヴァレリーの工夫発明にどうかかわってゆくか……。

真理の探究に方法が必要であったように、態度を貫くにも工夫が要る。すなわち、事柄の「可能性」を考察の中心に据え、以て“かくありしもの”と決別して一路“かくあり得たもの”に向かうという身構えこそヴァレリーを著しく特徴づけるものなのであるが、そういった姿勢を考察という一連の運動を通じて貫くという考案こそが当の工夫発明であった。従ってそれはヴァレリーをして“かくありしもの”から“かくあり得たもの”に向かわしめ、「生きる」ことから「組み立てる」ことへとヴァレリーを駆りたてつづけることになる。そして、かかる工夫を伸だちとして、全てをみずからの初めから考え始めるという個人的な行為が、事柄の「可能性としてあるもの」を問うという普遍的な営為に変換していったのである。

ヴァレリーの手になる工夫発明を遠く眺むれば以上の如し。そしてかく遠望したうえは、もう一気に近づいて見るに如くはあるまい。

「最もその人そのものなるもの」を「その人の可能性としてあるもの」に求めるというヴァレリーの態度は、時に、たとえば次のようなことばを誘い出す。

「ラシーヌの生涯から集められる限りの生活断片を集めてみたまえ。そこからはついにラシーヌの作詩術は出てこないだろう。」³⁶⁾

そしてヴァレリーの考察とは、まさにかかる状態から一步を進めるためのものに他ならなかった。

「かくして、愛人のことでもなく、債権者のことでもなく、逸話でもなく、人生の波瀾でもなく、我々は最も正鵠を射た方策へとゆきつく。すなわち、全てこういった外的な詳細を除外し、以て理論により律せられたひとつの存在を仮定すること。」³⁷⁾

これがヴァレリーの工夫である。「全て外的な詳細を除外し、以て理論により律せられたひとつの存在を仮定すること」——それはまた、事柄のいかにももっともらしい、とりすました面持ちの下に、激しく活動してやまぬひとつの「機械」を想定することでもある。⁵⁾次に引くヴァレリーのことばが、その消息を明らかにするであろう。すでにそれは専ら人間についての弁ではあるが、そのいいあてているところはひとり人間の領域にとどまらず、広く事物事柄の一般に通用するはずである。

「人間はその表面においてしか人間ではない。皮を

剥げ。解剖せよ。そこに機械が始まる。そしてあなたは、その説明つかぬ、知っていることのどれからも隔った、しかしそれにもかかわらず本質的な実体の中で、混乱をきたす。」³⁸⁾

「混乱をきたす」のも道理。というのも「機械」すなわち「理論により律せられたひとつの存在」の仕組みを解明するにあたっては、まず対象についての「外的な詳細」が役に立たぬからである。そこには、およそ知識というものだけでは片づかぬ部分がある。素手で立ち向かわざるを得ぬということが人を当惑させるのである。しかもその「理論により律せられたひとつの存在」はあくまで想定されたものであり、或るかたちをとって既に在るものではない。せいぜい画定された空虚といったところ。かくして習い覚えた手立もどれがどこまで役に立つやら、一向に判然としない、ということにもなる。混乱当惑もけだし当然であろう。

ここに人は、どうしてもみずからの初めから始めねばならぬ仕儀へと追いこまれることになる。されば、あえてあらためて、そしてみずからの初めから考察を始めるというヴァレリーのすがすがしい姿勢も、その半ばは事の必然と定まっていたということか。しかし、ヴァレリーは、通常人ならば追い込まれて往生するであろうこの場所を、それと知りつつあえて択んだ風情。さればそこには何らかの積極的な意味がなければならぬ。

ヴァレリーは事柄の「可能性としてあるもの」に着目する。そしてそれを「機械」にみたてる。しかしながら、その「機械」の前に人は当惑せざるを得ない。当の「機械」が画定された空虚にすぎぬからである。しかし、ヴァレリーにとっては、あらゆる外的な詳細を除外していった果てのその空虚こそが、かけがえのないものであったに相違ない。というのも、かかる空虚が、既に消費され尽した空白としての空虚ではなく、未だ実現せぬひとつの可能性としての空虚であるからだ。可能性は未だ実現されぬことによって、すなわち空虚であることによって、また完璧であり得る。事柄の最も真実なるものをその可能性としてあるものに観たヴァレリーであってみれば、この完璧な空虚こそが唯一切に希われたものであったであろうことは、決して想像に難くはない。

そしてこの完璧な空虚を、すなわち事柄の可能性としてあるものを、ひとまず「機械」というかたちで想定したということ、ここにヴァレリーの手になる工夫の要訣があった。「機械」なればこそ人はそれを再び組みおこすことができる。「理論により律せられ」て

いるからこそ、理論をたどりつつ、人はその空虚の中へ思考の歩みを延ばしてゆくことができる。つまり「可能性としてあるもの」という画定された空虚も、これを「機械」とみたとすればこそ、当面の混乱当惑を乗り越え、そこから少なくとも努力の線だけは引き出すことができる——ヴァレリーの工夫考案その期待は、まさにこの点にこそかかっていた。

混乱当惑のさなかにおいてなお思考の歩みを延長してゆくこのヴァレリーの工夫は、どこかデカルトの「方法」を思わせる。すなわち、デカルトの「方法」もまた、混沌たる状況のさなかにおいて、あやまたず精神を導くためのものであった。しかしこの二つは、その根本において全く別物である。ここでその違いをはっきりさせておくことは、両者いずれの理解にとっても有益であろう。

「方法」の要諦は、それが外在化された操作の一体系であるということにある。すなわち、ヴァレリーもいいあてたように「方法は学説とは違う。方法とは、精神の仕事をそれに素手で向かう精神よりもうまくやりとげる、操作の一体系である。」³⁹⁾ 従って、それは専ら精神の作業にかかわる格率であり、さればこそ精神指導の規則ともなり得たのである。

しかるに、ヴァレリーの工夫は最も純粹にものを考えはじめための考案であり、思考を導くための格率ではなかった。^{★6} 思案の糸を紡ぎ出すため、その思考の出発点に仕掛けられた紡ぎ車がヴァレリーの工夫である。従ってそれは、精神指導の規則に非ず、むしろ常に精神発動の契機であった。そして、工夫のかかる機能が、個人的行為を普通的営為に変換する。

ヴァレリーは、事柄の真実をその可能性としてあるものに観た。これはもはやヴァレリーにあって動かぬ確信であり、さればそのあたまは終始一貫、事柄のかくありしところを超え、かくあり得たところに向かって運動しようとする。すなわちヴァレリーは、いわば事柄の未来に考察の的を定めていたのであり、あたまは最初から普遍に向いていた。

しかるに、未来は過去によって必ずしも十全に解き明かされはしない。ありようはむしろ逆であり、事柄の過去に属する伝聞、逸話、文学づらの意味といったものが、かえって未来に投げかけられた事柄の像をそこなうことすらある。ここにヴァレリーは事柄の「外的な詳細」を除外し、人物「生きる」ことを捨て、「可能性としてあるもの」を「組み立てる」べく、あえてあらためて、みずからの初めから考察を始めようとする。事柄の可能性を問うという普遍的営為を取行

するために、ヴァレリーはあえて、いわばみずからの現在に身をおいたのである。

そして、こういうヴァレリーの現在にかの工夫がある。あらゆる題目について、あえてあらためて、みずからの初めから考察を始めるというきわめて個人的な行為は、その最初から、事柄そのものではなくその可能性を問うという普遍的営為をめざしていたが、ついにその間には何の連絡もなかった。ここに人は当惑し、為す術をもたぬまま、過去に逃れるのでなければ、現在に立ちつくさねばならぬ仕儀となる。しかしヴァレリーは事柄の「可能性としてあるもの」を「機械」にみたてる。そうすることによってそこから努力の線を引き出し、最も純粋なところから始めた思考の歩みを、その純粋さのままに延ばそうとする。すなわち、最も単純にものを考えるための考案がヴァレリーの工夫であり、絶えずその歩みを更新してゆくのもまたこの工夫であった。そして、この工夫により、ヴァレリーの現在はまさに永遠の現在と定まったのである。

このあとは、思索の糸を紡ぐその努力あるのみ。とはいふものの、その先において果して「機械」は組みあがるのかどうか——しかしそれは余計な心配というもの。もとよりヴァレリーの思考には永遠の現在しかなかった。そこにはもっともらしい目的は何もない。その努力の果てに或る成果を予定しておくということもない。そもそも、小賢しく先をみこしてものを考えるという仕種にヴァレリーはついで関わったことがない。ヴァレリーの思考においては、考えることそのことが目的であり、努力そのものが成果であった。されば考えることによる何らかの発明発見があるとすれば、それは全ての永遠の現在において継続される精神活動の裡にこそある約束であった。そしてヴァレリーは、まさにそこにおいてこそ生きていることを感じていたけしき。すなわち次のことばがある。

「人間の中には、創造しながらでなければ生きていと感じない部分がある。私は発明する、故に我在り。」⁴⁰⁾

そしてヴァレリーにおける創造は、専らことばによってなされた。すなわち、ここにヴァレリーの文学がある。

III

「ヴァレリー難解」とは、夙に聞こえた大方の評判である。確かにヴァレリーを語ることは難しい。こと

ばの達人によることばの至芸を、へぼの間のびしたことばが語ろうとしても、それはしよせんかなわぬ道理だからである。しかし、先に見た通り、そのあたまのはたらきにおいて、首尾一贯、絶えず或るひとつの方向を指して決して的をはずさなかった、稀有なる人物がヴァレリーであってみれば、その手になる作物を「難解」の一語もて断じ去るのはいささか早計、というよりもここははっきり頭脳の怠慢というべきであろう。人はむしろ、ヴァレリーの文学を構成する各々の作品の、そのすみずみにまでゆきわたった意識、徹頭徹尾貫かれた意図の持続に眼を見開き、以てこれを「わかりやすい」といわねばならない。顰めっ面で彩ったサボタージュよりも、この空元気のほうが幾分ましであろう。

すなわち、ヴァレリーの「難しさ」とはこれを語る難しさであって、これはつまるところことばをあやつる側の力量不足に由来する。しかし、ヴァレリーの文学は、そこに貫徹された意図の明確さとあたまがはたらく方向の一貫ゆえに「わかりやすい」ものでもあって、その「わかりやすさ」は、むしろヴァレリーその人の大力量によっているのである。

ただ、そういう「わかりやすさ」のみならず、いまひとつ別の意味においても、ヴァレリーの文学は「わかりやすい」。そしてこの「わかりやすさ」は、もはやヴァレリーのあたまのはたらきに非ず、むしろそこで用いられていることばの種類にかかわってくる。ここでは、先ずそのことをみよう。ただしそれは、ヴァレリーの文学をそのことばの運動において解き明かし、やがては広く文学的な言語使用の問題へと至るであろう考察の、ひとつの入り口ではある。

ヴァレリーの文学の外側は、きわめて明朗な光を浴びている。そこからは曖昧の陰が一掃されているのである。すなわち、ヴァレリーはおよそことばを用いるに際し、如何なる専門的な予備知識をも要求しないし、また如何なる高度な知的能力をも求めない。ありようは、むしろ努めて人々と同じ地平に立ち、同じものを眺め、互いにとって等しく自明な事柄を、衆人の目前、いささかのごまかしもなく操作することによって、白日の下、非凡にして、しかし誰の目にも明らかな知をうちたてんとするけしき。ここに蔚然たる学林の中で光を放つようなことばとはきれいさっぱり袂を分かち、従ってよしんばいささかの詭弁諧謔を弄ぶくらのことはあっても、断じて人の目をくらませるべく大仰な用語をちらつかせることはなかった。むしろそういった学林のことばを退け、かえって広く世間に

問いかけるかたち、専ら万人が等しく用いる自然なことばを以て語り、かつ書く……。

これはヴァレリーの文学の、いわば非常にはっきりした外観であるから、それを眺望する者は誰も、その位置の遠近高低にかかわらず等しく認めるところであろう。そして、そのきわめてはっきりした外観の下には、ことばを用いるに際してのヴァレリーの志が、もう透けている。

或る講演のはじめにあたり、ヴァレリーは次のように宣言したことがある。

「私は純粋な確認に非ざるもの、全ての人がみずからの裡に、あるいはみずからによって、観察し得ぬようなもの、もしくは少なくとも容易な推論によって見出し得ないようなもの、こういったものにつきましては何ひとつとしてこれを語るまい、という堅い志のもと、これから皆さんに（中略）お話しすることにいたします。」⁴¹⁾

ヴァレリーの文学、その明快な外面の直下には、常にこのようなことばづかいに関する配慮がゆきとどいていたと見受けられるが、こういうことばづかいの典型を、ヴァレリーはデカルトにみているようだ。すなわち次に引くヴァレリーの指摘は、デカルトの事情をいいあてると同時に、ほとんどそのままヴァレリー自身の消息に重なり合ってくる。

「デカルトのもくろみは、我々に彼自身の声をきかせること、すなわち、彼の内的必然から出た独語を我々に感得させ、彼自身の誓いを我々にも誓わせようとするのであった。」⁴²⁾

「彼のめざしたところは、彼がその裡に見出したものを、我々にもみずからの裡に見出させることであった。

これは独創的な企てである。精神の世界におけるあらゆる創始者は、皆人の心をとらえて離さぬことをこころがけざるを得ない。或る者は魅力を以て我々をつつむ。また或る者は厳格を以て否応なく我々を服従させる。しかるにデカルトは、彼の生を我々に伝える。」⁴³⁾

「『方法序説』の文章には、難解な句やスコラのないいまわしが少しもない。最も素朴かつ人間的な、内心のことばの調子をはずれたものは何もない。強いていえば、自然なことばよりやや正確だといえるだけである。」⁴⁴⁾

「銜いや技巧を全くもたぬ内心のことばは、我々に最も近くまた最も確かな所有であって、きわめて密接に我々個人に属すものであるにもかかわらず、また万

人に通ずる普遍的なことばたらざるを得ないようなものである。」⁴⁵⁾

デカルトのもくろみを、ヴァレリーは要するに人を見ずからの思考へと案内するということに見、またその下に「自然なことばよりやや正確」に用いられた「きわめて密接に我々個人に属するにもかかわらず、また万人に通ずる普遍的なことば」の存在を見とどけているが、その外観にも透けていたように、ヴァレリーの文学をつくりあげていることばもまた「やや正確」に用いられた「普遍的なことば」に他ならず、それがまたヴァレリーの文学の「わかりやすさ」にもつながってくる道理であった。

されば、かかることばの特質はことばの如何なる運動の反影であるのか、ヴァレリーの文学を活然たらしめ、また明朗たらしめているものは何か。ここに或ることばの状態がみえてくる。

ヴァレリーの裡においては、ことばは先ずもっていわば中立の状態におかれている——これが、ヴァレリーの文学の明朗堅固な外観に透け出たことばの筋からその相をよまんとする我々のよみである。すなわち、そこにおいて、ことばは先ずもってあらかじめ定められた意味と用法によって縛られているということがない。知識の電荷とでもいうべきものを全く帯びていない。ヴァレリーならばこれを「発生状態のことば」⁴⁶⁾というかもしれないし、また「言語状態の清潔法」⁴⁷⁾を施されたことばと呼ぶかもしれないが、要は、ことばが決してあらかじめ定められた意味用法に縛られず、むしろ統辞、すなわちその用法如何によっては次々とその面目を刷新し得るような状態を、ヴァレリーの裡にひとまず假定しておきたいのである。

いうまでもない、かかる状態は実際には到底あり得ぬことである。それにもかかわらず、あえてこの理想状態を想定するのは、ヴァレリー文学の外観、その直下に考察のメスをしるびこませ、そこに行われることばの運動を解剖し、以て内側から外観に向かって光をあてることにより、いまいちどヴァレリーの文学を捉え直してみようという思考実験の、これが前提だからである。

中立の状態にあることばは、本質的に我々のことばである。それは如何なる専門的な知識の電荷をも帯びておらず、従って少し気をつけて耳を傾ければ、誰もがその動線を、容易に、またみずからの裡に、しかもありありと描いてみるができる。というのも、このようにして中立の状態におかれたことばは、人間の

積みあげた夥しい知識の堆積の上ではなく、むしろ人間の最も基本的な能力に根ざしているからである。それは最も根本的な判断の能力であり、推理の能力であり、また帰結を理解する能力であり……つまりところデカルトが「良識」という名を以てあらわそうとしたことに重なる。^{★7}そしてデカルトは、この「良識」が「この世で最も公平に分配されているもの」⁴⁸⁾であるともいった。そして、人はここに中立の状態におかれたことばが、「きわめて密接に個人に属し」つつもなお「万人に通ずる普遍的なことば」たり得る理由を見出すことができよう。すなわち、中立の状態にあることばは、人間の最も基本的な能力にのみその運動の基をおいているということによって、本質的に“我々のことば”たり得るのである。学林のことばを排し、むしろ万人の用いる自然なことばと明快な論理とによって組みあげられたヴァレリーの文学の外観は、この内なる事実からこそ、今一度考察の光によって照射されるべきであろう。

中立の状態におかれたことばを特徴づけるいまひとつのものとして、その運動をあげることができる。さしあたって二つの特性が考えられよう。ひとつは、事柄の記述説明を離れむしろその画定へ向かうという性質。そしていまひとつは、未知なるもの、未だ語られざるものに向かうという性向。しかしこれらは、別物ではあり得ず、結局ひとつの運動の、異なった次元への写影ではある。

中立の状態におかれたことばは、厳密な意味において、事柄の分析には向かない。というのも、それは術語や専門用語のようにあらかじめはっきりと定められた意味内容を以て拘束されておらず、従ってまた知識の電荷をも帯びていないので、たとえば或種の学術用語が行なうようには事柄を解体できないのである。そこで、勢い中立の状態にあることばは、事柄を解体分析する方向にではなく、むしろ事柄の輪郭を画定する向きへと運動を始める。事柄を記述説明するよりも、事柄のありかを明確に画定し、明示する。そしてこの運動の地盤が、かの万人に等しく備わった「良識」にあることはいうまでもない。ここに至り、いささか意外なことに、かかることばの運動は、遠きギリシアの広場に催された対話におけることばの運動と通い合うことにある。

対話をするということは、互いの関心の領域を互いにとって等しく明らかなることばを以て画定することである。ともかくひとまわりすること。そして、その気があるならば、更にもうひとまわりすべく再び出

発すること。遠きギリシアにおいて、すでに「正義」（『国家論』冒頭）、「知識」（『テアイテトス』）、「美」（『パイドロス』）、「弁論術」（『ゴルギアス』）、「愛」や「倫理」（『饗宴』）といった問題が、このようにして考察された。その時、後にたどった道すじははじめに踏破したそれとは当然異なる。しかし、そういうことを繰り返すうちに、事柄がだんだんはっきりしてくる。それが対話というものであった。従って対話は、決して事そのことを語らない。対話は定義しない。「あれか、これか」は、ソクラテスにとってついで無縁の境地であった。かえって、「あれ」の含む虚位をあげ、また「これ」の持ついつわりを明らかにする、いわば「ああでもなければ、こうでもない」という境地こそソクラテスの領分。けだし「知の産婆術」（マイエウティケ）といわれる所以である。対話は事そのことを決めつけない。そうではなくて、対話は事柄の輪郭を明瞭にする。事の核心を空虚として囲いこみ、ただそのありかだけを、互いにとり明白なことばによって、はっきりと指し示す。かくして対話とは、その本質において、万人のことばによる画定の作業に他ならなかった。

そしてその作業において、語り手はことばをまず白日の下にさらけ出さねばならず、従ってみずからことばとの馴れ合いを断ち切ることから始めねばならない。我が身の心情、みずからの思感といったものからことばを切り離し、以て衆人に明らかなることばで語ること——これが対話の作法であった。そしてこの作法は、また演説においても通用する。対話にせよ、また演説にせよ、そこでのことばは先ずもって他をめがけて語りかけられたものであり、その語り手との馴れ合いを断ち切っているということにおいて、すなわち万人の「良識」を土台としてことばが自律的に運動しているということにおいて、ことばとしての力強さがそこにはあったのである。^{★8}

ヴァレリーの文学の外観を特徴づける「わかりやすさ」、そして明朗堅固は、けだしその下に歴然と宿ったこのギリシアの作法に由来する。人は我がものとするために書くこともできるし、よく語らんがためにあらかじめ書いてみることもできる。しかしヴァレリーは書くために書いたものであり、書くことによって直接語った。そして、もとよりそこには、語り手と馴れ合いや取り引きから遠く離れ、ひとり事柄の画定へと向かう、ことばの運動があったのである。

ところで、事柄の画定に向かう運動と共に、中立のことばを特徴づけるいまひとつの特性は、未知なる想

念へと向かい得るその可能性である。およそ中立の状態にあることばは、あらかじめ或る特定の意味と用法に拘束されることがないことを以て、その最大の特徴とする。従ってかかることばの意味は、統辞、すなわちその用法によってその都度新たにつくられ得る。すなわち、ことばは中立の状態におかれている限りにおいて、常にその面目を刷新され得る。そして、ここにことばは、未だ知られざるもの、つまり未だ語らざる想念に向かって運動を始める……。

かくして、かかることばの運動が、事柄のかくあり得たところ、すなわち「その可能性としてあるもの」を問うというヴァレリーの精神活動によく合致する。あらかじめ定まった既成の表現を全て並べたところで、事柄の未来に属することを語り尽くせるとは限らない。事情はむしろ逆——という消息を、たとえばヴァレリーの次のようなことばが伝える。

『古典主義』、『浪漫主義』、『人文主義』、『写実主義』……こういったことばを用いて——本気で——考えることは不可能である。

瓶のレットルで、酔ったり渴きをいやしたりするわけにはゆくまい。』⁴⁹⁾

術語や専門用語に限らずとも、およそその意味と用法が固定化したことばを以て、思考の新たな地平を切り拓いてゆくことはできない。確かに、知識の電荷を帯びることによって、ことばは事柄の分析解体に絶大な威力を発揮する。その意味において術語の類は価値千金というべきである。ヴァレリーが狩猟のことばや航海の用語に感心したのも⁵⁰⁾、まさにその具体性、その的確さの故であった。しかし、こういった知識の電荷を帯びたことばの威力は、つまるところ、約束ごとによってその適用範囲を極度にせばめた結果生じるものであって、その意味で、それはまた隠語の便利に似る。結局それは解体のことばであり、整理のことばであり、伝達のことばであり、また記述説明のことばではあっても、その本質において思考のことばではない。未知なるものと向き合うには、あまりにかたくななのである。さればこそ、ヴァレリーはみずからの精神活動を十全たらしむるためにも、たえずことばを中立の状態に保っておく必要があった。

しかるに、ことばがひとたび中立の状態から発し、未だことばの至り得ぬ境地へと向かう時、それはおのずと画定の運動をおこす。というのも、そこでことばが向き合っているものは、手持ちのことばを以てしてはどうにも解体できぬ現況に他ならないからである。先に、中立の状態にあることばがおこす二つの運動、

すなわち画定への運動と未知なるものへのそれとが別物ではあり得ぬといったのは、こういう事情によるものであった。⁵¹⁾

ヴァレリーの文学は、その内に生起する、これまでみてきたようなことばの運動において、他の諸文学とははっきり区別される。すなわち、そこにおいて、ことばは先ず中立の状態におかれている。いいかえれば“われわれのことば”，“デモクラティック民主的なことば”が用いられている。そして、万人に等しく備わった「良識」を基にしておこなわれることばづかいが、我々を直接ヴァレリーの思考へと導くことにもなる。また、そこでのことばは、その運動の方向においてヴァレリーのあたまのはたらきとよく合致し、ひたすら未だ語られざるものへと向かう。そして、その際、ことばはもはや事柄を記述説明しようとはせず、むしろその輪郭を画定すべく運動し、その時、同時にことばは語り手から切り離されて、既に他に対して語りかけるものとなっている……。要するにヴァレリーは、万人のことばを、その先端において用いようとした。そして、文学活動の場はそのことばの先端にこそある。

IV

ヴァレリーの文学は、今となってはもはや完結して、そこに新たな一篇を加えることは何人たりともできぬ相談である。しかしヴァレリーの文学観は、当初から無限の広さを持っていたし、今日に至るまでその視界をせばめる要因は何ひとつとして出現していない。ここに人は、かえってそこから逃れることができぬ約束である。というもの、およそことばによってつくられたものの全てを、ヴァレリーはひとまずその視野におさめたからであって、すなわちヴァレリーにあっては、およそことばによって成ったもののごとくが、先ず文学作品として考察するに足るのであった。「文学とは『ことば』の持つ或るいくつかの特性の拡張応用であって、それ以外ではない」⁵¹⁾というヴァレリーのことばが、その事情を語るだろう。⁵²⁾すなわち、ここに文学は、もはや広大無辺なことばの織り物を、たとえば歴史、地理、音楽、美術、哲学、教育、宗教、自然科学、法律、政治、思想、経済、社会、そして文学といった具合に、その内容の図柄によって載った切れ端のひとひらではあり得ず、むしろヴァレリーは、およそそういったことばによる作物を、先ずは一視同仁、全てひとしなみに観察したうえで、次にそこで用いられたことばのその用い

られ方、言語使用の在る特定の傾向に注目することにより、示された内容からではなく、内容を示そうとすることばの、その運動が示す方向と傾向から文学を定義せんとするけしき。されば文学は、その内容において共通する作品群に付せられた名称ではなく、かえってここに言語使用の一形態として定まったことになる。そして、その消息をよく明らかにするのが、ヴァレリーの提唱した《詩学》である。

《詩学》とは単に詩に関する審美的な法則、あるいは訓戒の類ではない、とヴァレリーはいう⁵²⁾。

「もはやそうした意味で用いられるこの用語は、内容ともども古びてしまって、今度これに新しい用途を与えることなどかなわぬ相談である」⁵³⁾とも言い切っている。では、ヴァレリーの提唱する《詩学》とは一体何ものであるのか——今ただちにこれを言い尽くすことはできない。ただ、あえて一言すれば、それはひとつの『文学理論』構築の全てであった。

《詩学》という名称は「言語がその本体であると同時にその手段である作品の創造、あるいは制作にかかわる全てに対して附せられ」⁵⁴⁾る。けだしこれは、先にみたヴァレリーの文学観、その反影であろう。かくしてヴァレリーは、ひとり詩作上の方法定石その詮索にとどまることなく、かえって広くことばによる表現全体を、そこにあらわれたことばの運動から考究しようとする。ここに《詩学》はまさにヴァレリー一流の『『文学』理論の企て』⁵⁵⁾であった。

もとより、こういった意味での『文学』的なことばの運動を或る道すじとして跡づけることは難しい。とりあえずヴァレリーが与えた示唆は、次のようなものである。

「文学は、たとえば普通の談話が無視する音声の諸特性、会話の韻律上の諸可能性を、みずからの目的のために役立つ。文学は進んでそれらを分類し、組織し、時には厳密に規定された体系に従って使用する。文学はまた、ことばの対比から生ずる効果を発展させたり、省略を行ったり、ふつうのことばを理解するには十分である表象よりも一層生き生きとした表象を生むような置き換えをしたりする。」⁵⁶⁾

こういったことを、ヴァレリーは「古代の《修辞学》が意を用いた《文飾》の領域」と割りつけた。そしてそういったことばの運動場に足を踏み入れ、「ことば本来の文学的効果の探究、ことばの勢い及び浸透力を増大させるためになされた表現暗示に関する工夫の吟味、創作のことばと日常のことばとを区別するため人がことばに課した規則の洗い直し、といった全て

を明確に発展させようとする研究」⁵⁷⁾に対して、特に《詩学》という名称を与えた。言語使用の一形態として文学を捉えたヴァレリーは、そこにおけることばの運動、その特性を解明する学として《詩学》を提唱したのである。

厳密な学としての《詩学》は未だ実現していない。ヴァレリーの提唱は、あくまで提唱の段階にとどまった。しかし、およそ精神の作物の価値はそれが実現したか否かというような小人の算用では量り得ない。すなわち、ヴァレリーがことばの地理に対して与えた展望、これが随分深刻なものなのである。

《詩学》の観点はことばを或る一定の方向に向けて整序する。すなわちその裾野には散文の広大な平野が広がり、遂にその至高の高みには詩のための王座が据えられるというけしき。では、その際、如何なる必然が散文を詩に向かわせるのか。如何なる原理がこのような運動をことばに強いるのか。つまるところ《詩学》の要諦は何か——ここに「つくる」という原理が浮かび上がってくる。

ポイエイン (poiein < ποιεῖν) とはすなわち「つくること、生み出すこと、創造すること」であった。「言語状態の清潔法」⁵⁸⁾を以て、先ずことばを清めることから全てを始めるヴァレリーは、《詩学》(poétique) ということばを今日に復活させるに際しても、その語源であるこのギリシア語までさかのぼらずにはおれなかったようだ。ヴァレリーの心意気は以下の如くである。

「私はこの用語を、今一度その語源的な意味において復活させることができると思った。とはいえ、私としても、この用語を生理学でエマトポイエティック (hématopoïétiques: 造血作用) やガラクトポイエティック (galactopoïétiques: 乳腺における造乳作用) などの機能を指し示す場合のように、わざわざポイエティック (poiétique) とまで発音しようと考えているわけではない。要するに私の言いたいのは『つくる』という単純な観念だった。そしてこれから考えてみようと思うこのつくるということ、ポイエインということは、つまるところ何らかの作品となって完了するような行為の謂である。」⁵⁹⁾

作品というものを、興に即しておのずと成ったものとしてではなく、或る意図の持続、あるいは明確に意識されたひとつの行為の結果、すなわち偶然性を含みぬひとつの制作物、つまり「つくられたもの」としてみる——これが「つくる」という原理に立った《詩学》の立場である。「つくる」ということは、まさ

に「何らかの作品となって完了するような行為」に他ならないが、それはまた創造の過程から偶然性を排除してゆくことでもある。

「言語や、ことばや、隠喩や、観念の転調の何たるかを知らずして、また、作品の継続に関する構成も、その終了の条件も解さず、何故書くかはほとんど、如何に書くかは全く知らずに、ものを書くとは、何という恥辱であろう。巫女であることに赤面すること……。」⁶⁰⁾

ヴァレリーは、文学的恥辱をこのように語ったが、ここに求められている意識的な姿勢は、ひとりことばの芸術たる文学に限らず、従ってまた《詩学》に個有の身がまえではなく、広く創造活動一般に対しヴァレリーが求めたものであって、いわばヴァレリーの芸術観における要諦でもあった。

およそ芸術を語るに際し、ヴァレリーは徹底して、そこにあらわれる技と芸に注目する。偶然に成ったもの、興に即しておのずと出来上がったものは、いかにその出来が上等であろうとも、芸術作品と呼ぶに値しない——というのが、ヴァレリーの芸術観の、決して揺るがぬ台座であった。^{★11}

「芸術家は、その作品において、彼のスタイルによってしか彼自身をあらわしていないというところまで、つまり作品から努力の跡が全く消えるまで、努力を続けるべきなのである。」⁶¹⁾

「ひとつの作品を完成するということは、そこから全て制作の跡を消し去ることだ。」⁶²⁾

「《完璧》——それは刻苦である。」⁶³⁾

かくしてドガが芸術家であり、マラルメもまたそうであった。そして人間の技が汚れなきめあてに向かつて、すなわち技そのものを目的として運動する時、そこに芸術作品が生まれ、「つくる」という行為は完了する。ドガの手になるデッサンが、マラルメの詩が、ギリシアの建築が、またひとつの舞踊が、こうして生まれた。そしてヴァレリーは「最低の様式とは我々に最小の努力を要求する様式である」⁶⁴⁾といい、逆に「制作するにあたりひとりの人間の全能力が用いられることを必要とし、またその結果である作品を鑑賞するのに別の人間の全能力が刺戟され、かつ作品の理解のために努力することを求められるような芸術」⁶⁵⁾を「大芸術」と呼んだ。こうみえてくると、ヴァレリーにとっての「芸術」(l'art)は、秀れてその語源的な意味を保っていたということに気づく。すなわち、それは“個性”であり“情熱”である以上に、技でありまた芸なのであって、そこには始終「つくる」(ποι

εῖν) という原理が貫かれていたのである。

そして文学の広場においては、この「つくる」という原理がことばを散文から詩へと向かわせる。

ここに散文とは「理解を以て唯一の目的とする言辞」⁶⁶⁾の謂。従って、それは発せられるや否やただその内容のみを残して速やかに消え去らねばならない。そこに「形式は保存されず、理解の後には残存しない。」⁶⁷⁾すなわち「形式は明晰さの中に溶解する。」⁶⁸⁾そして、まさにこの「言辞をなしていることばが容易に全く別なものに変形する(中略)その容易さの裡」⁶⁹⁾にこそ、散文における完璧というものがあるということにもなる。

しかるに、詩とはひとつの形式である。

「唯一の内容が散文から要求されるべきであるのに対し、詩においては唯一の形式が支配し、生き残る。」⁷⁰⁾

従って、詩句は、ただ内容のみを残して直ちに跡かたもなく消え去る、といった体のものでなく、むしろ繰り返される。繰り返されることによって、詩は「みずからの形式の裡に己れをあらわそう」⁷¹⁾とする。

次に引くヴァレリーのたとえ話は、散文と詩との間のこういった消息をずばりと言いあてている。

「詩はことばの芸術である。しかしながら、ことばは実用の具である。人間の間に行われる伝達の確実性が、実用の裡にしか、あるいは実用面での検証にしかないということ、これに先ず留意しよう。私が火を貸して下さいというと、あなたは私に火をくれる。すなわち、あなたは私を理解した。

しかし、あなたが私に火を貸せという場合、その何でもない敬語を或る口調で、また或る声色で——私の気づき得た或る抑揚と或る緩急をもって、あなたは発したかもしれない。そういうことを考えずに、あなたの求めるもの、すなわちわずかな火を差し出したとあれば、私はあなたのことばを理解したのである。しかし、事はそこに終わらない。奇妙なことに、あなたの口にした短い文句の音と、いわば姿とが、私の心中に戻ってきて、再び繰り返される。あたかもその文句が、私の心中にあることを喜ぶかのようであり、また私も、そのほとんど意味を失い用立つことをやめたことば、しかしなお、全く別の生ではあるにせよ、更にいまひとつの生を生きようとするその短い文句を、みずから繰り返し、口にし、また耳にすることを好む。ここにこの文句はひとつの価値を帯びた。その有限な意義を犠牲にして、価値を帯びた。そして聞かれる要求をつくり出した……。この時、我々は詩の辺りにい

る。』⁷²⁾★¹²⁾

そしてヴァレリーは、散文を歩行に、詩を舞踊に喩えた。

「歩行は散文と同じく明確な一対象をめざす。それは或るものに向かって進められる一行為であり、目的はそこにたどりつくことにある。』⁷³⁾

しかるに舞踊はそれとは全く異なる。

「舞踊とはといえば全く別物である。それはいかにもひとつの行為体系には違いないが、行為自体の裡に己れの究極を有する。舞踊はどこにも行きはしない。』⁷⁴⁾

ここに至って、ことばはみずからのために、或る閉じた図形を描きはじめるのである。

かくして、「つくる」という原理に導かれて、ことばは実用的散文から詩芸術へと至る。むろんヴァレリーもいう通り、「文学的表現のこの両極のあいだには無数の段階、無数の推移形式が存在する。』⁷⁵⁾ 従って、詩と散文との間に明確なる一線を画すことは不可能であるし、また全て散文とおぼしきものが非芸術であるということにもならない。掴むべきは《詩学》が捉えたことばの運動、特にその方向であり、またその原理であって、それを見透すためにあえて典型としてたてられた両極が、ここにいう散文であり、また詩なのであった。

「つくる」という原理によって、ことばは散文から詩へと運動する。ここにことばは、もはや実用的な伝達機能から解放され、予定された意味内容にも縛られることがなくなり、やがてみずからのために、みずからなる図形を描きはじめる。すなわちこのあたりから、ことばはようやくにして、未知なる想念、未だ語られざりしものと、たわむれはじめるのである。

V

ことばが、事柄の記述説明およびその伝達という実用の任務から解かれる時、書くことはもはや何らかの手段であることをやめる。人はその時書くこと自体を求め、求めること自体を求めはじめるのである。「書くとは予見すること」⁷⁶⁾ と、ヴァレリーは言った。すなわち、そこに在るものはひとつの予感だけである。

ヴァレリーはもはや、書くという行為において事柄を記述説明しようとはしない。何事かを伝達しようともしない。ありきたりのものの輪郭をことさらに擦るということも、もちろんない。むしろヴァレリーは、

未知なる領域に、ことばおのずからの律動に乗って新たな図形を描かんとするけしき。すなわち、ペンはほとんど自立し、ペンの先は人知の未来に向いていた。

そこにあるものはただひとつ。すなわち或る種の予感、人類の知の未だ至り得ぬ彼方からやってくる、明確にして強烈な、或る誘いである。なるほどそれは予感にすぎぬ。従って人間の現状においては、ただぼっかりと口をあけた空洞にしかそれはすぎない。しかし、それにもかかわらず、ではなく、それ故にこそ、人はその空虚に向かってことばを索めざるを得ない仕儀である。というのも、その空洞がある限り人間の現在に完結しないからだ。いつの現在にもその空虚は残るであろう。しかしそれを克服してゆく運動の中にか、「人間」の生命はあり得ぬだろう。かくして人はペンを握る。そしてことばをたぐり、新たな図形を描こうと試みる。それがかなうか否かということが問題なのではない。ただそうせぬことには一寸たりとも進みようがないという事情が、他ならぬ人間の側にあるだけだ。すでに予感空虚にすぎぬ。しかしそれは、人間にとってけだし唯一の未来への通り路であった。人間の現在はその空洞を埋める作業によってこそ現在たり得る。すなわち、そうすることによって、人はみずからの現在を生きることが出来る。かくして人はもはや動かしようのないその予感を前にして、あたかも鹿が溪水をしたい喘ぐがごとく、ことばを索めるのである★¹³⁾。

ところで、この種の予感は、ヴァレリーにあっては「ポエジー」(poésie) という用語の一面として捉えられている。

すなわち、ヴァレリーによれば、「ひとつの世界、関係の完全な体系を知覚しようとする傾向の裡に成立する」⁷⁷⁾ と思われる「詩的状态ないし感動」こそが、「ポエジー」という用語の持つ第一の意味であった。それは或る整合性の予感であり、直接それとはあらわれてこない合理を世界という事象の混沌とした総体の中に、ひとり静かに観想する状態である。そしてそれは、この世における様々な事象や状態を契機として、たとえばただひとつの風景によってさえも、ひきおこされ得る。人はここに、東雲の薄明の中で突如襲ってくる巨大な衝撃、海のくりかえし、大樹のざわめきに喚起される悠久の摂理、または人のちょっとした仕種やことばの端にあらわれる或る種の調和、あるいは思索の最中、まるで突然のようにおとずれる覚醒にも似たあの感動のことなどを思い起こすことができよう。そして、人にことばへの渴きを覚えさせ、すなわち人

を「詩作」へと駆りたてるのは、まさにかかる感動なのである。

しかるに「ポエジー」という用語が示すいまひとつの意味は、第一の意味が指し示す感動を「それを自発的に起こる自然的条件の外で、ことばの技巧を用いることにより」⁷⁸⁾ 再建することをめざす「ひとつの芸術、奇妙な一工夫」⁷⁹⁾ であった。すなわち、周到に組み立てられた詩作品。ここにはもはや偶然に属するものは在り得ない。あるのはほとんど明確な意図と等しいまでにはりつめた意識であり、その意識の持続の裡において、ただ努力そのことを目あてとして続けられた刻苦の結果である。実用を超えたことばによって明確な意図の下に「つくられた」作品……。すなわち、この第二の意味における「ポエジー」には、ただちに「ポイエイン」という原理がかかわってくる。

このように「ポエジー」ということばを洗い直すことにより、ヴァレリーは人を創作活動にかりたてる感動と、人を感動にかりたてる創作物とを峻別した。それは、換言すれば、人間のひとつの創造活動たる「書く」という行為を、あらゆる偶然、あらゆる曖昧、そしてあらゆる人間的「情熱」から引き離すことにより明確に（人間の技として）限定し、それを他ならぬ人間精神の能力の裡に定位したということである。すなわちヴァレリーは、ことばを授かる巫女であるよりは、ことばをあやつる芸術家たらんとした。「書く」という人間の行為を、あくまで人間の技の領域にとどめておいた。

かくしてここに、ひとつの詩句は、もはや興に即しては生まれ得ない。感興にかたちを与えるのはもはや“靈感”ではない。我が身の燃ゆるが如き思いも、ことばによる作品の制作には先ずもって無縁である。むしろ、詩的感興としてのポエジーをありありと予見し、そのことばへの変身を期待する努勢のうちに黙々と行なわれる刻苦、或る意図の持続によってこそ、詩は生まれる。

ヴァレリーの思い出によれば、ある日試みに十四行詩をつくってみようとしたドガが、マラルメにこう訴えたという。「一体何という商売だ。今とりかかっている詩のせいで一日を棒にふった。しかも全然はかどっちゃいない。……そして、いい思いつきがないわけじゃあないんだ。……むしろそれでいっぱいなんだ。……あり余っている……。するとマラルメは、穏やかにこう答える。「でも君、詩というものは思いつきでつくるものじゃあない。……ことばでつくるものだ。」⁸⁰⁾

「それが唯一の秘訣なのである」⁸¹⁾ とヴァレリーはいう。しかしそういつつも、そのことばをあやつる手にまで、ヴァレリーの眼光は透らざるを得なかった。人間の技が詩句をつくる——ヴァレリーは究極においてそう言い切るだろう。ただしこれはみずからの力量を過信する者の増長ではなかった。かえって、詩女神（ミューズ）と、ことばと、人間の技と、そしてみずからへの深い敬意を抱く者のみが発し得る、究極のことばなのである。ヴァレリーはもはや書くことを、また書かれたものをも、神格化しない。ここに「書く」とは、ヴァレリーにとって或る「純粹な訓練」⁸²⁾ の他ではなかった。

そして書くことがそれ自体を目的とするようになる時、すなわち人間がみずからの習慣によって考えることをやめ、ありきたりの形容を以て“感動”することをやめる時、つまりただひたすらにことばを求め、その律動に身をゆだねるべく意識を周到にはりめぐらせる時、人の感覚とそのあたまのはたらきは、かえって最も純粋なかたち、しっかりと握られたそのペンの切先において、統一される。この全きエネルギーの変換——およそ「書く」という行為に実用の域を超えた究極の意味があり得るとすれば、それはこのことを措いて他にはあり得ないだろう。すでにヴァレリーは、明らかにこのことに気づいていた。すなわちいう。

「私は試みるために、為さんがために、明確にするために、延長するために、書くのであって、在ったところを再びするために書くのではない。」

その努力訓練の結果が、その23歳の年から死に瀕するまでのほぼ毎日、暁時の薄明の中黙々と書きつがれたヴァレリーの練習帖、すなわち『手帖』(cahiers)である。そこでヴァレリーのペン先は想念への最短距離を走り、その核心へと到り、それを一太刀もってえぐり出すべく運動するけしき。すなわち『手帖』に残された夥しい「図形」は、これことごとくヴァレリーの手になるクロッキー、思考のひとつでがき、その軌跡であった。

ある時アングルは、ドガに、「線をひく勉強をなさい」と助言したという。⁸³⁾ そしてヴァレリーはドガを最もよく要約するものは「或る姿勢を決定する唯一の線への情熱」⁸⁴⁾ であるといった。

「すなわち、きわめて瞬間的なことをアトリエにおける際限のない労働と結合させることにより、印象を精確な計算の裡に、直覚をものを追及する意志の持続の裡に、封じこめるという冒険を、彼はあえて試みた

のだ。」⁸⁵⁾

そして、ヴァレリーとてもまた別ではない。想念の姿勢を決定する唯一の線（表現）への情熱が『手帖』の性格、広くはヴァレリーの文学の性格、いな、ヴァレリーその人を、要約する。すなわち『手帖』に描かれた思考の図形は、ことばによるヴァレリーのデッサンであり、その『手帖』とはかかる修辭的デッサンの練習帖であった。⁸⁴⁾ ヴァレリーは書くための手段として修辭を用いるのではなく、進んで、書くことそのものを修辭と化そうとしたのであり、みずからは何よりもそういう意味でのことばの匠たらしとする。すなわち、すでにヴァレリーはその『手帖』の中においてこう言っていた。

「私の文学的野心。無造作なことばを組織して誰の目にもかくれなきひとつの装置をつくりあげること。技師たること。あたかも幾何学者のような。」⁸⁶⁾

VI

ことばを実用の領域からひきあげるもの、実用的にして歩行的な散文を詩的舞踊へと変ずるもの、それが「ポイエイン」（つくる）というひとつの原理であった。ここにことばは、未知なる想念に向き合い、そこに新たな図形を描こうとする。すなわち、「ポイエイン」という原理が、ことばの全く新たな律動を導く。そして、ここに、人はことばをその最先端において用いる仕儀となる。その時の人は裸にして素手、すなわちその立つ場所は如何なる習慣のことばからも遠い。さればこそ、そこに人の頭と心とは、最も純粋なかたち、かたく握られたペンのその切先において、よく統一され得るのであった。つまり、ことばの最先端において、人は最も厳密な意味で「考え」は始める……。

すでに「考える」とは、湧き出ずる新たな想念にありきたりの表現をふりあててゆくことではなかった。かえって、かかる想念に対しそれにふさわしい新たな形式を与えること、未知なる領域にことばによる新たな図形を描くことこそ、「考える」と呼ぶに値する行為であり、およそ文学活動の要訣もまたそこにあった。すなわち、文学は、何よりもことばの地平を切り拓きことば全体を新たな領域に向かって牽引してゆく、その活動によって定義される。文学とは、いわばことばの成長点である。そして、かかる文学の場においてこそことばと想念との交代変換がおこり得るのであって、これはすなわち、真に「考える」ということが、およそ文学ということばの成長点におこなわれる

ことばそれ自体の増殖運動の裡を措いて他にはあり得ぬという約束に他ならない。

しかし、その際、何しろ人知の未来に事がかかわってくる以上、ことばはどうしても自律せずばかなうまい。すなわち、人はひとまずひっこまねばならぬ道理である。しかし、ひっこみっぱなしでも、今度は埒があかない。人はやはりことばを求めて不断に活動せねばならない。——文学の場は、かくもきわどい。

そして“詩人”とは、他ならぬこのきわどい場所において、ことばと想念との変換交代を司る者の謂。しかしそれは可能であるか。みずからを無と化し、ただひたすらことばを求めつつ、なお「考える」ことが可能であるか。答えることは難い。しかし、不可能とはいえぬ、ということだけははっきりいえる。他ならぬヴァレリーの文学がここにあるからである。すなわち「テスト氏」、「若きパルク」、「人と貝」、「海辺の墓地」……。

されば如何なる契機によって、ことばは自律へと向かうのか。——もとよりきっかけは様々あり得よう。ただ、ここでは、「観る」ということ、単に眺めるのではなく注視するという、を考えてみたい。ヴァレリーが、その資質において、典型的な「見者」(voyant)であるからだ。

「鉛筆を手にはせずして或るものを見ることと、それを描こうとして同じものを見ることとの間には、非常な違いがある。」⁸⁷⁾

見ることと描くこととの間に存する落差を、ヴァレリーはこう言いとめた。確かに、それが如何に見馴れたものであっても、いざそれを描こうという段になると、今さらのように、自分がかつて一度としてそれを本当に見たことがなかったのだということに気づかされる、とは我々にとって親しい体験である。されば、「見ること」と「描くこと」との間に存する落差とは、「眺める」と「注視する」と、すなわち「見ること」と「観る」とこととの間のそれに他ならなかった。つまり、ヴァレリーはここで、ふたつの視線について語っていたのである。

「注視する」とことと、ただ「眺める」とこととは、決定的に違う。

「眺める」とは、視覚から生ずる結果や効果、あるいは反響といったものを漠然と感じている状態である。もはや視線は対象とはなれ、対象によってひきおこされた或る種の夢のなごりにまどろんでいる。視線が射とめた対象は、もうそこにはない。眼がものを見て「楽しむ」ということ自体、すでに視線の否定なの

である。

「注視する」ことはといえば、全く別物である。「注視する」という姿勢の中には、もはや対象から受ける“感動”の入りこむ隙はない。それは、感情、情熱、歓喜、苦悩、激情、狂気、感性、感覚、といった全てをそぎ落としていった果ての行為に他ならず、その意味において、自律の契起を含む。視線はもはや夢の中に溶解しはしない。物は視線に射とめられ、視線ははっきり目醒めている。対象とのあいだに、或る距離が周到に保たれているのである。^{★¹⁵}

そして、この注意深い、意識的な視線は、対象を模倣しようとする際に生ずる。

「或るものを描こうとすることが、眼を意志で支え、一種の指導する力を眼に与える。」⁸⁸⁾

そして模倣するということ——それは先ずそのものを離れること、そして再びつくりあげようと試みる。すなわちそこには、およそ「なま」なもの、あるがままの状態におかれたもの、に対する激しい拒否の姿勢が貫かれている。対象との間に、或る距離を周到に保ち続けること、もののたたずまいを身勝手な視線が乱してしまわぬよう、常に意識を眼に集中させること……。ここに人は、もうみずから見てはいない。そこに人間の作為はない。むしろ、ただひたすらに注意の網をはりめぐらせ、ものから反射された視線によって、いわば反射光によって、人はそれを見る。

視線によって「感ずる」ことを拒絶し、むしろ視線によって「考え」ようとする。対象を見据えそこに不純なる己れの情を混じえぬよう細心の注意を払うこと、すなわち、あらゆる人間的な官能を一切拒否すること——これがヴァレリーの資質である。その意味においてヴァレリーは“知性”の人であり、また“見者”であった。

「詩人が見者となるためには、己れの一切の官能の、長期間にわたる、深刻にして理論的な紊乱によらねばならぬ。」⁸⁹⁾

しかし、ヴァレリーをあくまで詩人たらしめたものは、その「紊乱」、かの激しい拒否の姿勢からのみ生まれるあえかな官能をも歴然と見わけるまなざしに他ならなかった。そしてまさにその時、はっきりと目醒めた視線は微かに歌いはじめる……。

そして「観る」とは見えぬものを予見すること。見えるものを見つけた時、見えざるものが観えてくる。「観る」とは「見えぬ」ものをみることに他ならなかった。そして、そこに認識の逆転がおこる。すなわち、混沌たる事柄をこちら側から整序するのではな

く、かえって事柄にひそむ摂理が、こちらの混沌をととのえにやってくる。人はそこで視によってものを思い、すなわち、そこでは視線が考える……。

我々は、ヴァレリーから随分遠く離れてしまったのだろうか。いな、そうではない。これまでずっとみてきた通り、ヴァレリーという問題は、新しい言語使用のかたち、すなわち文学にかかわる問題であった。そして、我々は今、とりわけ文学的な出来事、すなわち「イデー」(想念。idée)生成の場所に立ち合おうとしているのである。「イデー」(想念。idée)ということばが、ギリシア語の動詞「イデイン」(ιδεῖν。「見る」または観想する)にさかのぼることは興味深い。すなわち、「イデー」は「観想する」(ιδεῖν)ことによって生ずる。静かに観想すること、視線そのものになりきること。そこにこそ「イデー」生成の契機がある。

持ち前の固定観念によって事柄を解体整序しようとする時、たちどころに「イデー」は息絶えるだろう。

「世の大方の人は、眼を以て見るよりも、知恵分別でものを見る場合が多い。(中略)自分の網膜によるよりもことばで知覚し、対象に近づくこともせず、ものを見る楽しみ苦しみもほんやりとしたことしかわからない」⁹⁰⁾

すなわちここにはことばと網膜との乖離がある。そしてそれは単にことばと網膜との間にとどまらず、他のあらゆるところへ及んでいることだろう。たとえば、ことばと音、ことばとリズム。すなわち、かくまでことばは本来の有縁性を断ち切れつつあるのであり、そこにもはや「イデー」は生まれ難いということにもなる。

しかし、注視し、観想する時、見えるものの裡から立ちのぼる見えざる合理の予感が、にわかにかち側側の錯綜混乱を整序する。その時、まさにその時、視線は考え、「イデー」は生まれるだろう。「イデー」とは新たな観念に他ならぬのだから。そして「イデー」の生成そのことにも増して知性を驚かせ、魂を覚醒のうちなる陶醉へと導くものがあるだろうか。しかしまた、かかる醒めた陶醉なくして、すなわち「イデー」の生成に立ち合うことなくしてものを見るとは、一体何という退屈な仕種であろうか。

かくして人は予見し、新たなことばを索める。ところがここに、意外な逆転、しかしおそらく最後の逆転、が起こる。

人は想念のためにことばをたぐる。しかし、時として、そのことばによって、かえって想念のほうがあたぐ

り寄せられる。詩人と呼ばれるために価する人々の裡にあっては、この逆転がおこり得るのである。

「詩人とは、情感によって彩られた世俗日常のことばを《神々のことば》へと引き上げる特殊な翻訳者である。しかしてその舞台裏では、想念のために語がたぐられるのではなく、かえって語のために、あるいはことばみずからがおこす律動によって、想念がたぐられる。」⁹¹⁾

ここにことばは自律へと向かうであろう。そして作品がつくりあげられ、あえてあらためて、みずからはじめから始められた文学活動も、ここにひとまず、ひとつの結末をみる。同時に、我々にとっての文学的関心事であるヴァレリーも、ひとまずここに完結する。しかしそれは、ここにヴァレリーが終わるということではない。むしろヴァレリーは、ここからはじまるのである。

ヴァレリーは、精神の作業にかかわるあれやこれやを注視することを好んだ。

「私の注意が最も自然に働く場合、それは思惟の作業そのものをよく見たいという、空しい欲望にかきたてられる。思惟の主題や問題、あるいは範囲といったものは、特にそう努めない限り私の注意を惹かない。私のような精神の生そのものの愛好者を魅惑するものは、思惟においておこなわれているであろう置換や変質であり、明らかな洞察と意志とのさまざまな変貌であり、そこにおこる相互の調停や干渉である。」⁹²⁾

「内的活動に関心を持つ眼は、思惟の変化の様々をみることで満足し、思惟の達する結論のほうは、これを単なる一事件、短い休符、または延音符のようなものとしてみようとする。」⁹³⁾

そして、ヴァレリーは、こういうものの見方の長短両面をわきまえていた。

「こういう見方の大きな長所は、それが、純粹に知的な事柄の取り扱いにおいて、最大の一般性を許す、ということである。」⁹⁴⁾

「しかしこういう見方は、打ち勝ち難い誘惑であり、何の哲学も、何の決定も、何の結論も含んではない。」⁹⁵⁾

しかし、ヴァレリーはここからはじめた。

「精神の愛好者がすることは、まさに知性の組み合わせのはたらきや、その動揺を、楽しんで観ることに他ならず、彼はそこに多くの奇蹟を認めて嘆賞する。たとえばそこには、本来無秩序なものが瞬間的な秩序を生むことがみられ、何かの気まぐれな素質からひとつの必然が生まれたり構成されたりすることが見ら

れ、偶然が法則を生み出し、追隨的なものが原理的なものを駆逐するのがみられる。またそこには、個人の自負心が、みずからによってつくり出された障壁に挑み、己れの分析力と注意力とを費し、試みる様子を見ることができるといえる。

そして、精神の愛好者は、かかること以上に豊かな内容を備えた詩の材料はこの世にはないと考えるに至る。知性の生は、比類なき抒情詩的世界、ひとつの申し分ない劇を構成する、と考えるようになる。(中略) この思惟の世界は、思惟の思惟を瞥見させつつ、その中心にある意識という神秘から明晰への気違いじみた要求を刺戟する明るい外辺へとひろがっており、本能が支配する感情的生の世界と同程度に、変化に富み、心をゆりうごかし、思いがけぬ事件と偶然の干渉とによって我々を驚かせ、すなわちそれ自身において驚嘆に価するものである。一体、あらゆる実用を離れた知的努力以上に、とりわけ人間的な、最も人間らしい人間に特有なものがあり得ようか。」⁹⁶⁾

ヴァレリーはもはや「観想」の姿勢である。^{★16} そして「観想」を「思索」へとかりたてるものが他ならぬことばであり、かかる精神活動の裡にこそ《文学》はあった。さればヴァレリーがこの「純粹にして向こうみずな活動」⁹⁷⁾を始める今、ヴァレリーという問題、すなわち我々にとっての秀れて文学的な課題が、まさにはじまるのである。

* * *

「ひとつの詩篇は《知性》の祝祭であらねばならぬ。他の物ではあり得ない。

祝祭、それは遊戯である。しかし盛大な、整然たる、有意な遊戯。平日ではないということの姿であり、努力がかなえられて律動となる状態の姿である。

人は何ごとかを完成して、あるいはその最も純粹にして美しい状態を以てそれを示して、これを祝う。(中略)

祝祭が終われば、何ものも残ってはならぬ。灰、踏みだかれた花飾り。」⁹⁸⁾

ことばは沈黙に発する。

まず、沈黙があった。それが、ことばであった。沈黙の中で全てが孤立し、しかし全ては沈黙のたゆたいの中に安堵していた。識のみがあり、それが、他との区別をつけるともなくつけていた。

意が生まれた時、それは音をかすめとって〈こと

ば)となった。それは、本来あり得べからざる、まやかしのことばであった。

まやかしのことばは栄えた。そして意が栄えた。やがて諸々の意は〈ことば〉によって連絡詩、そこに知が生まれた。知とは〈ことば〉による《ことば》であった。

知は知を生み、《ことば》は栄えに栄えた。やがて《ことば》はことば、すなわち沈黙を蔽う。そして人々はことばを忘れた。

まやかしのことば、あるいは知としての《ことば》、それが我々のことばだ。そして文学は、そのまやかしのことばによって成り立っている。

文学作品とは、ことばのまやかし、そのはぐらかしを知ったうえでつくられた、ことばの作物の謂。そのはぐらかしを知らずに、つまりあるところの〈ことば〉、あるいは《ことば》を無反省に用いて意をあらわした場合、それを我々は文学作品とは呼ばない。

文学は、ことばのはぐらかしを知ったうえで、あえてそのはぐらかしを徹底させようとする。はぐらかしを知ったうえで、あえてはぐらかす。それははぐらかしのことばのただ中であってはぐらかすまいとするその無自覚、無反省な、しかし実に“愛すべき”行為こそが、真に許し難いのはぐらかしの行為に他ならぬからだ。ことばに対する呑気な信頼を捨て去ること。そこにこそ、ことばに対する真の敬意がある。

人はひとつの詩篇に陶酔する。しかしそのうちの何人が、そういう事態の危険に気づくだらうか。人はその時、はぐらかされているのである。詩篇とは、ことばによるはぐらかしの、その極に他ならぬ。ことばにはそれほどの威力があり、しかしまたそれほどの危険が、ことばにはつきまとう。人は、少なくとも一度は、詩篇に対し戦慄せねばなるまい。

一方に文学という祭りの場があり、他方に沈黙がある。ことばの祭りを、単におめでたいお祭り騒ぎにおわらせぬためにも、すなわち文学活動を真の《知性》の祝祭として整然と司るためにも、人は沈黙の重さを慎重に量りつづけなければならない。^{★17}

註 (NOTE)

CHAPITRE PREMIER

- 1) Œuvres de Paul Valéry, Tome I, (Bibliothèque de la Pléiade) p.825.

- 2) *ibid.*, p.826.
 3) *ibid.*, p.825.
 4) *ibid.*, p.807.
 5) *ibid.*, p.807.
 6) *ibid.*, p.827.
 7) *ibid.*, p.807.
 8) *ibid.*, p.1200.
 9) *ibid.*, p.1203.
 10) *Ibid.*, p.1155.
 11) *ibid.*, p.p.1155-1156.
 12) *ibid.*, p.1155.
 13) *ibid.*, Tome II, p.1192.
 14) *ibid.*, p.1192.
 15) *ibid.*, p.1203.
 16) *ibid.*, p.1203.
 17) *ibid.*, p.1199.
 18) *ibid.*, Tome I, p.621.
 19) *ibid.*, p.620.
 20) *ibid.*, p.707.
 21) *ibid.*, p.622.
 22) *ibid.*, p.622.
 23) *ibid.*, p.626.
 24) *ibid.*, p.807.
 25) *ibid.*, p.815.
 26) *ibid.*, p.813.
 27) *ibid.*, p.813.
 28) *ibid.*, p.816.
 29) *ibid.*, p.791.
 30) *ibid.*, p.805.
 31) *ibid.*, p.806.
 32) *ibid.*, Tome II, p.1512.
 33) *ibid.*, Tome I, p.1316.

CHAPITRE II

- 34) Œuvres de Paul Valéry, Tome I, p.1156.
 35) *ibid.*, p.p.1203-1204.
 36) *ibid.*, p.1231.
 37) *ibid.*, p.1231.
 38) *ibid.*, Tome II, p.578.
 39) *ibid.*, Tome I, p.821.
 40) *ibid.*, Tome I, p.594

CHAPITRE III

- 41) Œuvres de Paul Valéry, Tome I, p.1361.
 42) *ibid.*, p.790.
 43) *ibid.*, p.790.
 44) *ibid.*, p.789.
 45) *ibid.*, p.790.
 46) *ibid.*, p.1440.
 47) *ibid.*, p.1316.
 48) Descartes: Discours de la Méthode, Première Partie (Œuvres et Lettres de Descartes, Bibliothèque de la Pléiade, p.126.)
 49) *ibid.*, Tome II, p.801.
 50) *ibid.*, p.p.1227-1228.

CHAPITRE IV

- 51) Œuvres de Paul Valéry, Tome I, p.1440.
 52) *ibid.*, p.1441.
 53) *ibid.*, p.1341.
 54) *ibid.*, p.1441.
 55) *ibid.*, p.1441.
 56) *ibid.*, p.1440.
 57) *ibid.*, p.1441.
 58) *ibid.*, p.1316.
 59) *ibid.*, p.1342.
 60) *ibid.*, Tome II, p.550.
 61) *ibid.*, p.1175.
 62) *ibid.*, p.1175.
 63) *ibid.*, p.553.
 64) *ibid.*, p.559.
 65) *ibid.*, p.1221.
 66) *ibid.*, Tome I, p.1373.
 67) *ibid.*, p.1373.
 68) *ibid.*, p.1373.
 69) *ibid.*, p.1325.
 70) *ibid.*, p.1510.
 71) *ibid.*, p.1373.
 72) *ibid.*, p.p.1324-1325.
 73) *ibid.*, p.1330.
 74) *ibid.*, p.1330.
 75) *ibid.*, p.1375.

CHAPITRE V

- 76) Œuvres de Paul Valéry, Tome II, p.625.
 77) *ibid.*, Tome I, p.1363.
 78) *ibid.*, p.1362.
 79) *ibid.*, p.1362.
 80) *ibid.*, Tome II, p.1208.
 81) *ibid.*, p.1208.
 82) *ibid.*, Tome I, p.643.
 83) *ibid.*, Tome II, p.1187.
 84) *ibid.*, p.1203.
 85) *ibid.*, p.1203.
 86) Cahiers de Paul Valéry, Tome I (Bibliothèque de la Pléiade) p.386.

CHAPITRE VI

- 87) Œuvres de Paul Valéry, Tome II, p.1187.
 88) *ibid.*, p.1181.
 89) Rimbaud: La Lettre á Paul Demeny, 15 MAI 1871. (Œuvres de Rimbaud, Garnier, 1960. p.547)
 90) Œuvres de Paul Valéry, Tome I, p.1165.
 91) *ibid.*, p.212.
 92) *ibid.*, p.796.
 93) *ibid.*, p.798.
 94) *ibid.*, p.798.
 95) *ibid.*, p.796.
 96) *ibid.*, p.p.796-797.
 97) *ibid.*, p.797.

- 98) *ibid.*, Tome II, p.p.546-547.

参考文献 (BIBLIOGRAPHIE)

A ヴァレリー関係 (BIBLIOGRAPHIE VALÉRYENNE)

I ヴァレリー自身によるもの (ÉCRITS DE PAUL VALÉRY)

Œuvres de Paul Valéry, Tome I: édition établie par Jean Hytier, précédée d'une introduction biographique par Agathe Rouart — Valéry. (Bibliothèque de la Pléiade). Gallimard, Paris. 1957.

Œuvres de Paul Valéry, Tome II: édition établie par Jean Hytier. (Bibliothèque de la Pléiade). Gallimard, Paris. 1970.

Cahiers de Paul Valéry, Tome I: édition établie, présentée et annotée par Judith Robinson. (Bibliothèque de la Pléiade). Gallimard, Paris. 1973.

Cahiers de Paul Valéry, Tome II: édition établie, présentée et annotée par Judith Robinson. (Bibliothèque de la Pléiade). Gallimard, Paris. 1974.

II ヴァレリーに関するもの (ÉCRITS SUR PAUL VALÉRY)

Maurice Bémol: *La Méthode Critique de Paul Valéry*. Librairie Nizet, Paris. 1960.

カール・レーヴィット: 『ポール・ヴァレリー—その哲学的思惟の概要—』。(Karl Löwith: Paul Valéry, Grundzüge seines philosophischen Denkens. Vandenhoeck & Ruprecht., Göttingen. 1971.). 中村志朗訳。東京、未来社。1976年。
 ジャン・ポーラン: 『野生状態の修辞家、ポール・ヴァレリー—』。(Jean Paulhan: Un rhétoricien à l'état sauvage: Paul Valéry ou la littérature considérée comme un faux.). 荒木亨訳。『世界批評体系 6—試論の現在—』(篠田一士、川村二郎、菅野昭正、清水 徹、丸山才一 編。東京、筑摩書房。1974年。)に収録。

マルセル・レイモン: 『ポール・ヴァレリー—精神の誘惑—』。(Marcel Raymond: *Paul Valéry et la tentation de l'esprit*. Édition Baconnière. 1946. nouvelle édition, 1952.). 佐々木明訳。東京、筑摩書房。(筑摩叢書 228)。1976年。

ピエール・ルーラン: 『現代世界と精神—ヴァレリーの文明批評—』。(Pierre Roulin: *Paul Valéry, Témoin et Juge de Mond Moderne*. Édition Baconnière. 1964.). 江口幹訳。東京、法政大学出版局。(りぶらりあ選書)。1972年。

アルベール・チボーデ: 『ポール・ヴァレリー—』。(Albert Thibaudet: *Paul Valéry*, Les Cahiers Verts. Grasset. 1923.). 森英樹訳。東京、理想社。1960年。

石川 淳: 『ヴァレリー』。『文學大概』(東京、中央公論社。中公文庫。1976年。)に収録。

山田 直: 『ポール・ヴァレリー—「ジェノヴァの危機」をめぐって—』。東京、慶應義塾大学法学研究会。(慶應義塾大学法学研究会叢書 別冊 3)。1974年。

新装版『ヴァレリー全集』(全12巻・補巻1。落合太郎、鈴木信太郎、渡辺一夫、佐藤正彰監修。東京、筑摩書房。

- 1967-1971年。)月報1~13。
- B ヴァレリー関係以外 (BIBLIOGRAPHIE GÉNÉRALE)
- I ヴァレリーが言及した人物および事柄に関するもの (OUVRAGES CONCERNANT LES AUTEURS ET LES SUBJECTS ETUDIÉS PAR PAUL VALÉRY)
- レオナルド・ダ・ヴィンチ：『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記』(上・下)。杉浦明平訳。東京、岩波書店。(岩波文庫)。1954年。
- OEuvres et Lettres de Descartes*. Textes présentés Par André Bridoux. (Bibliothèque de la Pléiade). Gallimard, Paris. 1952.
- Stéphane Mallarmé: *The Poems*. a bilingual edition. Translated with an introduction by Keith Bosley. Penguin Books. 1977.
- ブロンノフスキー/マズリッシュ：『ヨーロッパの知的伝統—レオナルドからヘーゲルへ—』。(J.Bronowski, Bruce Mazlish: *The Western Intellectual Tradition, From Lenard to Hegel*. Harper & Row, New York. 1960.)。三田博雄、宮崎芳三、吉村 毅、松本啓、共訳。東京、みすず書房。1969年。
- 野田又夫：『デカルト』。東京、岩波書店。(岩波新書)。1966年。
- ブルーノ・タウト：『建築とは何か』。(Bruno Taut: *Architekturüberlegungen & Wie Kann Eine Gute Architektur Entstehen?* 篠田英雄訳。東京、鹿島出版会。(SD選書95)。1974年。
- ブルーノ・タウト：『日本美の再発見』。篠田英雄訳。東京、岩波書店。(岩波新書)。1939年。改訂版 1962年。
- フェルナン・プイヨン：『粗い石』。Fernand Pouillon: *Les Pierres Sauvages*. Édition du Seuil. 1964. 荒木 亨訳。東京、文和書房。1974年。
- 小倉 朗：『現代音楽を語る』。東京、岩波書店。(岩波新書)。1970年。
- 石福恒雄：『舞踊の歴史』。東京、紀伊国屋書店。1974年。
- II 言語と思想の問題に関するもの (OUVRAGES CONCERNANT LE PROBLÈME DE LE LANGAGE, ET LA PENSÉE)
- Ferdinand de Saussure: *Cours de Linguistique Générale*. édition critique préparée par Tullio de Mauro. Payot, Paris. 1975.
- フェルディナン・ド・ソシュール：『一般言語学講義』。小林英夫訳。東京、岩波書店。1940年。改訂版 1972年。
- トゥリオ・デ・マウロ：『ソシュール一般言語学講義』校注』。(Ferdinand de Saussure: *Corso di Linguistica Generale*. Introduzione, traduzione e commento di Tullio de Mauro. Nella 《Universale》, 1970.)。山内貴美夫訳。東京、而立書房。1976年。
- トゥリオ・デ・マウロ：『意味論序説』。(Tullio de Mauro: *Introduzione alla semantica*. Editori Laterza. 1965.)。竹内孝次訳。東京、朝日出版社。(朝日現代選書)。1977年。
- 前田英樹：「語る行為とフォルム—ソシュール・ノート(I)」。『中大仏文研究』収録。1976年。
- 山内貴美夫：『言語学原理—二重意識に関する考察—』。東京、而立書房。1973年。
- 竹内芳郎：『言語・その解体と創造』。東京、筑摩書房。1972年。
- Pierre Guiraud: *La Stylistique*. (Collection Que sais-je? N° 646). Presses Universitaires de France. 1955.
- ピエール・ギロー：『文体論』。佐藤信夫訳。東京、白水社。(文庫クセジュ258)。1956年。
- ピエール・ギロー：『意味論』。(Pierre Guiraud: *La Sémantique*. Collection Que sais-je? N° 655. Presses Universitaires de France.)。佐藤信夫訳。東京、白水社。(文庫クセジュ238)。1958年。
- ピエール・ギロー：『記号学』。(Pierre Guiraud: *La Sémiologie*. Collection Que sais-je? N° 1421) . Presses Universitaires de France.)。佐藤信夫訳。東京、白水社。(文庫クセジュ514)。1972年。
- Roland Barthes: *Le degré zéro de l'écriture*, suivi de Neuf nouveaux essais critiques. Édition du Seuil. 1953, et 1972.
- ロラン・バルト：『零度のエクリチュール・付記号学の原理』。渡辺 淳、沢村昂一、共訳。東京、みすず書房。1971年。
- S. K. ランガー：『シンボルの哲学』。(S.K.Langer: *Philosophy in a New Key, a study in the Symbolism of Reason, Rite, and Art*. Harvard University Press. 1957.)。矢野萬里、池上保太、貴志謙二、近藤洋逸、共訳。東京、岩波書店。(岩波現代叢書)。1960年。
- Ludwig Wittgenstein: *Tractatus Logico-Philosophicus*. (First German edition in *Annalen der Naturphilosophie*, 1921.) translated by D. F. Pears & B. F. McGuinness with the Introduction by Bertrand Russell, F. R. S.. Routledge & Kegan Paul, London. 1961. First paperback edition, 1974.
- 時枝誠記：『国語学原論—言語過程説の成立とその展開—』。東京、岩波書店。1941年。
- 荒木 亨：『ものの静寂と充実』。東京、朝日出版社。1974年。
- 大野 晋：『日本語をさかのぼる』。東京、岩波書店。(岩波新書)。1974年。
- 小倉 朗：『日本の耳』。東京、岩波書店。(岩波新書)。1977年。
- 鈴木孝夫：『閉ざされた言語・日本語の世界』。東京、新潮社。(新潮選書)。1975年。
- 田中千禾夫：『物言う術』。東京、白水社。1973年。
- アンドレ・ルロワ＝グーラン：『身振りと言葉』。(André Leroi-Gourhan: *Le Geste et la Parole*. 2vol. Édition Albin Michel 1964.)。荒木 亨訳。東京、新潮社。1973年。
- III その他
- 『ヴァレリー全集』(全12巻・補巻1。新装版)。落合太郎、鈴木信太郎、渡辺一夫、佐藤正彰、監修。東京、筑摩書房。旧版 1967年~1971年。新装版 1973年~1974年。
- 『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法』。山田九朗訳。東京、岩波書店。(岩波文庫)。1977年。

- 『ヴァレリイ詩集』。菱山修三訳。東京、JCA 出版。1978 年。
- Paul Valéry: an Anthology*. Selected, with an Introduction by James R. Lauer. (from The collected Works of Paul Valéry edited by Jackson Mathews.). Princeton University Press. Bollingen Series XLV. A.
- デカルト：『省察』。三木 清訳。東京、岩波書店。(岩波文庫)。1949 年。
- デカルト：『方法序説』。落合太郎訳。東京、岩波書店。(岩波文庫)。1953 年。改版 1967 年。
- デカルト：『精神指導の規則』。野田又夫訳。東京、岩波書店。(岩波文庫)。1950 年。
- 内田義彦：『社会認識の歩み』東京、岩波書店。(岩波新書)。1971 年。
- カール・マルクス：『資本論』からいわゆる「価値論」。(第 1 部第 1 篇第 1 章 第 1 節～第 4 節)長谷部文雄訳。東京、青木書店。(青木文庫 17)。1957 年。
- 唐木順三：『無常』(東京、筑摩書房。筑摩叢書 39。1965 年。)より一の(六)すなわち「和泉式部日記」。
- 那珂太郎：「試論のためのノート」、「ポリフォニイの詩学」、「現代詩の言葉とその構造」、「韻律」、「言葉・音韻・魂」、「ノート断片」、「音韻に関するノート」。『荻原朔太郎その他』(東京、小澤書店。1975 年。)に収録。
- 那珂太郎：『定本 那珂太郎詩集』。東京、小澤書店。1978 年。
- Arthur Rimbaud: *Oeuvre de Rimbaud*. Sommaire biographique, introduction, notices, relevé de variantes et notes par Suzanne Bernard. Garnier Frères, 1960.

TABLE ANALYTIQUE DÉTAILLÉE

(内容細目：仏文抄訳)

CHAPITRE PREMIER

INTRODUCTION À L'ESPRIT DE PAUL VALÉRY

Cogito ergo sum, ou “un acte reflexe de l'intellect.”: “Il n'y a pas de syllogisme dans le Cogito, il n'y a même point de signification littérale. Il y a un coup de force, un acte réflexa de l'intellect.”: Léonard de Vinci, ou “le pouvoir de l'esprit”: “En réalité, j'ai nommé homme et Léonard ce qui m'apparaissait alors comme le pouvoir de l'esprit.”: Degas, ou “un artiste aussi raffiné.”: “Une oeuvre était pour Degas le résultat d'une quantité indéfinie d'études, et puis, d'une série d'opérations.”: Stéphane Mallarmé: “Je dirai (à mes risques et périls) que Mallarmé, portant le problème de la volonté dans l'art au suprême degré de généralité, s'éleva du désir de l'inspiration qui dicte un moment de poème, à celui de l'illumination qui révèle l'essence de la poésie elle-même.”: Discours de la Méthode, ou “coups d'État intellectuels.”: Descartes et MOI: “J'ai insisté sur la personnalité force et téméraire de grand Descartes, dont la philosophie, peut-être, a moins de prix pour nous que l'idée nous présente d'un magnifique et mémorable Moi.”: La méthode critique de Paul Valéry: “J'ai la manie étrange et dangereuse de vouloir, en toute matière, commencer par le commencement (c'est-à-dire, par mon commencement individuel).”

CHAPITRE II

LA MÉTHODE CRITIQUE DE PAUL VALÉRY

VIVRE et CONSTRUIRE: “Un auteur qui compose une biographie —peut essayer de vivre son personnage, ou bien, de le construire. Et il y a opposition entre ces parties. Vivres, c'est se transformer dans l'incomplet. La vie en ce sens, est toute anecdotes, détails, instants. La construction, au contraire, implique les conditions a priori d'une existence qui pourrait être —TOUT AUTRE.”: Introduction à la Méthode de Léonard de Vinci, ou un essai de construire: “Ce qui est le plus vrai d'un individu, et le plus Lui-Même, c'est son possible, —que son histoire ne dégage qu'incertainement. --- C'est pourquoi ma tentative fut plutôt de concevoir et de décrire à ma façon le Possible d'un Léonard que le Léonard de l'Histoire.”: concevoir et décrire le POSSIBLE et une invention de Valéry: “imaginer à l'exclusion de tous ces détails extérieurs, un être théorique”: imaginer les machines: une invention de Valéry et la Méthode de Descartes: un moment de l'esprit et règles pour la direction de l'esprit: construire le POSSIBLE.

CHAPITRE III

LE LANGAGE DE PAUL VALÉRY

Une facilité: l'intention de Valéry: “Je vous proposerai---avec la ferme intention de ne rien dire qui ne soit de pure constatation, et que tout le monde ne puisse observer en soi-même ou par soi-même, ou, du moins, retrouver par un raisonnement facile.”: le langage de Descartes: “Point de difficultés, point d'images, pas d'apparences scolastiques, rien dans ce texte qui ne soit du ton intérieur le plus simple et plus humain, à peine un peu plus précis que la nature. : le langage universelle: “Une parole intime, où il n'y a point d'effets ni de stratagèmes, étant notre propriété la plus proche et la plus certaine, quoiqu'elle nous appartienne si étroitement, ne peut pas ne pas être universelle.”: le langage de Valéry, le langage à l'état naissant: le bon sens et notre langage: delimitier, le mouvement du langage à l'état naissant: le langage pour délimitation: dialogue et discours: le langage quotidien et l'usage de langage à ce point pur.

CHAPITRE IV

LE PROBLEME DE LA 《POÉTIQUE》

La Littérature pour Valéry: “la Lettérature est ne peut être autre chose qu’une sorte d’extension et d’application de certaines propriétés de Langage.”: 《Poétique》, le dessein d’une théorie de Littérature, : la vue de 《Poétique》: POÏEIN, le principe de 《Poétique》: “Le faire, le poëin est celui qui s’achève en quelque oeuvre.”: le principe de l’art : “L’artiste ne doit, selon cette condition surannée, s’accuser que par son style, et doit soutenir son effort jusqu’ à ce que le travail ait effacé les traces du travail.”, “Perfection c’est travail.”: la prose et le poème, ou le marche et la danse: “La marche, comme la prose, vise un objet précis. Elle est un acte dirigé vers quelque chose que notre but est de joindre. --- La danse, c’est tout autre chose. Elle est, sans doute, un système d’actes; mais qui ont leur fin en eux-mêmes. ”. de la prose aux poème,.

CHAPITRE V

LE PROBLÈME DE ÉCRIRE

“Écrire, c’est prévoir.”: Poésie: “Nous savons que ce mot a deux sens, c’est- à-dire deux fonctions bien distinctes. Il désigne d’abord un certain genre d’émotions, un état émotif particulier, qui peut être provoqué par des objets ou des circonstances très diverses. ---Mais il existe une seconde acception de ce terme, un second sens plus étroit. Poésie, en ce sens, nous fait songer à un art, à une étrange industrie dont l’objet est de reconstituer cette émotion que désigne le premier sens du mot.”: Poëin et Poésie: “Ce n’est point avec des idées que l’on fait des vers --- C’est avec des mots.”: écrire, ou le pur exercice: Cahiers de Paul Valéry,.

CHAPITRE VI

LE REGAED PENSIF

Poëin et Penser: Valéry, ou Voyant: voir, tracer, et le regard: voir et penser: L’amateur de l’esprit: Le regard Pensif:

【附記】

本稿は、筆者が1979年3月末の卒業に向けて国際基督教大学教養学部人文科学科に提出した学士論文（卒業論文）である。そのような旧稿を何故ここに置いたかについては、些かの事情がある。

本来この紀要には、筆者が2023年3月末をもって追手門学院大学を退職するにあたり、同月22日におこなった最終講義「非“文学”の中に、『文学』を探る」の原稿を掲載する目論見であった。しかし、そちらが4月以降に大学の電子図書館「LibrariE（ライブラリエ）」で公開されることとなったので、重複を避けるために、急遽、未発表の別稿を準備する必要に迫られた。しかし、相応しいものがなかなか見当たらず、結局卒業論文にまで行き着いた次第である。その結果、教職として掲載される最後の論考が、奇しくも、43年の時を隔てて、学生として最初にもした論文と入れ替わることとなった。

本紀要への掲載に先立ち一通り再読してみると、もとより初学の若書きゆえ、気負いもあれば鼻につくもの言い方もある。考え半ばで書き始め、書きながら考えるという流儀で押し切ったが故の弊害もあちこちに散見される。すなわち、螺旋状の繰り返し、例示の順序の未整理、根拠薄弱な言い切り……。400字詰め原稿用紙にしたかだか100枚程度の小論ではあるが、それらの荒っぽさで乗り切ってくくほか、学部生の力量ではかなわなかったのだろう。そこで、ここでの掲出にあたり修正を施すことも考えたが、それはまったく別の論文を書くに等しいことになることを即座に悟り、諦めた。

そのかわり、ここでは読み直しながら思いついたことを新註として加え、再読し終えて思い浮かんだことを後記として置くことにした。ちなみに、この流儀はヴァレリーがその初書きの論考「レオナルド・ダ・ヴィンチの方法への序説（Introduction à la méthode de Léonard de Vinci）」を公開するときの遣り方に倣ったものである。

【新註】

★1 勿体ぶった言い方をしているが、要は、事柄の内容を情報の披歴によって示すのではなく、事象の核心の周辺を情報によって榨取ることにより、その輪郭の内側に、これから探求しようとするをまずは閉じ込めておく、という方法の提示。これは、たとえば安部公房が示す小説というものの考え方、すなわち「（読者が）イメージを調理するための装置と材料の提供」というような創作作法と通い合うと同時に、本論考においてこれから先に頻出する“かく在りしもの”を描くか、“かくあり得たもの”を描くか、というヴァレリーの対比に関わる。可能性としてのレオナルドを描いたヴァレリーに倣って、とりわけ『文学』的可能性としてのヴァレリーを描こうとした時に、書き始めにおいてはとりあえず対象を可能態として空白にしておこうと考えた、起筆のための工夫である。

★2 身の程を弁えぬ高飛車な物言いは、そのころ耽読していた石川淳の文体にやすやすと影響されたものである。軽薄な模倣ではあるが、文体はなにより発想

や思考の流れと密接な関係がある故に、論考の機動装置として、このような文体による背伸びを必要とした、というのが当時の事情。そうしてみれば、本論考には、同様に、さまざまな先賢の“文体模写”が散りばめられている。考えがゆきまると、その都度あれこれの文体の力を借りて、つぎつぎと突破して行こうとする非力が装う精一杯の客気。しかし、それらの文体に内在する力のおかげで、なんとか書き継いでゆくことができた。まさに、ヴァレリーの言うとおり「人は想念のためにことばをたぐる。しかし、時として、そのことばによって、かえって想念のほうりがたぐり寄せられる」。

★3 ここでは、「或る姿勢を決定する唯一の線への情熱」というヴァレリー流の美しい一行によって高名な画家・彫刻家の資質が言い当てられているが、「ドガ・ダンス・デッサン」という、頭韻が洒落たタイトルの短文集でヴァレリーが伝えた芸術家の“素顔”は、かなり気難しい。この人は、本論でも引用したように、詩人マラルメにも管を巻いている。芸術の分野を異にする作家たちの間に、このような濃密な関係が存在していたということ。功罪はあれ、サロンのような形で、羨望、嫉妬、悪意、奸計などが入り混じりながら、しかし創作物に対する遠慮会釈のない批評が、陰に陽に、日常的におこなわれていた、という時代。しかし、それらの暴言にさらされつつ、そこを掻い潜ってきたからこそ、当時の文芸が今日まで生き延びているのかも知れない、と思うと、内容も明かされぬ出版前に相当数の売れ行きが確約されるような商業出版のシステムから生まれる“名作”が、今後どれくらいの生命を保ち売れるのか、少し心もとなくも思う。余談ながら。

★4 自らの裡にあったものが他との接触によって浮上する、というのは、「影響」というものに対する一つの考え方ではあるが、たとえば認知心理学的に真理であるかどうかは分からない。いわゆる“論理的”な文章を書こうとすると、どうしても「前提」・「理由」・「結論」といったような小三角形の構造に情報を配置することになる。その際、「理由」は、ボルダリングを例にとれば、踏み締める石、掴みとる石を仲介する支えの石である。だから、文章の書き手はこの「理由」探しに思考の精力を注ぐ。できるだけ広範に思索して、最適と思われる理由を選択するのだが、所詮は“論理的”と呼ばれるための辻褃合わせである。揺るがぬ理由を、調べ尽くし考え尽くして発見することは時間もかかり、そもそも困難である。この部分、ちょっとした思考のハンドル捌きで、記述の交差点を切り抜けようとしていることは、明らか。

★5 石川淳は、小論「ヴァレリイ」（『文学大概』所収）の中で、マラルメに＜純粹精神＞を、バルザックに＜象徴派的精神＞を、スタンダールに＜観念が現実でしかないような見事な世界＞を見るが如く、ヴァレリーには＜人間の全体のうちに機械を想定しておくこと＞を提唱している。この、一人の人物の中に＜機械＞を想定する、という発想が、ここまで書き

進めてきて、“かく在りしもの”と“かくあり得たもの”を描き分ける言葉の運び、その違いは何かということに思いあぐねていた者にとっての、橋渡しとなった。失われた環^{ミッシングリング}を発見したような気分、それらの違いを「生きる」と「組み立てる」に言い分けたのだ。ここに「機械」が唐突に現れるのは、そのような事情による。

- ★6 ヴァレリーの中に《文学》を見る場合、それは語られた内容であるよりは、むしろ想念と言葉との新たな結合という“事件”である、というのが、起筆以前からの見立てであった。さらに、日本語で書かれないいわゆる詩歌小説の類（“文学”と呼ばれるもの）をただその内容に即して読解しているだけでは、言語の作用として《文学》を考えようとする際には、およそ埒があかないだろう、という焦燥感があり、ヴァレリーの仕事を通してその難局^{ワザワザ}を打開したい、というのがこの主題における学士論文の執筆動機であった。そして、そのように突き動かされる契機となったのが、高校の国語教科書に載っていたヴァレリー「人と貝殻」の冒頭部分。観るところが考えることとなり、想念がそのまま思索に変ずるようなあの独特の文体から、ひるがえって日本“文学”の欠落した領域を感じた私は、以後、詩歌小説の類を超えた日本語表現の広い領域を射程に収めながら、いわば非“文学”の中に《文学》を探る営みに導かれていった。もっとも、その最初の感動は、齋藤磯雄によるその名訳の力、日本語における“詩的感興”生成の巧みに与るところが大きかったかも知れない。
- ★7 ここでデカルトの「良識（bon sense）」を持ち出したのは、社会的に形成されたあらゆる偏見以前の認識・認知の領域における精神の働きに注目したかったからで、その哲学における概念そのものではない。むしろ、そのころ受講していたフェルディナン・ド・ソシュール『一般言語学講義』の講読から得られるさまざまな発想、とりわけここでは、その中で＜ラング（langue）＞と＜パロール（parole）＞と対比される概念のうち、「ラング：言語」というものの普遍性と、認識・認知に及ぼす不可思議な作用というものを、デカルトが「世の中で最も公平に分配されている」と言った「良識」の普遍性に重ね合わせて、論考の中に引き入れようとしていた。言語記号は恣意的であり音と意味との間になんら自ずからなる有縁は無い、とソシュールが言うその「ラング」の佇まいに、ヴァレリーの著作における言葉そのものの働きぶりを投影させながら。
- ★8 プラトンの対話篇は、学生時代の私にとって、日々まわりに生起するさまざまな出来事に辟易したときに読む一服の清涼剤であった。それは、世の多忙と喧騒から離れて、日当たりの良い広場で、なんら隠し立てをすることのない言葉が自在に運動してゆく姿をまざまざと彷彿させるもので、そこでソフィストたちとのやり取りをとおして話題の主題、その“真理”が、他ならぬ言葉そのものによって、囲われ、粹取られ、その輪郭を明らかにしてゆく時間経

過が、鬱屈した心の憂さを晴らしてくれた。また、論の抽象性を巧みに操作しながら、硬直した思考を解き、編みなおしてゆくソクラテスの言葉遣いの巧みに、その企みにニヤリとさせられながら、ふたたび日常のさまざまに取り組み活力を得ていた。その身体的な印象を、またヴァレリーにも感じ取っていたので、ここでその二つを重ね合わせる仕儀とはなっている。しかし、これは、あるいは若気の至り、若き日の思い過ごしであったかも知れない。

- ★9 「中立の状態にあることば」という言い方は、いかにも曖昧である。あらまほしき《文学》に希まれる言語作用、言葉のはたらきの一切が込められているので、そういうことになる。いまであれば、物事を詳細に記述する「理」表現と、それに別の位相から理解の光を当てる「喩」表現との違いという観点から、あるいは感覚的な事象を的確に言い止める「観」の表現と、それらと別の事象とをひとしなみにする普遍性をめざす「識」の表現といった角度から、あるいはまた、それら複数の対立項がつくりなす軸を組み合わせながら、その「中立」の真意を言い表そうとするだろう。逆に言えば、この学生時代の若書きにおける曖昧さを晴らすために、年月を費やしてそのような概念道具を今にして案出するに至った、ということでもある。
- ★10 こういったヴァレリーの発想が、本論考の、あるいはその後の《文学》的探求の基調もしくは通奏低音となっている。国際的にみればそれほど奇妙とも思われまいであろうこういった見解は、日本語による表現、とりわけ日本語による詩歌小説の類、すなわち日本“文学”の世界においては奇異の感を持って応じられるだろう。さすがに「言霊のサキワウ国」、書かれた内容本意の作品評価が優先されるわけだが、そもそも書くにあたって想念と言葉との間に生じる劇自体に事件が、いや少なくとも新味がなければ、書かれたものは焼き直しを組み替えに過ぎないということになる。私がフランス文学を学ぶことになったのも、あるいは学ばざるを得ない仕儀となったのも、そういう「日本“文学”」という文学観から一定の距離をとってみる必要を感じたからであり、そこに《文学》らしき言葉と想念の関係を直感したからであった。それらを鏡とすれば、日本“文学”を、そして日本語表現をあらためて考えてみるのが出来るかもしれないという予感とともに。
- ★11 ヴァレリーにとって「詩学」（poétique：ポエティーク）とは、詩を書くための規則集成といったものではない。その意味合いはギリシア語の「poiein」（つくる）という語源の方に大きく寄っている。人間がなにもものかを作ろうと企図しそれを実行しようとする。その時、「つくる」という一連の作業全体を、覚醒した意識の支配下に置くこと。それが、「poétique：ポエティーク」という言葉にヴァレリーが籠めた意味である。制作にかかわる一切を方法として秩序立て確立しようとするヴァレリーの知的な熱情は、「制作学」（poétique：ポイエティーク）という用語を

生み出したが、この概念によって、芸術全般における「つくる」行為を、詩作と同次元で考察することが可能になり、それらの作品が孕む「詩的感興」(poesie: ポエジー)もまた、領域を超えて自在に論ずることができるようになった。ソシュール『一般言語学講義』も、本人の預かり知らぬところで思わぬ“創造的曲解”を生み出し、その徒花のようないわゆる「構造主義」は、レヴィ・ストロースの文化人類学からロラン・バルトの記号論による文化現象の解析まで、新たな位相における文化理解をもたらしたが、その方法的にして汎説的な精神の運動に、ヴァレリーとの相似を感じる。

- ★ 12 言葉は情報を伝えることをその主務とする、と考えれば、意味を伝え終わった後は霧消するのが理想である。新聞記事の文体などは、当然それをめざすだろう。内容は分かっているのに、いつまでもその言い方や語り口が残っているのは、耳鳴りのようで鬱陶しい。しかし、ここに「火を貸してくれないか」というその一言が、耳に残って心地よく、葉巻の香りのようにいつまでも馥郁としている時、それが詩に変じようとしている言葉の兆しだ、というヴァレリーの指摘は、詩の始原を象徴的に示して味わい深い。それは、ライターでタバコに火をつける役者の、素早くも無駄のない仕草が、観客の人生にいつまでもつきまとい、洗練というものの感触を蘇らせ続けるようなもの。言葉が、単に意味伝達の道具であることを超えて、それ自体がモノとしての実在に変わる瞬間を捉えたヴァレリーの寸言は、このように、言葉を超えた事象をもひとしなみに永遠の相のもとに把握する、よく透る視線として機能する。
- ★ 13 「エッセイ」といえば、日本語では「随筆」と翻訳されて、書き手の教養や経験が日常の些事と程よく化合して、“文学”的窠臼を起こしたのとして受容されている。それはそれで、日本語表現において独特な一領域を確立しており、特に俳文の流れを汲む江戸末期のものには良品が多いけれども、その元となった *essayer* というフランス語の源を探れば、「試みる」という所作にゆきあたる。原初の意味において、ヴァレリーの言葉遣いにはエッセイ(試み)の志が、緊張をはらんで貫いている。叙述ではなく、発明。それをめざして、言葉を常に洗いざらしの状態に保つ。あるいは、言葉を必ず洗いざらして使う。みづから「言葉の衛生」と呼んだこの言葉の処理は、決して何かを書くための前処理ではなく、書くという行為そのものであった。そのような言葉づかいを日本語表現の中に探りあてることが、日本語の世界における《文学》探求の道りになるのではないかと、という予感、この論文執筆当時に私の頭を占めていた予感。
- ★ 14 “手帖”に、折に触れてなにかを書きつける、あるいは書きつけようと試みる、ということは何年にもわたって模してみると、なによりもその言葉が、突然おとづれる想念の、その電位差を保存する装置として役立つことがわかる。予兆もなくやってきて瞬時

に消失してしまうアイデアの数々。それらを、せめて言葉によるクロッキーとして描きとどめておけば、それを見るたびに発想の電位差を回復することができ、そこからあらたに着想を延長したり、発展させたりすることが可能だ。また、“手帖”に書きつけることは、それ自体が試みであり、実験であり、修練であるから、時として予期せぬ表現という作物、思索と言語のめざましい融合を手にもすることもある。また、なによりも、ペンを持って紙と向き合うときの精神のくつろいだ緊張が、身体の生理に運動をもたらす。まるで楽器が調律され、おのづと調べを奏ではじめるように。ヴァレリーがまだ空明けやらぬ暁どきに日々その作業を続けた、というのは、カントの散歩が人々に正確な夕刻を知らせた、という話に通じる、まことしやかな伝説かもしれないが、ファクシミリ版 29 巻で公開された『手帖 (Chaier)』の美しい筆跡を眺めていると、精神の密室において繰りかえされたヴァレリーの思索過程を、ちょうど墨跡の筆順を目でゆくりたり直す時に覚える興奮にも似た感銘を持って、辿りなおすことができる。

- ★ 15 「鉛筆を手^{クレヨン}にせずして或るものを見ることと、それを描こうとして同じものを見ることの間には、非常な違いがある」というヴァレリーの指摘の信憑性は、実際にやってみると、予想を遥かに超える実感をもたせて実感させられることになる。目と頭で見ているだけでは、なにも描くことができない。まったく手が出ない。ということは、ほとんどなにも見えていないのだ。そういう状態で言葉を観念的な意味とともに扱うことの危うさを、この体験は切実に教えてくれる。書こうとしてもものを見る、あるいは考えることと、ただぼんやりと眺め思い浮かべていることとの間には大きな違いがある。もちろん、その際、書くという行為がもたらす物事の歪曲の危険にも、同時に注意を払わなければならないが。
- ★ 16 「そこでは視線が考える (Da denkt des Auege)」と言ったのは建築家ブルーノ・タウトで、京都の桂離宮と遭遇した時の感動を述べた言葉である。自ら筆をとって水墨画風につくりなした『画帖 桂離宮』の中に見られる。この言葉をヴァレリーに重ねて論文のモチーフとし、さらに論文のタイトルにまでするのは、時代的にも文化的にもチグハグの感を免れないこと、それはこの論文の執筆当時に十分自覚してはいたが、さりとてそれに替わる約言も見つからず、“強行”してしまった。ヴァレリーの有名な詩「海辺の墓地」第1聯の終わりにある「*Ô récompense après une pensée / Qu'un long regard sur le calme des dieux!* (おお、思索のあとの報いは、神々静けさに投げかけられた長き視線)」あたりから採ることも考えたが、論文題としては“詩的”に過ぎて、できなかった。いまだに、なにか齟齬を感じてはいる。
- ★ 17 「浴陽の紙価を高める」には及ばずとも、なにか言葉を紙に書きつける以上は、“せめて白い紙のままであればまだしも使い道があったものの”，と言われたいようにしたいもの。それともうひとつ、巧みな

音楽演奏がもたらす完璧な沈黙、楽音が一瞬止まった時におとずれるあの深々と充実した静寂にも似た沈黙を生み出すことこそ、言葉を使うことの意味であり価値ではないかという思いが、私にはある。言葉巧みにあらゆることを語り尽くせば、この世界が隅々まで、明るく隈無く照らし出されるのか。そう考えるのは人間の傲慢で、言葉によって明らかにされることが多くなればなるほど、実はそれと等量の闇が静かに広がってゆく、あるいは準備されてゆくというのが事の在りようなのではないか、という、信条めいた身勝手な確信。それが、本論文冒頭の勿体ぶった言い方と同じような口ぶりで、この最後の部分で、唐突に噴出している。ヴィトゲンシュタインが『論理哲学論考 (Tractatus Logico-Philosophicus)』の末尾に置いたの言葉、「およそ言い得ることは明晰に言い表せる。語りえぬことについては、人は沈黙すべし」が、ここにも影をおとしている。「言い得ること」以上に、私には、「語り得ぬこと」の方が常に気にかかる。そして、その重さを精確に測量し、はっきりと知った上での言語使用は如何に可能か、それをいつも考えさせられている。

【後記】

最終講義「非“文学”の中に、《文学》を探る」の準備を進めながら初書きの旧稿を読みかえしてみても、講義の主題に関わる建てつけが、萌芽的としてそこに散見できることに、些か意外の感を持つと同時に、なにか斬鬼の念のようなものも込み上げてきた。書かれたものとしての“文学”とは一定の距離を保ちつつも、書き方としての《文学》を考察するその射程は、ヴァレリーが既に示しかつての私がそこに読み取り理解したと思ったものから、いまだ大きくは外れていない、という思い。43年の歳月を挟んだこの“符合”の確認が、はからずも、新たな探求の出発点となる。(2023年3月、記)

株式会社 VSN との産学連携による 論理的思考メソッド作成プロジェクトの記録

神 吉 直 人

I. プロジェクトの背景と趣旨

本稿は、追手門学院大学・成熟社会研究所（以下、成熟研）の学生研究員と株式会社 VSN（2022 年 1 月に Modis 株式会社に社名変更。以下、VSN 社）との産学連携プロジェクトの記録である^{1, 2)}。成熟研は、「鳥瞰的・横断的視点を持って伝統と革新の中から物事の本質をとらえ、若者の自立と社会環境に関わる調査・研究・提言を行う」ことを設立時の趣旨として掲げている。そして若者の自立に関して、自律性、および主体性を持った学生の育成を目指している。

成熟研では 2020 年に、『一人で思う、二人で語る、みんなで考える－実践！ロジコミ・メソッド』（成熟社会研究所、2020）を上梓した（以下、ロジコミ本³⁾）。これは「主体的で、対話的な、深い学び」の実現を目指して、それに必要な論理的に考え、分かりやすく伝えるコミュニケーション力の涵養を意図した書籍である。また、科研費のプロジェクト「アクティブ・ラーニングに資する論理的思考育成メソッドの有効性評価に関する研究」（基盤 C（代表：佐藤友美子教授）20K03080）で、論理的思考力の習得を支援するツールを、使い手である学生の参加も得て、教職学協働で作成すること、およびツール活用のためのメソッドを開発することを目論んだ。

成熟研の目標は、世間の取り組みと方向を同じくするところがある。文部科学省は 2020 年度からの学習指導要領において、「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」を重視している。そして、そのリーフレットでは「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、それぞれに思い描く幸せを実現してほしい」というメッセージが発され、自律性を高めることが標榜されている⁴⁾。論理的に思考することは、そのための手段の 1 つと考えられる。また、経済産業省は 2006 年から社会人基礎力を提唱しているが（伊吹・木原編、2017）、成熟研が目指す

ものは、これを構成する 3 つの能力の 1 つである「考え抜く力」にも類似している⁵⁾。

論理的思考（logical thinking）に関する書籍は、いわゆるビジネス書と呼ばれるジャンルを中心に、数多く出版されている。例えば大嶋（2014）によれば、論理的思考は、その人にしかできないクリエイティブな発想や仕事を生み出すためにある。クリティカルに考え（深い洞察による自分の考えを持ち）、それをわかりやすく伝えることで、いろいろな人を味方にして、たくさんの賛同を得るための思考技術である（大嶋、2014）。

論理的思考とされる頭の働きは、決して特別なものではない。ところが、その巧拙には個人差がある。大半の人は暗黙的に論理的思考を行っており、形式知としてこれを捉え、その使用方法や相応しい場面を意識している人はあまり多くないと予想される。無意識に使用している人においても、なんとなくそのような考え方をしている状態と、意図的な形式知化の経験を経て血肉化し、暗黙知となった状態では、巧拙は大きく異なるであろう。後に補論で示すが、KJ 法やロジックツリーなどのメソッドを知っていても、実際に日常的に用いている人はさほど多くない。数多くの関連書籍が刊行されているにもかかわらず、新たなものが著され続けているということは、多くの者がそれを十分には使いこなせていないことの証左であろう。

本プロジェクトでは、参加学生が、協力企業である VSN 社からの参加者とともに、「企業で働く若手従業員に、主体的に議論にコミットできる能力を付与すること」を目標とし、ロジカル・コミュニケーション・メソッド（logical communication method; 以下 LCM）を伝える小冊子を作成した⁶⁾。筆者ら成熟研は、その作成過程において、まず参加学生本人らが LCM のような考え方を意識、および形式知化し、それらに習熟するように導くことを目指した。そして、前述の文科省のリーフレットにあるように、各参加学生が、指示

を待ったり、与えられた仕事にとどまったりするのではなく、自分で仕事を発見したり、創出したりできるような態度と能力を涵養することも目標とした。

参加者

- ・学生研究員：経営学部3年生2名，2年生2名，
国際教養学部3年生1名⁷⁾
- ・株式会社 VSN：M氏，K氏，T氏
- ・筆者（神吉）

II. プロジェクトの概要

2-1. プロジェクトの進行方法と教員の関わり

筆者と参加学生間は主にメールを通じて、学生間、および学生とVSN社からの協力者間ではメールとLINEを併用して書類の送付や校正依頼、日程調整などのやり取りを行った。VSN社と学生による全体ミーティングは、当初は不定期開催であったが、「プロジェクト以外の予定を組みたい」という学生の意向を反映して、日程を事前に定めておくことになった(6/28以降⁸⁾)。調整の結果、21年度前期(春学期)は月曜日の2限(11:45AM~1:15PM)頃、後期は水曜日の1限(9:30AM~11:00AM)頃に、それぞれ概ね隔週で開催された。

参加学生は、必要に応じて、全体ミーティングのない週(同時刻)に学生のためのミーティングを開いた。学生同士の話し合いの結果を準備しておくことで、定期ミーティングを、VSN社からフィードバックをもらい、さらなる議論を展開する場とすることが目指された。学生が定期ミーティングの叩き台を用意するという形式は、プロジェクト期間を通じて概ね機能していた。

各回のミーティングの進行について、プロジェクトの序盤は、VSN社のM氏から事前にメールでアジェンダの提示があり、司会進行はK氏によってなされた。その後、筆者の希望が汲まれ、アジェンダの設定や司会(6/7~)、議事録(5/24~)はすべて学生が担当することになった⁹⁾。

本プロジェクトでは、前述のように成熟研設立時の趣意である自律性、および主体性の涵養を目指した。「主体性を教える」ことは背理であるため(岩田, 2012)、教員の立場にあり、そのメッセージが指示のニュアンスを帯びかねない筆者が具体的な指示をすることは極力控えた。とはいえ、プロジェクトの趣旨や望ましい態度・姿勢の一例を示すことは必要と考え、

顔合わせをした3月2日の夜に、学生にメールを送付した。そこでは、設定したゴールに向かうために、各自がそれぞれにゴールイメージを形成すること、各自がそこに向けて必要な(欠けている)情報を認識し、探索すること、それらを日々メモすること、そして個人プレイとなっても構わないから自身の力でプロジェクトを前に進めようとするを求めた。また、プロジェクトの初期には、メールなどで関連するインターネット記事のURLを伝え、ヒントとすることを促した¹⁰⁾。さらに、アーリー・プロトタイプングの概念を伝え(6/28)、遠慮することなく、適宜筆者を利用することを推奨した¹¹⁾。

全体ミーティングには筆者も参加した。そこでも、具体的なアイデアなどアウトプットに影響を及ぼす可能性のある発言は極力控えた。一方、大勢が易きに流れそうな時に決定を保留させたり、異論を挟むなど別の視点を提供したりするような形で介入した。また、主に学生の意見に対して、しつこいと思われるほどにその理由を問うこともあった。これらは、ある種の抵抗をすることで、学生に頭の中で考えていることをすべて吐き出させることを意図していた。

2-2. プロジェクトのゴールと目標

プロジェクトのゴールは、若手従業員にLCMを伝える小冊子の作成であった。後述するように、最終的なアウトプットの形態は学生メンバーを中心に決定された。そこに至るまでに、小冊子の内容と方向性について、事前に学生にいくつかの注文をした。まず、成熟研のロジコミ本に掲載されていない新たなメソッドの追加である。この点については、極力インターネットの情報に頼らず、書店や図書館に行き、書籍などから探してくることを求めた(5/24)。

次に、新たなメソッドの考案過程で、議論をする自分たちを俯瞰し、今の自分たちにどのようなメソッドや考え方が必要かを含めて考えることを目標として示した。これは、学生個々人の必要に関する内省や、同世代のニーズの調査を求めたものであった。学生の1人が「自分たちは学生の視点しかわからない。社会人の視点がほしい」と述べたことがあったが、このように「自分たちは何を知らないのか」「どのような情報が必要なのか」といったことについて思考し、それを得る活動ができるようになることも、本プロジェクトの目標の1つであった。

そして、プロジェクト自体がLCM実践の場であり、小冊子の作成過程で、学生ら自身が意識的にメ

ソッドを用いることも求めた。LCM の意識的使用の重要性は折に触れて繰り返し述べた。また、その都度の議論に対して、各自がどのようなメソッドを用いて臨んでいるのかを、意識づけを意図して何度も問いかけた¹²⁾。前述のように、LCM は誰しもが無意識に行う思考を、意識的、ないし意図的にできるようにするためのツールである。意識的使用の習慣化により、暗黙的に用いる際の水準が上がることを期待される¹³⁾。さらに、小冊子の読者に意識的に使用してもらう術を考える際に、自分たちが意識的に用いることができているかどうかを俯瞰して、それができない際の対策まで反映することができれば、アウトプットの質の向上が期待できる。

他にも、いわゆるユーザー目線に立ち「自分が社会人になったときにどういう資料がほしいのか」を考えるように繰り返し述べた。VSN 社からの参加者にも、実際社内で使用できる水準まで最終的なアウトプットの質を高めることを望んだ。この種のプロジェクトでは、参加者が自分たちのことを棚上げし、啓蒙的な立ち位置から議論することも少なくない。自身も LCM に未習熟な当事者であるという認識を持ち続けることができるかどうかは、プロジェクトの成否を左右する要因の 1 つと考えられた。なお、当事者意識をもってプロジェクトに臨むことは、自律性、および主体性につながるものと思われる。

加えて、参加学生は 1 名を除いて経営学部生であったため、プロジェクトをアクティブ・ラーニングの場として捉えた。経営組織論などの筆者の担当講義で伝える概念を議論や説明に用いることで、経営学の概念が現実に応用しうることを実感させることを目指した¹⁴⁾。

2-3. 議論の展開とプロジェクトの結果

アウトプットの形式について、プロジェクト前（自己紹介時、3/2）の自由な発言では、出版という大きな希望も語られた。とはいえ、実質初回（4/26）の話し合いの結果、ISBN を取得して書店に並べるような書籍ではなく、研究所のホームページなどを介して配布する小冊子とすることで落ち着いた。

主なターゲットは、企業の若手従業員（3 年目以内）と定められた（4/26）。若手には会議や打ち合わせなど（以下、会議）での発言は難しいのではないかと、という仮定の下、そのような場面で助けになるもの、もしくはロールプレイングなどの研修後の資料となるものを目指すこととした。会議で意見を述べる

際には、展開されている議論を整理して理解すること、および他の参加者に伝わるように論理的に発言内容をまとめることが必要となるが、それらを支援する思考の整理法をコンテンツとして掲載することとなった¹⁵⁾。アウトプットのゴールイメージは後に、「参加者の人数や関係性にかかわらず、議題の内容の難しさにより意見の出ない会議の場で、個々人が頭の中で使える LCM を考案したい」と言語化された（9/13）。

内容については、その後の議論で、使いやすさを重視することが確認されたり、ターゲットである若手従業員に配慮して、心理的ハードルを下げるのが合意されたりした（11/17）。そのため、読みやすさと詳しい使い方などのボリュームとの兼ね合い（バランス）が課題となった。

また、序盤のミーティングでは、ロジコミ本の内容の再掲について検討する時間が取られた（5/10）。参加学生からは、ロジコミ本が「よく出来ているので（大きくは変えずに構成も）流れに沿って」進めるという発言もあったが、この意見に対しては、筆者が 2-2 で示したゴールを再確認させ、可能な限り大きな変更を求めた。この段階で、ロジコミ本の内容のうち、メールの書き方やポスターの作り方など学生向けの部分は使用しないことになった。

企業における事例として、VSN 社の参加者（営業職）から、会議や打ち合わせのバリエーションには、会社から下りてくる案件の落とし込み（行動計画）、数字に関する進捗報告、勉強会などがあることが示された（5/10）。これを参考に議論し、対象とする会議の形式は、進捗報告などの確認を目的としたものではなく、PDCA の P（計画）に関わるようなアイデア生成の場となった。

掲載内容の検討は、会議で発言できない理由の考察から始まった（5/24）。これは、LCM の利用場面を限定することが意図されていた。企業における会議の経験のない学生は、「アイデアが思い浮かばない」「何をしてもよいかわからない」「自分の意見に自信がない」などの可能性を想像した¹⁶⁾。

これらの点を確認するため、若手社会人を対象とした質問票調査が計画された（5/24）。学生からは、会議の内容や種類などに関する設問と、個人の得手不得手や使用しているノウハウなどを問う設問の双方を、質問票に含みたいという希望が出された（6/7）。そして、5 月 24 日に列挙した発言できない理由を、KJ 法の“ような”形で分類したものを基に、質問の軸が議論された（6/7）。回答者は主に VSN 社の従業員とし、

M氏らによって社内のイントラネットを通じて配布・回収されることで合意した。また、VSN社の回答者以外に、筆者の個人的つながりを利用したスノーボールサンプリングも行った。最終アウトプットのターゲットは若手従業員であるが、サンプル数を確保するため、質問票の対象は就労者全体に広げた(6/28)。

また、質問票作成に先立って、「会議に出ている社会人にしかわからないことを抽出したい」という意図から、企業における会議のイメージのすり合わせと、就労者が抱く困りごとを知るための予備的な聞き取り調査を、VSN社からの参加者に対して行うことが学生から提案された(6/7)。聞き取り調査はK氏とM氏に対してそれぞれ3名ずつ(うち1名は双方に参加)で実施した¹⁷⁾。

以上のような準備を経て、学生のみでのミーティングで、1人の学生の案をベースに質問項目の叩き台が作成された(6/21)。続く全体ミーティングでは、主な調査対象企業(回答者)となるVSN社の意見も交えて選択肢の内容や細かな表現を検討した(6/28・7/12)。方向性が固まった後は、1人が主な窓口となり、学生と筆者の間で、文言などの確認・修正作業がメールベースで行われた¹⁸⁾。

質問票調査は8月18日から31日にかけて実施され、9月2日にM氏から学生に134名分の回答データが送付された。別途、筆者がSNSを通じて28名分の回答を得た。計162名分の回答の中に、すべてに同じ数字で回答するなど不適切なケースはみられず、すべてを分析に用いた。大まかなデータの整理と分析は9月13日までに行うこととなり、各自が分担してそれにあたった¹⁹⁾。学生らは分析から「全体(会議の際に共同)でのツール使用はほとんどない」「案外、発言への苦手意識がない」「話すこと自体に苦手意識がある」「年齢よりも会議の規模が要因である可能性」などを指摘した²⁰⁾。

これらの分析結果を踏まえて、各自3つのメソッド案を出す課題が設定され、9月13日に報告の時間が取られた。この日の提案内容は、Webサイトの検索によるものが多かった。これは、本学学生の全体的傾向と同じく、少数のサイトを浅く閲覧したものに過ぎないという印象であった。また、質問票調査の分析結果と提案内容の関係については、考察と説明が不十分といわざるを得ないものが少なくなかった。

課題への対応が不十分な者がいたことを受けて、2人の学生がミーティングを開いた(10/6)。これは、プロジェクトの停滞を感じていた者が、課題提出など

の取り組みがまじめであった者に声をかけて開催したものである。ここでは、各自が9月13日に提出したメソッド案に対するフィードバックを、VSN社と筆者に求めることが決められた²¹⁾。10月13日にはこれを受けて、課題へのコメントがVSN社からなされた。そして、「メソッド自体は知られているが使用されていない」「会議での発言が苦手な人の方が、使用率が低い」という質問票調査の結果を踏まえて、「新しいメソッドを考えるより、認知度は高いが使用度が低いものを普及させる」という方向性が打ち出された。

次いで、最終的に掲載するLCMの数に関する議論がなされた。その中で、吟味の際の手間(コスト)を節約するという発想から、レイアウトに従うという意見が学生から出た。これに対しては、VSN社のM氏から、掲載理由が先に来るべきで、個数はあくまで結果として決まるものであるという指摘がなされた(10/27)。また、普段活字に親しんでいない参加学生の実感から、掲載するLCMが多いと冊子を読んでもらえないという懸念も挙げた。一方で、安易に掲載内容を減らすことは、LCMの定着という目標に合わないという視点も考えられた。この点については、分量の多寡は各人の主観によるものであり、量を実際にみて基準を共有しておかないと議論が成立しないという可能性を筆者が伝えた。そこから、LCMの掲載数については、KJ法など参加学生にもなじみのあるメソッドを例としたプロトタイプを作った後に、改めて議論することが確認された(11/17)。

各LCMのみせ方については、「ベン図とは～」のように名称を前に出すのではなく、各メソッドの用途を強調するために「こんな時には～」といった形で、会議における困りごとのケースを例示することがT氏から提案された。これを受けて、質問票調査の結果を参照し、どのような困りごとをラベルとすることを議論した(10/27)。そして、「会議で自分の意見を言うことができない」という問題に対して、「アイデアを生み出すメソッド」と「アイデアを整理するメソッド」の2つの軸が改めて設定された。次に、前者について「新しいアイデアを生み出したい」「既存のアイデアにプラスαほしい」「おもしろいアイデアがほしい」の3点が、後者については「たくさんあるアイデアを整理する」「順序だてて整理する」の2点がそれぞれラベルとして抽出され、これらが目次の項目となった。議事録や司会進行のノウハウなどは、メソッドとは別にコラムとして掲載することが提案された。コラムには、心理的ハードルを下げるために親しみや

すさを出すことも意図された。

掲載内容の方向性を確定した後、レイアウトの検討がなされた。原案は、11月8日から17日の間に2人の学生によって手描きで作成された。そして、全体ミーティングで着想に至った経緯や意図、意味を2人に問うた。ここでも使いやすさと親しみやすさを重視することを確認し、それをデザインで表現することが目指された。そして、2人のアイデアを折衷、統合し、大事なものを中心に置く基礎的なデザインを確定した(11/17)。

レイアウトに関しては、冊子全体での統一感も重視された。この点について、学生は「統一=完全に同一のフォーマット」と認識していた。ルールに縛られ、発想が限定される気配が議論の中で感じられた。そのため、統一感を出すために最低限のフォーマットを意識しつつ、掲載する LCM の数や文字量に変化をつけることでおもしろみが出るという可能性を筆者から示した。また、統一・変化のさじ加減は、フォーマット以外に色遣いや文体などでも工夫しうることも伝えた。この他に、掲載メソッド数の決定は、枠・レイアウトありきではなく、ネタありきとすること、レイアウトのスペースはコラムの文字数で柔軟に対応できること²²⁾、そしてコラムは500文字程度のラフを書けば、方向性の確認と添削を行う旨をそれぞれ伝えた(11/17)。学生らは12月1日に学生ミーティングを開き、レイアウトを確定した。

掲載メソッド選択時のポイントは、VSN社からの参加者にその効果を腹落ちしてもらうことであった。そこで、11月24日のミーティングでは、VSN社の会議でいくつかのメソッドを実際に使用してみることが依頼され、12月8日の全体ミーティングでその感想が報告された²³⁾。M氏からは、用いるべき状況がわからないメソッドがあることが述べられ、ビジネスにカスタマイズされた、活用できる場面の例が要望された。具体的には、Yチャートによって、項目を洗い出して可視化することはできたが、その後につながる点(プラスaの何かが必要である点)が指摘された。キャンディチャートは、顧客への提案シートのすり合わせに活用できたが、クラゲチャートと似ており、差異化が難しいという意見もあった。ロジックツリーとベン図は、使い勝手の良さが報告された²⁴⁾。また、学生からのすべてのメソッドを試すことができたか、という問いに対して、すべては使えなかった旨が示された。

T氏からは、メソッドの使用感として、普段に自身

が自然に行っている思考と似ているという感想が述べられた。そして、オズボーンのチェックリストの着眼点はありがたいが、具体的にアイデアを捻り出すのは難しいことが報告された。さらに、全体としては、2週間の試用で判断することの難しさが指摘され、それを招いたスケジュール管理の問題が明らかになった。

12月22日のミーティングでも、使用感に関する議論が続けてなされ、改めて活用すべきシーンがわからない旨、および問題や悩みがあるとしても、どのメソッドを使えばそれらが解決するのかがわからない旨が述べられた。活用できるというイメージを喚起する仕組みの必要性は明らかであった²⁵⁾。これに対して学生からは、逆に活用例の具体例がほしいという意見が出された。また、参加学生から不要と思われるメソッドがあるかどうか問われ、いくつかのメソッドが非掲載となった。なお、この時期に参加学生のうち2人が連絡なく欠席するようになった。一方で、人数が減ったことによるのか、ここまで発言が目立たなかった者が、質問したり意見を述べたりするようになった。

年末にも学生による作業は進められた。12月27日には、各学生が3メソッドずつ使用方法とメリットを文章化するという課題に対して、筆者が添削するZoomミーティングがもたれた。30日には文章の修正案に関するメールのやり取りがあった。同日、コラムのテーマを「議事録について」「メソッドとメソッドを掛け合わせる方法もある」ことを伝えるもの」「日頃、誰でも無意識にメソッドを使っている」ことを伝えるもの」の3つとしたことも報告された²⁶⁾。

翌22年1月5日と1月19日の全体ミーティングでも、メソッドの取捨選択と具体例に関する議論が行われた。若手従業員をターゲットとすることを改めて確認しながら、掲載するメソッドを徐々に確定した。KJ法やマインドマップなど、問題なく採用されたものもあれば、VSN社の参加者から、使い方や用途を問われるものもあった。後者については、会議における状況に落とし込めていないことや、自分たちが使いこなせていないことが再度問題として指摘された。一方、ここまで議論に参加してきたVSN社のT氏にも使い方がわからない、もしくは使いこなせないメソッドだからこそ、その課題を克服して載せるべきであるという意見も出た。学生は、使用場面の捻出後に改めて使用してもらうことを、VSN社に依頼した。

最終的に、5つのラベルについて合計14のメソッドが採用された。その後のミーティングは、主に各自

の進捗を報告し、内容を確認するものとなった。そして、VSN社を交えた全体ミーティングは、2022年2月21日が最終回となった。この日にもM氏から、作成の経緯を共有している者にしかわからない内容があることが指摘され、初見の人にも伝わる工夫が求められた。

以後は、全員宛のメールと添付ファイルによって校正作業が進められた。筆者からはVSN社に対して、学生たちを会社の部下・後輩だと思って最後までコメント（ダメ出し）すること、およびクオリティに関して実際のクライアントの存在を想定することを改めて依頼した。すべてを含んだ第1稿の内容についてVNS社の確認を待つ間、はじめに、おわりに、および2つのコラムの文章について、学生3名と筆者の間でそれぞれ2・3度、添付ファイルを用いたやり取りを行った（22年2月22日～3月1日）。そして、数か月の休眠を経て、新たな年度となった22年度5月半ばから7月半ばにかけて、筆者の講義を受講していた2人の参加者と最後の調整を行った。VSN社の確認を経た最終的なアウトプットはPDF化し、印刷して使用してもらえるようにリンクとQRコードを成熟研のホームページに掲載した（22年10/27）²⁷⁾。

Ⅲ. プロジェクトの振り返りと課題

第1節でも述べたように、筆者ら成熟研はLCMに関する小冊子の作成過程において、参加学生らがLCMのような考え方を意識し、形式知化した上で、それらに習熟することを目指していた。また、参加学生が、指示を待ったり与えられた仕事にとどまったりするのではなく、自分で仕事を発見したり、創出したりできるような態度と能力を涵養することも目標としていた。

これらの目標は、プロジェクトの中で部分的、ないし一時的には達成されたが、全体としては道半ばであった。このことは、当然のことながら学生たちだけでなく、著者らの課題でもある。以下では、観察、および考察された問題点を示し、その対策の可能性について検討する。

3-1. ロジカル・コミュニケーション・メソッドの意識的使用

プロジェクト全体を通じた課題として、まず学生自身がLCMの使用を意識し、議論の中で意図的に用いることが望まれたが、これらは十分になされなかつ

た。己の理解が曖昧なものについて他者に説明し、使用（行動）を促すことは難しい。自らLCMを使用することは、各メソッドの特徴や用途に関する理解を深めることにつながる。LCMの意図的な使用は、最終的なアウトプットの質を高めるためにも必要な工程に他ならなかった。

この点について、前述のように、議論の中で「今、どんなメソッドを意識して意見をまとめていますか?」「そのメソッドの具体名はいえますか?」などの問いかけを行ったが、それらが必要であったことは、筆者からみて、参加学生自身によるLCMの使用が不十分であったことの証左である。また、各自のアイデアをベン図で分類する課題など、LCMを使用する機会も意図的に提供したが（10/13²⁸⁾、11/8）、それらは定着しなかった。さらに、LCMを大学の他の講義やアルバイトその他の様々な場面で用いることも求めたが、それも十分に為されたとはいえない²⁹⁾。

また、11月17日の議論では、参加学生からラフ案に用いたメソッドを適当に選んだ旨の発言があった。この「適当」の裏側で機能しているロジックを言語化し、それらを抽出することこそが、LCMの血肉化への第一歩に他ならない。この点が「適当」のまま放置されてしまったことも、LCMの意識的使用が不徹底であったことを示している。

なお、唯一KJ法は、比較的頻繁に用いられていた。例えば、ある学生はメソッドが用いられる状況について出したアイデアをKJ法で分類し、困りごとの表現でラベリングし、概念間の関係を検討していた（11/3）。ここまで述べてきた課題は、KJ法の習熟を別のメソッドに展開させられなかったといえ換えることもできよう。

3-2. 経験のアウトプットへの落とし込み

プロジェクトを通して、参加学生はVSN社の協力者も含めた全体ミーティングに参加しているが、そこでの経験をメソッドに還元することは、十分にはなされたとはいえない。顔合わせ時から上級生が主に発言し、中でも1人の発言量とイニシアティブは突出していたが、その分発言できない者もいた。これはまさに、会議において発言に差がある状況であり、彼らが提案しようとしていた「会議で発言できない際のメソッド」が活用されるべき場面に他ならない。この状況を俯瞰し、「自分たちに今何が必要か」と自問すること、換言すれば、常に「なぜ、自分が今発言できないのか」を考え続ける視点が求められたが、そのよう

な内省はなされなかった。

例えば、話せないという状況が議論のポイントがわからないことによって生じていたのであれば、タスクや論点の優先順位を可視化し、それを共有するメソッドの考案が望まれた。この点に関しては VSN 社の T 氏から、会議迷子を減らすための議論の交通整理という話題が提供されたことがあった (10/13)。また、学生から VSN 社の参加者に対してミーティングが上手くないか理由を問うた際には、認識を共有できず、話題がループすること (深堀されず、堂々巡りになること) が問題点として示されている (10/27)。この問題は本プロジェクトでも生じており、22 年 2 月 21 日の最終段階においても、前提を確認するための議論が交わされた。これらを踏まえると、例えば議事録の活用方法など、会議の前提となる情報の共有を漏れなく行うためのメソッドが思考されてもよかったかもしれない。

また、プロジェクトを通して、ミーティング中にアイデアが出ないことがしばしばあり、アイデア列挙に関するメソッドの必要性は明らかであった。「アイデアを挙げる」といっても、ゼロから想起するのと、何か参照するものがある場合では異なる。また、1 人でアイデアを出す方法、複数人でアイデアを出す方法など状況ごとに分類することも考えられる。ところが、この点に関する検討はなされず、小冊子にも含まれていない。

総じて、参加学生にとって、自分たちの認識や状況を俯瞰すること (メタ認知) は難しい課題であったようである。

3-3. マネジメントと意思決定

前述のように、本プロジェクトは成熟研の目標である、自律性、および主体性を持った学生の育成の一環として実施したものであるため、進行管理は参加学生に委ねた。教員である筆者は具体的な指示を極力控え、協力企業の VSN 社からの参加者には、基本的にアドバイザーとして振舞ってもらった。学生もある程度その趣旨を解し、自分たちで進めていくという姿勢で行動していたものの、明確な意思決定 (“決め切る”) という点では課題が残った。

例えば、掲載内容の決定に関して、10 月 27 日に T 氏から、ターゲットを決めてメソッドに落とすことの必要性が述べられた。また、22 年 1 月 5 日のミーティングでは、M 氏のように管理職で会議を仕切る立場の人には LCM が必要であるが、T 氏のように

ミーティングでは情報を受け取るだけの立場であれば、メソッドは不要ではないかという指摘があった。これらは、プロジェクトの初期段階で設定されたはずの、若手従業員というターゲット像の共有が徹底されていないことを再確認させるものであった。決定事項が次の議論の前提とされず、議論が何度も前に戻るという現象は、この他にも何度か観察された。

決定の曖昧さについては、学生間の合意内容が VSN 社や筆者に伝達されていないケースもあった。22 年 2 月 21 日の全体ミーティングでは、学生から最終アウトプットのコンテンツとレイアウトの背景にある意図が説明されたが、この際にも趣旨について学生と M 氏の間で改めて 20 分程度の議論が交わされた。その中で、メソッド選択の基準となる使用シーン (ラベル) 案が、未承認の事項を土台として検討されていたことが明らかになった (学生からその旨を認める発言があった³⁰⁾)。

また、シーンごとにメソッドを選択することも学生間、および全体で合意されていた。ところが、シーン間の優先順位は学生により様々で、すべてのシーンを同等に扱う (同じページ数掲載する) と考えていた者もあれば、シーン間に優先順位を仮定している者もいた。この点は、途中からプロジェクトに参加した T 氏からも質問された (9/13)。

そして、未決の問題が放置され続けるという現象も発生していた。例えば、高認知度・低使用度のメソッドを掲載するという方向性は示されたが (10/13)、具体的な形に関する議論など、方向性を実現するための行動がその後検討される様子は窺えなかった。ただ掲載するだけでは「知っている」という反応で終わる可能性が大きく、使用という行動を促すための仕掛けが必要とされていたが、小冊子には反映されていない。また、「人数が増えるとツールが使われなくなる」という質問票調査の結果と、ツールの多くは共有するのが難しいという点から、複数人で使用できる、視覚化を意識したメソッドを提案すべきという意見が挙がったものの (10/13)、具体化されずに消えてしまった。既存の手法の紹介だけでなく、組み合わせで、新たな手法を創り出すという観点も提案されたが (9/13)、これも賛同の姿勢がみられただけで、十分な検討に踏み込まれることはなかった。

他にも、そもそも 4 月 26 日の初回の議論は、ほぼゴールイメージの共有に時間が割かれた。この時点で、例えばゴールイメージなど、抽象的内容を共有するためのメソッドの検討が VSN 社から求められたが、

学生の中では優先順位の高い課題として認識されていなかった。この点は、後に12月8日のミーティングで、M氏から改めて別の形で要望されている。この際の学生メンバーの反応は、この話題があたかも初めて組上にあがったかのようなものであった³¹⁾。

このような確認すべき内容の不徹底や、未決の問題の放置などに、彼らが気づいていたのかどうか、気づいていたとしてもどの程度重要性を認識していたのかはわからない。プロジェクト全体を通して議事録は毎回作成されていたものの、議論すべき内容が、その都度レジュメなど全員が視認可能な形で整理され、明示されることはなかった。未決の問題は、時折話題に上るものの、具体的な解決法や担当者が決定されることはなかった。

これらは、プロジェクト進行のマネジメントに関する認識の不明確さが一因と考えられる。単発でリーダーシップを発揮し、議論をリードする学生は複数いた。ところが、その者らが全体像や未決の問題までを意識できていたわけではない。この点に関して、6月28日に司会を担当した学生から、ミーティング冒頭にアジェンダを提示する工夫がなされた。ミーティングを時間内に収めるための工夫であったが、Zoomのチャットにも記載することで、参加者全体での共有が図られていた。この単発の工夫が、プロジェクト全体の進行管理につながっていくには、どのような仕掛けが必要だったのだろうか。

本プロジェクトの参加学生は1人を除いて経営学部生であった。アクティブ・ラーニングの観点からいえば、意思決定に関する組織構造の設計の議論や、そもそも意思決定していくことの重要性を想起するなど、経営学の知見を参照することが望ましかった。また、プロジェクト・マネジメントの議論も参考になったはずである。なお、筆者はミーティング時の意思決定に関わらないことを明言していたが、全体ミーティングに参加し、原稿やレイアウトの出来については最終判断を行った。これらのことが学生に「最後は先生が」という考えを抱かせ、自分事化を妨げた可能性は大いにある。

3-4. タイムマネジメント

プロジェクト進行のマネジメントに関しては、時間管理の難しさもあった。プロジェクト全体の期日は、筆者とVSN社の間では学年度末(22年3月31日)をめどとし、適宜柔軟に対応することで合意していたが、学生にはあえて明示せず、何らかのアウトプット

を完成させることだけを求めていた。これは、完成までのスケジュール管理も含めて、学生が筆者らの指示を待たずに考えることを期待していたことによる。

この点については、6月21日の学生ミーティングで、参加学生の1人からゴールの期日を確定したいという希望が話題に上っている。この学生は当時3年生で、ある資格の取得を目指しつつ、就職活動として企業のインターンシップにも参加していた。さらに、学内の他のプロジェクトにも関わっていた。この者はこのアジェンダを提案した時点で、それまでの議論に「ぐだぐだしている印象」を抱いていた。そこで、期日を定め、そこから逆算してスケジュールを設定することを希望した。この時点ではゴールを10月とし、7月中旬に質問票調査を実施、8月に冊子作成、そして9月にそれをリバイズしていくことが目指された。この計画は翌週に全体に報告され、実現に向けてミーティングを定期的で開催することがVSN社と筆者に提案された。このゴール設定とそれに向けた提案がなされたことは、学生の主体的行動として評価しうる。

ところが、この計画は月単位の大まかな希望にとどまり、例えば、週単位の行動計画や各人の役割分担が細かく設定されるものではなかった。また、計画に関する議論が継続されたり、予定変更が話題になったりすることもなかった。実際のスケジュール管理は難しく、設定したゴールは、なし崩し的に延期された³²⁾。設定した期日までに完成できなかったことは、参加学生(特に提案者)のモチベーションに明らかな形で影響した。

ゴールがずると先延ばしになったこと、および学生の一部が早い完成を目指していたことの影響は、最終アウトプットの質にも及んだ。完成を急ぐ気持ちは、既存のロジコミ本に掲載されたものや、簡単なインターネット検索でみつけられるメソッドを用いて、労力をかけずに作成することへの拘泥につながっているように感じられた。前述のように、筆者は新たなメソッドを知るために、書店や大学の図書室に足を運ぶことを求めたが(5/24)、それが十分になされたとはいえない。一度形成した思考の枠組みを壊すこと、幅を広げることができなかったことには、スケジュールの頓挫がモチベーションを損ねたことも影響していたと考えられる。

モチベーションに関しては、9月13日や10月13日など、プロジェクトとして検討することが多く、複雑になっていた時期に、一部の学生から課題が提出されなかったことも象徴的であった。他にも、9月13

日に課されたデータ分析へのコミットメントには個人差がみられた。ある者は円グラフによって結果を示した上で、気になる回答内容について個別のデータを確認したり、回答による群分けをして追加分析をしたりするなど、仔細な検討を行った。一方、グラフを作成できないなど Excel のスキルが不足している者や資料の準備が間に合わない者、そもそも自ら分析せず他のメンバーから結果をもらって解釈のみ行った者などもあった。この点については、質問票調査の主旨や目的の理解に学生メンバー間で差があった、ないし最終的なアウトプットとの関連に関する考察が不十分なまま進められたなどの可能性が考えられる。

Amabile and Kramer (2011) は、仕事の進捗がモチベーション、認識、および感情からなるインナーワークライフを促進することを明らかにしている。モチベーション低下が行動に表れ始めたのは、プロジェクトの進捗がみられなかった時期に重なっており、Amabile らの議論に相当するものといえよう。

IV. おわりに

以上が、VSN 社との産学連携による論理的思考メソッド作成プロジェクトの記録である。プロジェクトの後に、VSN 社の参加者から次のような感想と労いの言葉が届いた。

「学生さんも就職活動など忙しい中ですが、両立頑張ってくださいと思います。また、自分自身もプロジェクトの進め方やアウトプットの見え方など、非常に気づきや課題などが見つかっており、今後の参考にさせて頂いております」(M 氏)

「今回の産学連携を通しまして、自身が日々当たり前に行っている事柄も、学生さん向かいには細やかに伝えるなど目線を合わせたコミュニケーションが大切だと日々気づかされております。こういった機会は、今のタイミングで経験できて良かったと思っております」(T 氏)

参加学生にとって、本プロジェクトは単位にならない正課外活動であり、他の活動もある中で継続的に取り組み、貢献したことは十分に評価できる。第Ⅲ節で述べたように、本プロジェクトには様々な課題が残った。しかし、それらは学生に帰するものではなく、我々こそが当事者として試行錯誤すべき課題である。どうすれば、主体性を涵養する場を提供することがで

きるのか。教員をはじめ、大学側の関わりはどのような形や仕方が望ましいのか。メタ認知は、我々にも求められている。

注

- 1) 産学連携で行われる学習形態としては、project-based learning (PBL) がよく知られている。PBL は民間企業などが実際に抱える現在進行形の課題が学習者に与えられ、学習者が関連知識の調査、対話、内省を通じて実際の課題解決に当たる学習形態である(伊吹・木原編, 2017)。本プロジェクトは、参加学生の活動内容は PBL に相当するが、課題が企業から与えられたものではないという点において PBL とは異なる。
- 2) VSN 社の協力を得ることができたのは、株式会社志結社の関口隆氏からオファーを得たことによる。同氏は、大企業での人材・組織開発の経験を活かして産学連携を推進する活動を行っている。学生に良質の緊張感のある場を提供することを模索していたため、企業からの参加者の存在はまさに渡りに船であった。
- 3) 「【成熟社会研究所】出版のお知らせ『一人で思う、二人で語る、みんなで考える－実践！ロジコミ・メソッド』」『追手門学院大学成熟社会研究所』2020年8月28日掲載 (https://www.otemon.ac.jp/whatsnew/news/_14013.html)
- 4) 「自己決定を繰り返すことで人は自律していく 横浜創英中学・高等学校長 工藤勇一氏が実践する、自律型人材を育てる「三つの言葉」とは」『日本の人事部』2021年7月13日掲載 (<https://jinjibu.jp/article/detail/keyperson/2582/>)
- 5) 「考え抜く力(シンキング)」は課題発見力、計画力、創造力の3つの能力要素から成る。
- 6) PDF ファイル: <https://www.otemon.ac.jp/library/research/lab/seijuku/PDF/rojikomi.pdf>
- 7) メンバーは公募せず、授業などへの取り組み姿勢を参考に選抜した。筆者が担当講義(1年生対象の必修科目)で声をかけた2名と成熟研の職員が担当する別プロジェクトで勧誘した3名から成る。
- 8) 以後、丸括弧内の同様の表記は日付を意味している。年表記のないものは2021年。
- 9) Zoom の利用については、無料登録者である学生には利用時間に制限があるため、ミーティングの URL の設定は VSN 社によってなされた。議事録などの共有には Dropbox を用いた。
- 10) 例えば、4月26日のミーティングの後には、「よい会議は、理想と現実のギャップを埋めていく」(DIAMOND online, 20年7月4日, <https://diamond.jp/articles/-/241014>)を示した。感想を求めるなどのフィードバックの機会を提供しなかったこともあり、これらの情報提供が機能したかどうかは不明である。
- 11) 学生同士で課外のミーティングの時間が取れるように、学期初めの時間割作成時に空きコマを合わせることは具体的に指示した。結果、前期は月曜日の2限が確保された。
- 12) 例えば、「このプロジェクトを進めるために、考えなければならないこと」を考える際に、発想法に関する何ら

- かのメソッドを活用することを希望した。初回（4/26）の後には、「本日の議論を振り返り、本日の進行の中で LCM を使える場面がなかったかどうかを検討する。次回までの授業などで LCM を意識的に用いてみる」という課題をメールで課した。
- 13) この点から、論理的思考法は、研修などのオフ・ザ・ジョブ・トレーニング（Off-JT）でもテーマとして取り上げられている。
 - 14) 例えば、22年2月21日にVNS社の方々がZoomから退出した後、参加学生2人に、以後の分担を確認するよう伝える際、分化と統合の概念を用いた（Lawrence & Lorsch, 1967）。また、VSN社の方々に対して、また学生同士でも先輩に対して、「わからない」と言える環境の整備については、心理的安全性の概念を用いて説明した（Edmondson, 1999）。
 - 15) 会議の際の発言については学術的研究も行われている。例えば、Howard-Grenville（2005）は、定例会議で建設的な議論が行われないのはなぜかという問題意識の下で分析を行っている。ブレインストーミングに関する研究では、メンバーが一堂に会して議論すると、1人の時より成果が低くなることが示されている（Diehl & Stroebe, 1987）。これは、各メンバーが他者の発言を聞くことに集中してアイデアを考えられなかったり、発言に積極的な人に任せて手を抜いてしまったりすることによる（Brown & Paulus, 1996）。また、他メンバーからの批判を気にしてアイデアや意見を出すことを控えることも確認されている（Bandow, 2001）。
 - 16) この日、アンケート項目をブレインストーミング的に列挙した際には、演繹的思考と帰納的思考を両にらみにすることを提案した。
 - 17) VSN社の会議やミーティングの詳細は、次のように説明された（6/28）。まず、VSN社の会議には、入社2年目から5年目の者が出席することはほとんどない。一方、ミーティングは、入社年次や役職にかかわらずアジェンダに関わる従業員が参加する場であり、部署内のメンバー7・8人で定期的に行われる。趣旨は部署として取り組む内容やその目的などの共有であり、何かをゼロから1にするような議論の場ではない。管理職であるM氏はミーティングの方が軽いものの会議との間に違いはないという認識であった。ところが非管理職のK氏は、会議を役職者によって何らかの意思決定がなされる場と考えていた。またM氏から、他の参加者の顔ぶれやキャラクターによって、ミーティングで発言できるかどうか左右されているという実感も述べられた。さらに、ミーティングの司会は時折議題の起案者が担当するが、基本的には固定されていること、議事録は当番制であること、そして時にはサクラの質問役が準備されるケースがあることも示された。なお、聞き取り調査の実施当時はCOVID-19の影響下であり、VSN社の会議やミーティングはオンラインで行われることが多かった。
 - 18) 7月16日から29日の間に、6往復のやり取りと1度のZoomミーティング（7/26）が行われた。
 - 19) その後、さらなる分析を行い、簡易なレポートとして整理した（補論）。
 - 20) 意図通りには質問項目を設定できておらず、LCMが「なぜ使われていないか」に関するデータは、この調査から得ることはできなかった。
 - 21) この学生からのフィードバックを求める行動（feedback seeking）は、プロアクティブ行動の1つとされる（Parker & Bindl, 2017）。
 - 22) レイアウトに関しては、adobe社のソフトウェア（illustrator/Photoshop）への挑戦を推奨した。本学（安威キャンパス）には、これらがインストールされた貸出PCが数台あり、学生も利用に意欲をみせた。使用経験のない面々に対して、成熟研の職員・中川氏から指導が得られることにもなっていた。ところが、COVID-19対応で貸し出しがスムーズに行えなかったこと、また借りたPCが上手く作動しなかったことにより、自宅でも扱えるPowerPointで作成することになった。
 - 23) 加えて、議事録コラムを担当した学生から、議事録作成時に気をつけていることについて質問があった。これに対して、T氏からは短く整理すること、議論の経緯・流れの記述に努めること、事実と考えを切り分けること、M氏からは、重要なものは言葉をそのまま載せることがあること、社内で共有する場合は誰が見てもわかるようにすることに配慮しているという回答がなされた。
 - 24) この際、VSN社の会議において、理解度のばらつきや、方向性や考えのレベル感のズレなどが生じ、認識が合わずに進んでしまうことがあるという課題が挙げられた。そして、この課題に対して、方向性などを可視化するメソッドがほしいという要望が出された。ところが、この要望に応える提案は最終的にはなされなかった。
 - 25) 具体的には、ベン図やハチの巣ノートについて、テーマが与えられた状況では使いやすいが、初期設定からの思考は難しいという意見がT氏から述べられた。ベン図は会議を仕切る人には向いているなど、立場による違いも後日指摘されている（22/1/5）。また、「おもしろいアイデアがほしい」というラベルは企画職などでない限り、使う機会が少ないかもしれないという懸念も示された。
 - 26) 3つ目のテーマは、最終的にはコラムではなく「はじめに」と「おわりに」と題した挨拶文の中で述べられた。
 - 27) 同脚注6。
 - 28) 10月13日には、9月13日に提出されたメソッド案を分類し、「アイデア出し」「整理」「その他」の3軸を得た。その他については、新たに各自が軸の名を考えるという課題になった。ところが、その後この3軸に関する進展はなく、冊子にも反映されていない。
 - 29) 中野（2001）はワークショップの課題として、「せっかくだしい体験をしていろいろを感じたり新たな決意をしても、日常に帰ったらすっかりもとの生活に舞い戻ってしまい、ワークショップと日常が繋がらないこと（p.84）」を挙げているが、これは同様の現象といえよう。
 - 30) 情報伝達が不十分であったことは問題であるが、学生が議論の中で自説の限界に気づき、問題点に言及できたことは、1つの到達点といえる。
 - 31) 最終的な成果物のイメージとそのための考えるべきポイントの共有については、M氏は10月27日にもその重

要性を説いている。

- 32) タイムスケジュールに関する具体的な出来事として、10月13日に「前回（6日）の学生ミーティングの段階で、学生案を1つにまとめておきたかった」が、参加者が少なく共有のみになった旨が報告されたことが挙げられる。他の者も「ずるずると遅れている」ことを口にするなど、タイムマネジメントの難しさは認識されていた。このような状況を俯瞰し、長期のプロジェクトを管理するメソッド案が検討されてもよかった。

【参考文献】

- Amabile, T., & Kramer, S. (2011). *The progress principle: Using small wins to ignite joy, engagement, and creativity at work*. Harvard Business Review Press. (中竹竜二監訳, 樋口武志訳『マネジャーの最も大切な仕事』英知出版, 2017年).
- Bandow, D. (2001). Time to create sound teamwork. *Journal for Quality & Participation*, 24(2), 41-47.
- Brown, V., & Paulus, P. B. (1996). A simple dynamic model of social factors in group brainstorming. *Small Group Research*, 27(1), 91-114.
- Diehl, M., & Stroebe, W. (1987). Productivity loss in brainstorming groups: Toward the solution of a riddle. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53(3), 497-509.
- Edmondson, A. (1999). Psychological safety and learning behavior in work teams. *Administrative Science Quarterly*, 44(2), 350-383.
- Howard-Grenville, J. A. (2005). The persistence of flexible organizational routines: The role of agency and organizational context. *Organization Science*, 16(6), 618-636.
- Lawrence, P. R., & Lorsch, J. W. (1967). *Organization and environment: Managing differentiation and integration*. Harvard University Press. (吉田博訳『組織の条件適応理論』産業能率短期大学出版部, 1977年).
- Parker, S. K., & Bindl, U. K. (2017). *Proactivity at work*. Routledge.
- 伊吹勇亮・木原麻子編, 後藤文彦監修 (2017). 『課題解決型授業への挑戦 プロジェクト・ベースト・ラーニングの実践と評価』ナカニシヤ出版.
- 岩田健太郎 (2012). 『主体性は教えられるか』筑摩書房.
- 追手門学院大学成熟社会研究所編 (2020). 『一人で思う, 二人で語る, みんなで考える - 実践! ロジコミ・メソッド』岩波ジュニア新書.
- 大嶋祥誉 (2014). 『マッキンゼー流 入社1年目のロジカルシンキングの教科書』SB Creative.
- 中野民夫 (2001). 『ワークショップ - 新しい学びと創造の場 -』岩波新書.

補論：ミーティングでの発言に関する調査—質問票調査のデータ分析

1. はじめに

本論で記したプロジェクトを進める中で、現状把握が必要であるという共通認識を抱いた学生メンバーは、8月18日から31日の期間に、質問票調査を実施した。この補論はその質問票調査で得られたデータに関する統計分析の記録である。分析にはSPSSを用いた。

2. 回答者のプロフィール

回答者は162名であった。そのうち、VSN社の従業員からの回答が134名、SNS等から得た回答が28名である。回答者の年齢の分布は表1のようになった。今回の調査では、若手従業員の意識について検討することを意図していたが、その意図に沿ったデータは十分には得られなかった。以下の分析では、34歳以下を若手従業員とみなすこととする。表2は回答者の最終学歴を示している。表には示していないが、転職の経験は、転職したことがない者が52名、経験者が110名で、うち1回が77名であった。経験回数の最多は5回で4名であった。なお、今回の調査では、性別に関する回答は求めている。

ミーティングにおける立場や役割について、回答時までの1年間で1番多く経験してきたものを問うた(表3)。34歳以下(若手)では、「役割なし」が

最も多く24名で35.82%を占め、次いで「事前の資料作成」が多い(15名/22.39%)。35歳以上では「司会」を務めている者と「役割なし」がそれぞれ29名(30.53%)であった。

これも表には示していないが、回答者が日頃参加することが多いミーティングの規模は³⁴⁾、回答者自身も含めて「5～9人」が最も多かった(110名)。次いで、「4人以下」のミーティングが最も多い者が36名、「10～19人」規模が15名であった。「20人以上」のミーティングへの参加が最も多いと答えた者が1名いた。

そして、発言することが難しくなるミーティングの規模は、34歳以下、35歳以上ともに「10～19人」であり、「5～9人」がそれに次いだ(表4)。特に34歳以下では、「5～9人」が32.84%であり、この規模で発言できるかどうか1つの境界であるといえよう。また、35歳を超えると、ミーティングの規模にかかわらず発言は特に難しくないと回答も23.16%を占めている。以下の分析では、4人以下から10～19人で発言が難しくなると回答した者を「発言苦手群」、それ以外を「発言得意群」とし、適宜分析に用いる。

参考として、別途尋ねたミーティングに対する苦手意識と発言が難しくなるミーティングの規模についてのクロス表を示す(表5)。苦手意識の強さと発言が難しくなるミーティングの規模は、概ね負の相関関係

表1 回答者の年齢の分布³³⁾

	度数	%
～24歳	3	1.9
25～29歳	7	4.3
30～34歳	57	35.2
35～44歳	38	23.5
45～54歳	40	24.7
55～64歳	13	8
65歳以上	3	1.9
合計	161	

表2 回答者の最終学歴

	度数	%
中学・高校卒	9	5.5
専門学校卒	19	11.7
短期大学卒	3	1.9
4年生大学卒(文系)	85	52.5
4年生大学卒(理系)	38	23.5
大学院修了(修士・博士)	8	4.9
合計	162	

表3 ミーティングにおける主な立場・役割

	司会	議事録	質問役	事前の資料作成	役割なし	合計
34歳以下	12	10	6	15	24	67
35歳以上	29	13	12	12	29	95
合計	41	23	18	27	53	162

$$\chi^2 = 5.57 (p > .10)$$

表4 発言が難しくなるミーティングの規模

	34歳以下	35歳以上	全体
	度数(%)	度数(%)	度数(%)
4人以下	4(5.97)	9(9.47)	13(8.02)
5～9人	22(32.84)	15(15.79)	37(22.84)
10～19人	33(49.25)	38(40.00)	71(43.83)
20人以上	3(4.48)	11(11.58)	14(8.64)
人数問わず発言可	5(7.46)	22(23.16)	27(16.67)
合計	67(100)	95(100)	162(100)

表5 発言が難しくなるミーティングの規模と苦手意識のクロス表

ミーティングが難しくなる規模	ミーティングに対する苦手意識				合計
	まったく苦手意識なし	あまり苦手意識はない	どちらでもない	苦手意識はある 苦手意識が非常にある	
4人以下	1	4	2	5	13
5～9人	2	6	4	22	37
10～19人	4	25	21	18	71
20人以上	1	6	2	4	14
人数問わず発言可	12	8	5	2	27
合計	20	49	34	51	162

にある ($r=-.39, p<.01$)。直感的に想像されるように、ミーティングに対する苦手意識が強い人ほど、発言が難しくなる規模が小さくなる。

3. 論理的思考メソッドの使用

次に、回答者たちがミーティングの際中や準備の時に、論理的思考に関するメソッドをどの程度使用しているのかについて尋ねた³⁵⁾。ここでは、上記のミーティング時における発言の得手不得手による2群を分析に用いる。

まず、ロジックツリーの使用は図1のようになった。図中の棒グラフは度数、折れ線グラフは各群内における度数の割合を表している。折れ線グラフによって、各群内に占める使用状況の割合を比較すると、ロジックツリーを「あまり使わない」人では発言苦手群の方が大きいのに対して、「使う」人では発言得意群の方が大きい³⁶⁾。この傾向はMECE(図2)、マインドマップ(図3)、5W1H(図10)においても同様である。

KJ法(図5)とポートフォリオ(図8)は、「たまに使う」人の割合が、発言得意群の方が大きい。マトリックス(図9)は「使う」、および「たまに使う」人の割合が発言得意群の方が大きい、「よく使う」人は発言苦手群の方がわずかに多い。ベン図(図6)

とレーダーチャート(図7)については、発言の得手不得手の間で使用頻度はほとんど変わらない。そして、5W1H(図10)は、発言苦手群でも知らないと回答した人の割合は少ないが、発言得意群に比して「あまり使わない」人が多く、「使う」人は少ない。

以上の結果をまとめると、発言が得意であるという人の方が、論理的思考のメソッドを用いている傾向が若干みられるものの、明確な差があるとはいえない。また、マインドマップ(図3)、ベン図(図6)、レーダーチャート(図7)、ポートフォリオ(図8)は、発言の得手不得手にかかわらず、それぞれ群内の3割近くの方が内容を知らない。MECE(図2)は、発言が得意という人でも5分の1近くがその内容を知らず、群内の割合は発言が苦手な人よりも多い。KJ法(図5)は過半数近く、マンダラート(図4)はそれぞれ過半数に認知されていない。本調査の回答者については、論理的思考メソッドの認知度がそれほど高くはないといえる。この点は、研修などによる改善の余地があるとも捉えうる。以上のことより、論理的思考のメソッドを使いこなせることが、ミーティングにおいて発言する際の十分条件であるとはいいい切れないが、使える方が発言につながる可能性はあるといえよう。

以下では、2つ以上のメソッドについて使う、もしくはよく使うと回答した人を「メソッド使用群」(N=28)、それ以外を「メソッド未使用群」(N=134)

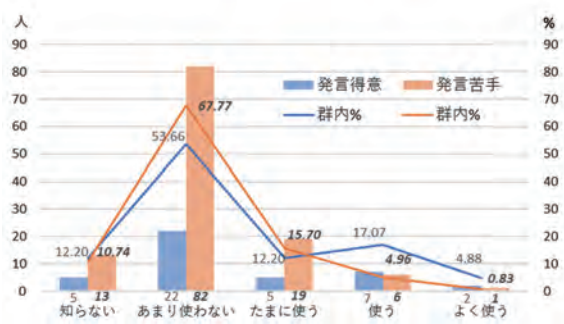


図1 ロジックツリーの個人的使用

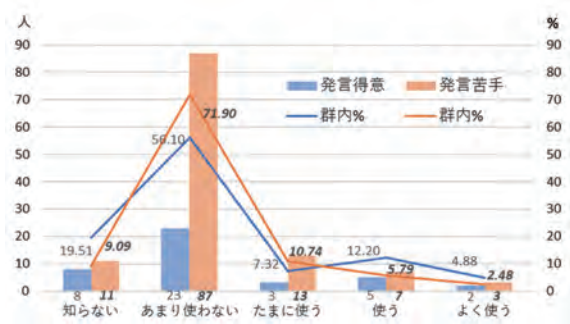


図2 MECEの個人的使用

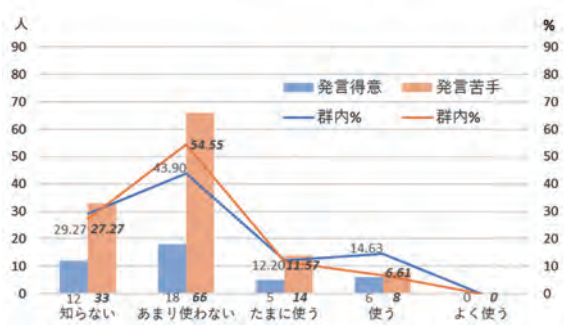


図3 マインドマップの個人的使用

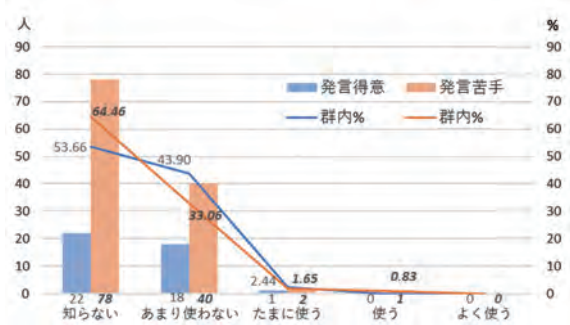


図4 マンダラートの個人的使用

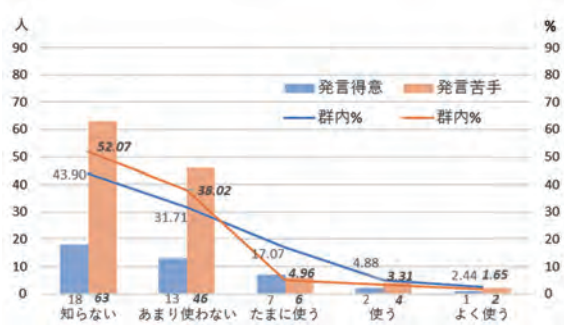


図5 KJ法の個人的使用

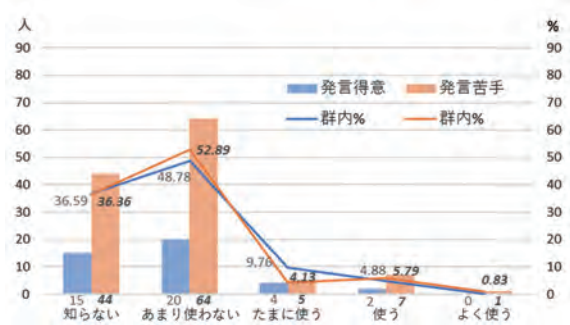


図6 ベン図の個人的使用

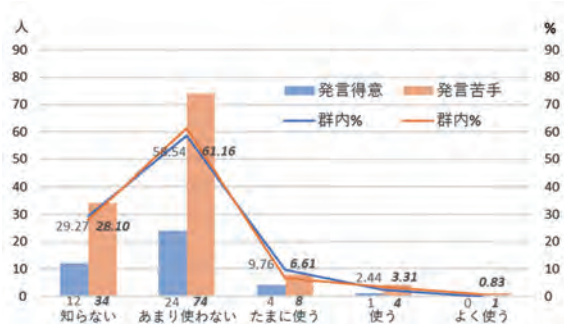


図7 レーダーチャートの個人的使用

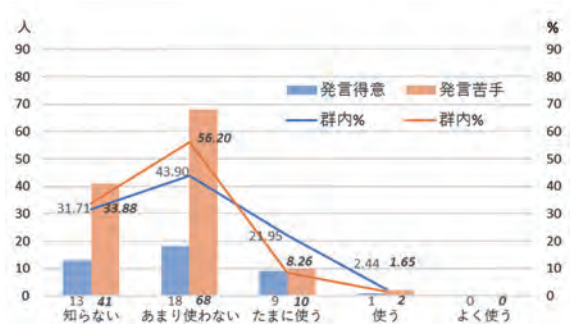


図8 ポートフォリオの個人的使用

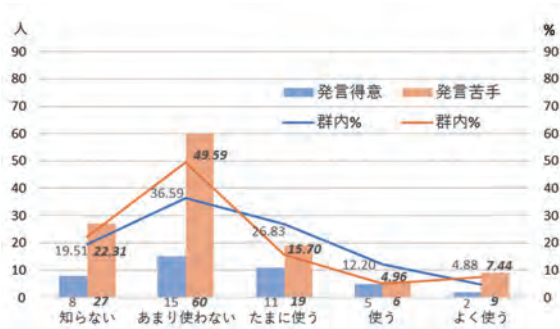


図9 マトリックスの個人的使用

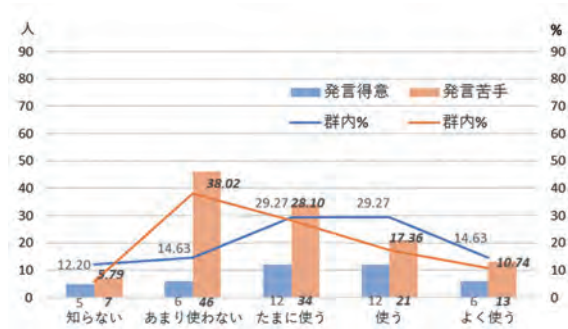


図10 5W1Hの個人的使用

として、適宜分析に用いる。

4. 発言に関わる事柄の得手不得手

質問票では、ミーティングの際に各自が行うことについての得手不得手も尋ねた。図11～13の中に示している数字はいずれも「発言得意 (N=41)」「発言苦手 (N=121)」「メソッド使用 (N=28)」「メソッド未使用 (N=134)」の各群内における各選択肢の回答割合を示している。選択肢については、「1:得意」から「5:苦手」までのリッカート5点尺度で尋ねている。

まず、ミーティングの際に「自分の意見を頭の中で整理すること」が得意か苦手かについて(図11)では、発言が得意な人の26.83%(11名)が頭の中での意見の整理を得意と答えているのに対して、発言が苦手な人ではそれを得意と答えたのは4.96%(6名)に過ぎなかった。発言得意群では、「どちらかと言えば得意」をピークに右肩下りの形状となったが、発言苦手群では、2つの山がみられる形となった。ここからは、頭の中で意見を整理することができて、発言には至らない人の存在が垣間みえる。

破線と白抜き数字で示したメソッドの使用については、意見の整理が「得意」と答えている人については、使用している人の割合がわずかに高く、「どちら

でもない」でその数字が逆転しているが、整理が「苦手」ではまたメソッドを使用している人の割合が高くなっている。発言得意群と苦手群、メソッド使用群と未使用群の間でそれぞれt検定を行ったところ、得意群と苦手群の間では、0.1%水準で有意な差がみられたが(得意群平均値=2.22, 苦手群平均値=3.01, $t=4.07$, $p<.001$)、メソッド使用群と未使用群の間の差はみられなかった(使用群平均値=2.71, 未使用群平均値=2.83, $t=-.49$, $p>.10$)。

次に、ミーティングの際に「たくさんのアイデアを出すこと」が得意かどうかを尋ねた(図12)。「得意」な人については、メソッドを使用している人の割合が高いが、「どちらかと言えば得意」な人はメソッドを使用していない人の割合が高く、メソッドの使用がアイデア出しにつながっているとはいえない。t検定でも有意な差はみられなかった(使用群平均値=2.93, 未使用群平均値=3.01, $t=-.36$, $p>.10$)。一方、発言が得意な人は苦手という人よりもアイデアを出すことを得意としている傾向がみられた(得意群平均値=2.39, 苦手群平均値=3.20, $t=4.54$, $p<.001$)。

図11, 図12の結果より、アイデアをたくさん出し、自分の意見を頭の中で整理することが、ミーティングにおける発言につながっている可能性が垣間みられた。

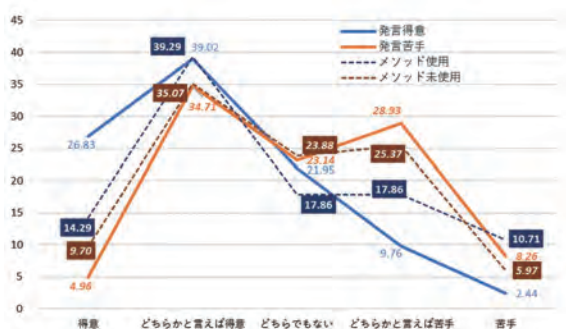


図11 自分の意見を頭の中で整理することの得手不得手

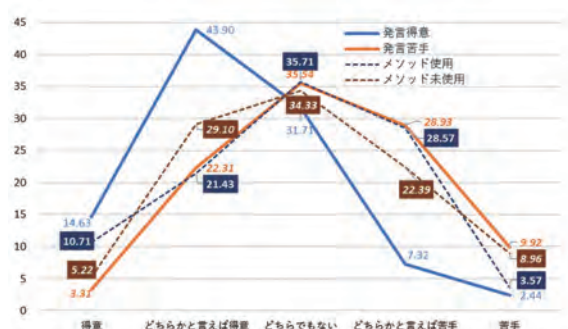


図12 たくさんのアイデアを出すことの手得手不得手

図13はミーティングの際に「話を理解すること」に関する回答傾向を示している。ここでも、発言得意群と苦手群の間で1%水準の有意な差がみられた(得意群平均値=2.20, 苦手群平均値=2.64, $t=2.72$, $p<.01$)。メソッド使用群と未使用群では、有意差はみられないが(使用群平均値=2.32, 未使用群平均値=2.57, $t=-1.31$, $p>.10$)、使用群において話の理解を「得意」とする人の割合が高い。また、全体的に自分の意見の整理(図11)、アイデア出し(図12)と比べて、話の理解は苦手とする人が少なかった。

最後に、図11から図13に示した事柄にその他の項目も加えて、ミーティングにおける発言に影響する要因を明らかにするための重回帰分析を行った(表6)。従属変数は、ミーティングの構成メンバーに関する「自分と年代や立場の「異なる」人のいるミーティングにおいて、自分から発言できる」「自分と年代や立場の「近い」人とのミーティングにおいて、自分から発言できる」、および規模に関する「少人数(10人未満)のミーティングにおいて、自分から発言できる」「大人数(10人以上)のミーティングにおいて、自分から発言できる」の4項目を設定した。それぞれ「1:当てはまらない」から「5:当てはまる」のリッカート5段階尺度で尋ね、発言できなさの程度を示すために逆転項目として扱った。

まず、「自分と年代や立場の「異なる」人のいるミーティングにおいて、自分から発言できる(逆転)」については、「自分の意見やアイデアが思いつかない」が5%水準、「注目されるのが怖い」が1%水準でそれぞれ有意な正の影響を示している。次に「自分と年代や立場の「近い」人とのミーティングにおいて、自分から発言できる(逆転)」を従属変数とした場合は、「自分の意見やアイデアが思いつかない」と「会話することが苦手である」がそれぞれ5%水準で正の影響を及ぼしていた。

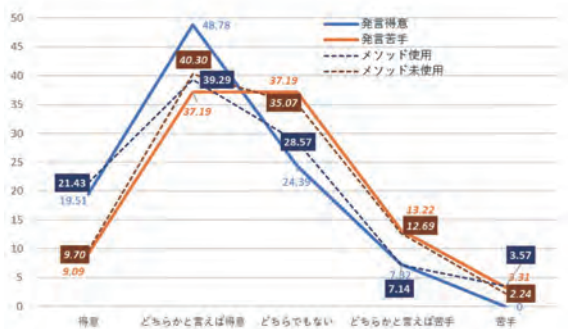


図13 話を理解することの得手不得手

これらより、ミーティングの規模を問わない場合には、発言できるかどうかには、意見やアイデアを思いつけるかどうかという個人的能力が影響していることが推測される。また、年代や立場の近い人とのミーティングであっても、そもそも会話が苦手であれば、やはり発言することは難しくなる。図11と図12の分析で述べたように、本稿の調査ではアイデア出しや意見の整理にメソッドの使用が有効であることは実証されなかったが、発言に値するような意見やアイデアを思いつくためのスキルを身につけることの必要性が垣間みえているといえよう。

年代や立場の異なる人とのミーティングについては、注目されることへの恐れが有意水準1%で、最も強く影響していた。ここには、上司・先輩と部下の関係性が、ミーティングにおける発言も含めた振る舞いを査定されるように感じさせるようなものである可能性がみられる。ミーティングの場に心理的安全性を築くことが必要と考えられる(Edmondson, 1999)。また、第2節の表3で示したように、ミーティングにおける役割がない人が少なくないことを考慮すると、ミーティングには参加するだけで、発言の経験が乏しい可能性も考えられる。過度な負担をかけない形で、注目される経験を与える仕掛けが必要かもしれない。

次に、「少人数(10人未満)のミーティングにおいて、自分から発言できる(逆転)」については、「発言するタイミングがわからない」が5%水準で正の影響を及ぼしていた。そして、「大人数(10人以上)のミーティングにおいて、自分から発言できる(逆転)」については「発言するタイミングがわからない」が0.1%水準で、「情報共有や進捗の確認ばかりで、意見を出す機会がない」が5%水準でそれぞれ正の影響を及ぼしている。10%水準のため参考程度になるが、「自分の意見やアイデアが思いつかない」については負の影響がみられた。また、統制変数として投入した若手(34歳以下)であることが5%水準で正の影響、メソッドを使用していることが同じく5%水準の負の影響をそれぞれ及ぼしている。

まず、前述のミーティング参加者の年代や立場に関する分析との比較でいえば、参加人数を従属変数にすると、回答者にとって発言のタイミングが課題になることがわかる。次に、10人以上のミーティングは、意見を求められる場というよりはむしろ、情報共有や進捗の確認のために設定されている可能性がある³⁷⁾。そのような場では、当事者意識をもって意見を述べることは難しいのかもしれない。10%水準の有意性で

表 6 ミーティングにおける発言に影響する要因の重回帰分析

従属変数：	自分と年代や立場の「異なる」人のあるミーティングにおいて、自分から発言できる(逆転)	自分と年代や立場の「近い」人とのミーティングにおいて、自分から発言できる(逆転)	少人数(10人未満)のミーティングにおいて、自分から発言できる(逆転)	大人数(10人以上)のミーティングにおいて、自分から発言できる(逆転)
若手(34歳以下)ダミー： 1=34歳以下	0.03	0.09	0.12 +	0.14 *
メソッド利用ダミー： 1=メソッド利用者	-0.05	0.02	-0.03	-0.13 *
自分の意見やアイデアが 思いつかない	0.21 *	0.21 *	0.06	-0.14 +
情報共有や進捗の確認ばかり で、意見を出す機会がない	-0.01	-0.06	0.12	0.22 *
会話することが苦手である	0.07	0.21 *	-0.04	-0.07
指名や役割にかかわらず、 いつも同じ人が発言している	-0.05	0.12	-0.08	-0.07
周りの目が気になる	0.01	-0.11	0.00	0.15
会話の内容が理解できない	0.01	-0.16	0.09	-0.05
情報共有や進捗の確認ばかり で、意見を出す余裕がない	0.11	0.06	-0.06	0.17 +
自分の意見を否定される のが怖い	0.08	0.11	0.12	0.00
発言するタイミングが わからない	0.01	-0.01	0.25 *	0.32 ***
周りの意見に圧倒される	0.08	-0.01	-0.02	0.02
注目されるのが怖い	0.27 **	0.14	0.18	0.16
R ²	0.43	0.22	0.33	0.49
調整済R ²	0.38	0.15	0.28	0.45

注：値は標準化係数 (β)。***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, +: $p < .10$

あったが、「自分の意見やアイデアが思いつかない」について負の影響がみられたことを加味すると、そのような場では、何らかの意見を思いついた人ほど場の空気を読んで発言しておらず、逆に特に意見のない人が勢いで話しているという情景が想像される。

5. おわりに

本論は、成熟研の学生メンバーが実施した、ミーティングでの発言に関する質問票調査で得られたデータを用いた統計分析のまとめであった。協力企業である VSN 社の従業員の回答が 8 割以上を占めるというサンプル・バイアスはあるものの、就労者がミーティングにおいて発言できるかどうかについて、直感的に想像されるいくつかの事柄が実証された。本論の基になる調査の関心事である論理的思考メソッドの使用が、ミーティングにおける発言に影響しているという結果は得られなかった。しかし、アイデアを思いついたり、意見を頭の中でまとめたりすることができ

ば、発言につながりうることは示されたため、それらにつながるメソッドの習得には、やはり意義があるのではないかと推測される。

注

- 33) 年齢に関する設問には、未回答者が 1 名あった。
- 34) 調査実施時は COVID-19 が流行しており、回答者の多くがオンラインでのミーティングを経験していたことには留意されたい（大阪府では、2021 年 8 月 2 日から 9 月末まで緊急事態宣言が発令されていた）。調査時前 1 か月のオンライン・ミーティングの割合は、91% 以上の者が最も多く 92 名 (56.79%)、次いで 61 ~ 90% が 41 名 (25.31%) であった。
- 35) 質問票では、10 のメソッドのチームでの使用頻度も尋ねたが、すべてにおいて個人的使用よりもややその機会が少ないという傾向がみられた。
- 36) t 検定による平均の差の比較を便宜的に行ったところ、5% 水準で有意な差がみられた。
- 37) この解釈に際しては、回答者の 8 割超が VSN 社の従業員であることには留意されたい。

プロジェクトレポート

学生チームによる小豆島プロジェクトの活動報告 2022

—7年目、新たな交流企画の提案と取り組み—

中川 啓子

I. 過年度の取り組みについて

追手門学院大学（以下、大学という）成熟社会研究所（以下、成熟研という）が取り組む地域連携プログラムの一環として、2016年度より学生研究員と共に行われている小豆島プロジェクトは、成熟研を代表する事業の一つとなっている。本プロジェクトについては、過去に3回、以下のタイトルで報告レポートを掲載した。

-
- ① 学生チームによる小豆島調査—Iターン・Uターン、産業から瀬戸芸まで～島外の若者視点を通じて—（中川、追手門学院大学成熟社会研究所紀要第1号、2017）
 - ② 学生チームによる小豆島プロジェクトの活動記録—赤しそクラフトビール商品化までの産学連携と学生の成長の軌跡—（中川、追手門学院大学成熟社会研究所紀要第5号、2021）
 - ③ 学生チームによる「小豆島プロジェクト」6年目の進化と変化—コラボクラフトビールがふるさと納税返礼品になるまで—（中川、追手門学院大学成熟社会研究所紀要第6号、2022）
-

①は、小豆島と関わるきっかけとなった共同研究調査についての報告を中心としたもので、この時点ではあくまで単発的調査であり、継続的なものとなることはまだ想定されていなかった。しかしその後、調査に参加した学生研究員らに芽生えた「島の課題解決（秋祭りでの人手不足など）に自分たちが何かできることはないか」という思いを軸に、大学が立地する茨木市

と小豆島町が姉妹都市であることも盛り込みながら、継続プロジェクトとして動いていくこととなった。それがコラボクラフトビールにどう繋がっていったのかについては②のレポートに詳細を記しているのでこちらを参考にされたい。

③については、②で「クラフトビール」というコラボ企画を実現した後の変化を追っている。こういった商品開発やコラボ企画は、商品化がゴールになってしまうこともある。しかし本プロジェクトの「しそとことん」については、商品化翌年は副原料の赤しそ量を大幅に増やしてより色味や香りの濃い仕上がりになったことで、「しそとことん2021」として、ラベルデザインにも少し手を入れた。そのあたりの軌跡を③に記している。

II. 2022年度の活動について

2-1. メンバー構成

2023年1月現在のメンバー構成は、学部生8名（3年生1名、2年生7名）と大学院生1名を合わせて合計9名である。このうち学部生7名は、地域創造学部の授業での活動プレゼンを見て参加立候補した学生である（活動経緯は前述③のレポートにも記載）。その後、更に参加を強く希望する小豆島出身の学部生1名が参加した。8名は世代としては4期生（プロジェクト発足から4代目）となる。また2022年春に卒業後、大学院に進学した3期生メンバー1名がチューター的な立場になって、サポートメインで参加しており、合計9名で2022年度の取り組みを実施してきた。

2-2. 活動内容

2022年度の活動は、「茨木・小豆島・大学生の新たな交流」という本プロジェクトのコンセプトに沿って多様な挑戦があった。主な取り組みは以下の通りである。（ ）内は関係協力連携先となっている。

(1)	6/23 赤しそ葉摘みワークショップ（農事組合法人 見山の郷交流施設組合）
(2)	10/8 島民とのオンライン運動会（小豆島社会福祉法人 サンシャイン会）
(3)	10/23・12/23 地産地消コラボメニュー開発・提供（ヤマロク醤油、コモンファクトリー）
(4)	11/19-20 茨木市農業祭への参加・パネル展示（茨木市 文化振興課・北部整備推進課, 小豆島町商工観光課）
(5)	12/10 ビール仕込み体験（まめまめびーる）
(6)	12/11 島の子供たちとの交流会「だいがくせいとあそぼ！」（ぼこあぼこ/一般社団法人小豆島子ども若者支援機構）

以下、各取り組み内容について簡単に説明する。

(1) 赤しそ葉摘みワークショップ

コラボクラフトビールの副原料となる赤しその下処理を学生の手で行う年に一度のワークショップとなっている。赤しその葉を枝から全て切り離して、冷蔵便で小豆島に発送する。赤しそ量が多く、ご夫婦で切り盛りされているビール醸造所では対応できない作業で



図 01 赤しそ葉摘みワークショップチラシ



写真 01 ワークショップの様子

あるため、学生参加型で実施している。毎年協力いただいている茨木・見山の郷に、前年の2倍量の32kgを発注し、収穫時期に合わせて、大学の教室を使用して開催した。地域創造学部のアゼミからまとまった参加があったことで、人数は30名を超え、数時間後には大量の赤しその葉の山が出来上がった。

大学に居ながらにしてビール作りの一端を学生が担うことができる貴重な体験イベントとなっている。（図 01、写真 01）

(2) 島民とのオンライン運動会

島の高齢者施設との共催で、小豆島と茨木をオンライン（Zoom, Instagram Live 配信）で繋いで、運動会を行った。「運動会」といっても激しいものではなく、「①傘玉入れ（逆さまにした傘をカゴに見立てて玉入れ）」「②箱の中身はなんだろう？（学生が箱の中身を触って当てる）」「③スプーンリレー（座った状態でスプーンを使ってピンポン玉をリレーする）」といった高齢者にも参加しやすい競技、時間にして1時間程度となっている。また、ハンデをつけるために、学生メンバーは高齢者体験キット（おまりのついたベストなど）を茨木市社会福祉協議会から借りて着用し臨んだ。

開会式と閉会式もあり、はちまきやたすきも準備して場を盛り上げ、島側の高齢者も楽しく参加いただいた。後日、毎日新聞 web 版に記事も掲載された。

今回、大学側はプロジェクトの学生メンバーのみであったが、今後は他の学生にも呼びかけて開催の輪を広げて継続していきたいと考えている。（図 02、写真 02）



図 02 オンラインスポーツ大会チラシ



写真 02 オンラインスポーツ大会の様子（大学会場）

(3) 地産地消コラボメニュー開発・提供

10月及び12月に、茨木市産と小豆島産の食材等を使用したコラボメニューを、茨木市内の店舗で期間限定にて提供した。メニューは次の通りである。

- 10/23（昼間）提供 ふわふわだし巻きサンド 600円（小豆島・ヤマロク醤油「鶴醬（つるびしお）」×茨木産「卵・パン」）@晴天ニ恵マレテ
- 12/23（夜間）提供 特製たこ焼き6個 500円（小豆島・ヤマロク醤油「鶴醬」×茨木・山崎屋「鰹節」によるオリジナル鰹節醤油味）@茨木ラーメン

提供店舗はいずれも茨木市役所に隣接する広場「IBALAB@広場」のコモンファクトリーの建物で期間や曜日限定でオープンする。市内中心部でもあり、人通りや車通りの多い場所である。ただ12月23日の実施日は強い寒気の到来で大阪は最低気温2度、かつ強風という、悪条件の気候となり、集客には苦勞することとなった。

コラボメニューの実現にあたっては、いばらき応援団長（茨木市観光協会認定）である赤田裕明氏の協力が大きい。赤田氏は店舗の母体となっている「コモンファクトリー」の運営に関わられており、学生からのコラボメニュー提案を快く受け入れ、メニューの商品化・販売を担ってくださった。

なお、この企画は、茨木市内での交流活動を強化するという役割も果たしている。（写真03、写真04）



写真 03 コラボメニュー第1弾
（プロジェクト Instagram より）



写真 04 コラボメニュー第2弾
（プロジェクト Instagram より）

(4) 茨木市農業祭への参加・パネル展示

茨木市が主催する都市と農村の交流イベント「茨木市農業祭」が11月の土日2日間で開催された。茨木市民が多数来訪するこのイベントには、例年姉妹都市である小豆島町からも出店している。プロジェクトとして何か協力連携ができないかと学生と茨木市とで打合せを進めていく中で、「ブース出展（農業振興×市民活動推進枠）」と「小豆島町出店ブースの手伝い」を実施することが決まった。

プロジェクトブースではパネル展示を実施した。商品を持っていない（この時点では2022年度分のクラフトビールはまだ完成していない）プロジェクトとしては販売が難しかったためである。2016年から続く約7年の活動・実績について、写真を多用して学生メンバーのコメントを添えた10枚のパネルに仕上げた。なお、後日、パネルデータを転用して島の活動紹介冊子（A5サイズのビジュアルブックおよびPDF版）とし、活動PRに使用している。

小豆島町ブースについては、出店された小豆島手延素麺協同組合や丸島醤油などの手伝いに入り、呼び込みや接客に対応した。メンバーがまとめた活動報告の中には「小豆島町の方々から最後に言われた『ありがとう』の言葉が活動の原動力だ」という記載があった。手伝いを通じた島の方々との交流を得て学生らが得たものも大きいと感じる。（写真05）



写真05 茨木市農業祭パネル展示ブース前での集合写真

(5) ビール仕込み体験

先に(1)で述べた「赤しそ葉摘みワークショップ」で準備した赤しそを副原料としたクラフトビールの仕込みが12月に行われた。学生メンバー7名が島に渡り、麦芽の粉碎や煮沸処理などの仕込み作業を手伝った。

今回仕込んだビールは前回、前々回のものとは違い

「Philly Sour 酵母」を使用して乳酸菌発酵させた「サワービール」となっている。赤しそも倍量で使用しており、より爽やかで赤しその香りが立つ仕上がりが期待されている。中身に合わせてラベルのデザインもリニューアルし、サワーらしい水色が基調となっている。（ビールは3月20日発売開始）（写真06、写真07、図03）



写真06、07 ビール仕込み作業の様子



図03 新しいビールラベルのデザイン

(6) 島の子どもたちとの交流会

一般社団法人小豆島子ども・若者支援機構と協力して実施した、島の子どもたち（と保護者）との交流イ

ペントである。ビールの仕込みで小豆島に渡ったタイミングで対面開催した。

内容としては、プロジェクトについてのプレゼン、屋内外での子どもたちとの遊び・ゲームによる交流、となっている。会場となった「ほこあぼこ」は、“大人も子どもも気軽に集える無料のコワーキングスペース”で、普段は子ども食堂や子育てカフェなども開催している。

今回の交流は、島の（企業・店舗ではない）一般の方から直接話を聞く機会、そして茨木市と小豆島町が姉妹都市であることを島民に知っていただく機会になった。（図 04、写真 08、写真 09）



図 04 子どもたちとの交流イベントチラシ



写真 08 交流イベントで発表する学生ら



写真 09 遊びを通じて子どもと交流する学生

なお、(2) オンライン運動会と(6) 子どもたちとの交流会については、島民（島出身の学生メンバーの紹介によるもので、島で動画配信を行なっている若手の方）とのオンラインによるインタビュー（意見交換）をきっかけとして企画に繋がったものである。

2-3. メンバーの意識

学生らが作成した今年度の各種企画書に、次のような記載があった。

“今まではビールというツールを使用していたものの、(略) ビールのみで広めていくには限界がある。”

コラボラフトビールの商品化は、成果としては目に見えて分かりやすく、また達成感もある。しかしながら本プロジェクトの目的は何度か述べている通り「ビールづくり」ではない。確かに、ビールは、島と茨木市と学生の交流と活性化を進めていくための、そしてプロジェクトを広く知ってもらうための大きなきっかけとなった。しかしメンバーは、プロジェクトを発展継続していくためには次のステップが必要であることを意識しており、それが、今年度の多様な企画実現に繋がったといえるのではないだろうか。

学生が作成したプロジェクト紹介チラシには、目指すゴールとして改めて「小豆島の秋まつりに参加する」と「小豆島でインターンシップを開始する」ことが明記された。これらを実現していくためにも、より一層の小豆島と茨木市と大学生の交流を深めてい

く必要性を学生らも感じていることと思う。

また、今期のメンバーの新しい取り組みとして、新聞スタイルの活動報告の作成についても触れておきたい。メンバーのアイデアで、連携先や協力先に活動を知ってもらうために、「壁新聞」のようなレイアウトの報告ペーパーを作成した。いわゆる「報告書」のような堅いものではなく、記事にコピー文を付けたり、時には4コマ漫画も入れて、分かりやすく楽しい仕様になっている。報告は【オンラインスポーツ大会】【コラボメニュー】【茨木市農業祭】の3種を発行した。(図 05-08)



図 05 プロジェクト紹介チラシ



図 06 新聞型の活動報告 (スポーツ大会編)



図 07 新聞型の活動報告 (コラボメニュー編)



図 08 新聞型の活動報告 (茨木市農業祭編)

Ⅲ. 成熟社会研究所の役割と今後に向けて

ここからはプロジェクトをサポートしている成熟研の役割について簡単に述べていきたい。

プロジェクト当初より成熟研は「学生の自主性・主体性を重んじる」というスタンスを貫いており、それは6年経った今でも変わっていない。学生がやりたい

ことをやっていい。ただしそれが「自己満足だけ」にならないように、「プロジェクトのコンセプトや目的を常に意識する」ことを、折りに触れてアドバイスしている。そして大学での各種申請、予算手続、広報支援などは成熟研が全面的にサポートする。

学生だけで思考が固まってしまうような時は、違う視点を少し入れることもある。ただし、学生に何かを伝える時、「アドバイス」「参考意見」に留めるようにして、「指示」にはならないように気を付けている。そして「失敗してもいい」という考えから、大人が成功に導くことはしない。

自分たちが「楽しい・やりたい」と思うことを企画にする。それが形になり関わった人に評価される。時には「失敗」することもある。これらの全ての体験が学生メンバーの自信と糧になり、次の企画に繋がっている。

小豆島プロジェクトはゼミとは違い正課授業ではないため、単位には全く影響がない。つまり、どれだけ活動しても成績に反映されることはない。学生は自由意志で参加しているが、今の学生メンバーは、自分たちで各企画のリーダーを決め、役割分担をし、お互いの長所短所を補い合い、それぞれがしっかりと「責任感」を持って活動に取り組んでいることを感じる。

授業ではできない経験が学生メンバーを成長させている。「若者の自立と成長」の場を提供するという成熟研のミッションが、実現されている現場ではないだろうか。

学生ゆえに、必ず世代交代が訪れる。今のメンバーが、次世代のメンバーに引き継ぎ、後輩を育てていくことで、今後プロジェクトの中に「成長の循環」が生まれるのではないかと期待している。そして大学（成熟研）としては、その現場に寄り添い、程よい距離感でサポートを行うことで、プロジェクトの継続と発展を成していきたいと考える。

最後に、小豆島プロジェクトの活動を支えていただいた小豆島と茨木市の連携先、協力先の皆様に、この場を借りてお礼を申し上げたい。

ト』6年目の進化と変化』『追手門学院大学成熟社会研究所紀要 第6号』

参考文献

- 中川啓子 (2017). 「学生チームによる小豆島調査」『追手門学院大学成熟社会研究所紀要 第1号』
- 中川啓子 (2021). 「学生チームによる小豆島プロジェクトの活動記録」『追手門学院大学成熟社会研究所紀要 第5号』
- 中川啓子 (2022). 「学生チームによる『小豆島プロジェク

成熟社会研究所の事業

研究所として2022年度に取り組んだ主な事業（プロジェクト）は、以下の3つである。

<p>学生のための ロジコミ・メソッドの開発 (ロジカルコミュニケーション)</p> <p>【2022年度の主な取り組み】 ・ロジコミ企業版プロジェクト（社会人向け冊子をHP公開）</p> <p>★「職場で使えるロジコミ・メソッド」の紹介・DLページ https://www.otemon.ac.jp/research/labo/seijuku/activity.html#rojikomi</p>	<p>参加型研究会の開催 シェアラボ共催企画の実施 (学生向け講演会)</p> <p>【2022年度の主な取り組み】 ・シェアラボの理念を継承する授業との共催企画を1回実施 ・所員の担当する授業（6/28 現代企業論）において、若手起業家（株式会社OTONA 代表取締役 大平友明氏）による学生向け講演会を開催</p>	<p>地域連携・交流事業 小豆島プロジェクト (産学官連携プロジェクト)</p> <p>【2022年度の主な取り組み】 ・赤しそ葉摘みワークショップ ・オンラインスポーツ大会 ・地産地消コラボメニュー企画 ・茨木市農業祭への出展参加 ・島の子どもたちとの交流会開催 ・赤しそクラフトビールサーバー「しそとことん」仕込作業参加 ・小豆島訪問調査活動の実施</p>
---	---	--

成熟社会研究所 活動報告

○：イベント・講座・講演 ◆：学生研究員による活動 ●：打合せ □：その他

2022	4.21	◆小豆島プロジェクト	全体ミーティング（2022年度の活動企画、広報SNS、勉強会について）
	6.9	◆小豆島プロジェクト	オンライン交流・打合せ会（小豆島在住・島原祥江さん①/動画配信者、ほこあぼこ）
	6.16	●成熟社会研究所 所員会議	
	6.23	◆○小豆島プロジェクト	赤しそ葉摘みワークショップ（総持寺キャンパス）
	6.28	○シェアラボ共催企画×現代企業論	〔経営学部・神吉直人准教授〕（講師 株式会社OTONA 代表取締役 大平友明氏）
	6.30	◆小豆島プロジェクト	オンライン交流・打合せ会（小豆島在住・川西剛さん/社会福祉法人サンシャイン会）
	7.7	◆小豆島プロジェクト	オンライン交流・打合せ会（小豆島在住・島原祥江さん②/動画配信者、ほこあぼこ）
	7.13	◆小豆島プロジェクト	学生ミーティング
	7.19	◆小豆島プロジェクト	学生ミーティング
	8.17	◆小豆島プロジェクト	学生ミーティング
	8.29	◆小豆島プロジェクト	学生ミーティング
	9.15	◆小豆島プロジェクト	学生ミーティング
	9.16	●成熟社会研究所 所員会議	
	9.28	◆小豆島プロジェクト	学生ミーティング
	10.5	◆小豆島プロジェクト	学生ミーティング
	10.6	◆○小豆島プロジェクト	オンラインスポーツ大会（共催：社会福祉法人サンシャイン会）
	10.23	◆○小豆島プロジェクト	地産地消コラボメニュー企画「ふわふわだし巻きサンド」販売（晴天ニ恵マレテ 於：IBALAB @広場 / 醤油=小豆島・ヤマロク醤油、卵等=茨木市産）
	9.8	◆小豆島プロジェクト	学生ミーティング（ビールラベル、SNSの運用について）
	10.26	□小豆島プロジェクト	メディア掲載（毎日新聞 WEB @大学） 大学倶楽部・追手門学院大 「小豆島の高齢者施設と合同でオンラインスポーツ大会を実施」
	11.8	◆小豆島プロジェクト	学生ミーティング
	11.10	□ロジコミ・メソッド企業版プロジェクト PDF 冊子	「職場で使えるロジコミ・メソッド」大学HPでの公開掲載
	11.17	◆小豆島プロジェクト	学生ミーティング
	11.19-20	◆○小豆島プロジェクト	茨木市農業祭 パネル展示・ブース手伝い（於：茨木市中央公園グラウンド/協力：茨木市文化振興課・北部整備推進課、小豆島町商工観光課、小豆島手延素麺共同組合、丸島醤油等）〔農業振興×市民活動推進枠〕
	11.24	◆小豆島プロジェクト	学生ミーティング
	12.10-11	◆○小豆島プロジェクト	小豆島訪問調査・フィールドワーク（仕込作業参加 於：小豆島・まめまめびーる）
	12.11	◆○小豆島プロジェクト	子どもたちとの交流イベント「だいがくせいとあそぼ!!」（協力：一般社団法人小豆島子ども・若者支援機構 於：小豆島・ほこあぼこ）
	12.20	◆小豆島プロジェクト	学生ミーティング
	12.23	◆○小豆島プロジェクト	地産地消コラボメニュー企画「特製たこ焼き」販売（茨城ラーメン 於：IBALAB @広場 / 醤油=小豆島・ヤマロク醤油、鰹節=茨木市・山崎屋）

2023	1.18	◆小豆島プロジェクト	学生ミーティング (次年度の活動について)
	3.15	◆小豆島プロジェクト	プロジェクト活動・広報用Tシャツ作成
	3.20	◆小豆島プロジェクト	新商品「しそとこサワー」発売 (赤しそサワービール)
	3.30	●成熟社会研究所 紀要7号の発行	



小豆島プロジェクト
(新商品「しそとこサワー」)
2023.3.20 発売



小豆島プロジェクト
(赤しそ葉摘みワークショップ)
2022.6.23



小豆島プロジェクト
(オンラインスポーツ大会)
2022.10.6



小豆島プロジェクト
(地産地消コラボメニュー販売)
2022.10.23



小豆島プロジェクト
(茨木市農業祭パネル展示)
2022.11.19-20



小豆島プロジェクト
(小豆島訪問調査活動)
2022.12.10-11



ロジコミ・メソッド企業版冊子
「職場で使えるロジコミ・メソッド」
2022.11.10 公開

シエラボ × 現代企業論

6月28日(火) 3限

会場: 安威キャンパス 5606教室

若手起業家編 講演+インタビュー
聞き手: 神吉直人(経営学部)

ゲストスピーカー
大平友明氏 (株式会社OTONA代表取締役)
(おおひらともあき)

昔川大学経済学部卒。在学中はバックパックで東南アジアを放浪したり、仲間たちとシニアハウスで暮らしたり。2016年、創業数年のFringe(現Umpos株式会社)に入社し、広告代理事業に専事。同社の子会社として創業し、2019年同社の子会社化に伴いFringe Web取締役へ就任。翌年、代表取締役となる。在職中に始めたInstagram「オトナ旅」は26.5万フォロワーを獲得 (@otonalife_japan)。2021年、放浪の高山で起業。趣味が高じた日本酒づくりのプロジェクトはクラウドファンディングで半年に目標金額を達成した。

お申し込みはコチラから!

※コロナ感染対策のため、事前にご座席指定を行います。予約必須。締切27日18時

お問い合わせ (神吉)
n-kanki@otemon.ac.jp
メールでのお申し込みもOKです。

幻の酒米
mizukaze Projectmono
醸造 1 週間 3000 万円突破

夏になっただけはもてるん。『酒米はないけど、そりゃ可愛いのいる』というくらい、可愛らしい酒米を飲んでもらった。あなたも! 貴族の出会いを大切に、経営学部以外の学生のみならず、教職員の方々のご参加もお待ちしております。

シエラボ共催企画×現代企業論
2022.6.28 チラシ

執筆者紹介（掲載順）

齊藤 一誠（追手門学院大学 成熟社会研究所 所長，国際教養学部教授）
神吉 直人（追手門学院大学 成熟社会研究所 所員，経営学部准教授）
中川 啓子（追手門学院大学 成熟社会研究所 所員）

追手門学院大学 成熟社会研究所 所員

所 長 齊藤 一誠（追手門学院大学 国際教養学部教授）
所 員 村上 亨（追手門学院大学 経済学部教授）
所 員 今堀 洋子（追手門学院大学 地域創造学部准教授）
所 員 神吉 直人（追手門学院大学 経営学部准教授）
所 員 中川 啓子
所 員 神谷 聡子

成熟社会研究所紀要 第7号

2023年3月30日 発行

発行所 追手門学院大学 成熟社会研究所
〒567-8502 大阪府茨木市西安威2丁目1-15
電話 (072) 665-5068

印刷所 友野印刷株式会社
